　　　　　　正夢

２０２５年１２月５日に東京で大地震が起こる。その規模は未だかつてないもので大量の犠牲者が出る。

福田蒼空は自身の特殊能力である「正夢」で東京に大地震が起こる１ヶ月以上前の１１月１日に察知する。

蒼空はこれまでにその正夢の能力でいろいろな不幸なことを見て、そしてその不幸を回避しようとしてきた。

大地震の正夢についても、なんとかするために、蒼空の正夢の能力について知っている石川優希と柴田直充とともに対策を考える。

そして、ある時１つの対策方法を思い浮かぶ。それは警察という大組織を巻き込むことだ。

そのために予言の動画を作成した。その予言の動画は１２月５日の９時ちょうどに大地震が起こることを説明する内容だ。

その予言の動画をネットにあげ、優希の協力で５００万回以上の再生数を稼ぐことに成功した。その動画は市民の恐怖を煽る不適切な内容ということで蒼空の予定通りに警察に目をつけられる。

そして、１１月１７日に警察官の１人が蒼空のもとにやってきた。蒼空は警察署に連行され、なぜこのような動画をあげたのかと尋問される。

動画をあげた理由は１２月５日に東京の人に避難してもらいたいからということを伝え、自身の正夢で起きた過去について警察官に話しをした。

１度目の正夢が、７歳の時のある祭りの日に迷子になり泣いたこと、２度目の正夢が小学５年の時に林間学校で女の子が蛇に噛まれるのを防ぐこと、３度目の正夢が、中学２年の時に、妊娠している担任の教師が階段からつまずいて流産するのを防ぐこと、４度目の正夢が高校２年で、友達が路上でケンカしたことにより、空手の大会にでられなくなるのを防ぐこと。これらについて蒼空は警察官に話しをした。

しかし、それらの話しは警察官に信じてもらえなかった。だがこれら４つ意外にも蒼空は大地震の正夢を見てから２回新しい正夢をみていた。１つは警察がまだ世間に公表していない解決済みの事件、そしてもう１つがまだ未解決の事件で、警察官の１人が痴漢冤罪の手助けをしているというものだった。蒼空たちは痴漢冤罪の事件について警察に蒼空が捕まる前に徹底的に証拠を集めて交渉材料とした。交渉はうまくいき、そして運良くその尋問部屋にいた横山という政府の関係者の力により、無事東京から大地震が来る前に人々を避難させることに成功する。

「お前は一体自分が何をしたのかわかっているのか」

「……一体何をしたというのですか」

「この後に及んでシラを着るきか。この動画に写っているのはお前だろう」 怒っていた警察官の小西慶太はそばで書紀を担当しているもう１人の警察官に指示を出した。もう１人の警察官の柴田直充はパソコンを立ち上げて、ある動画を見せてくる。

その動画には、狐のお面みたいなものをつけた人が出て来ていた。 場所はどこかの部屋の中みたいだ。その部屋の様子は家具も置いてあり、普段そこで生活しているのだろうなと思わせる。

「皆さん初めまして。そうですね……私のことをわかりやすく認識してもらうために、フューチャーフォックスとでも名乗っておきましょう。なぜ私がこのような動画をあげたのかというと、東京の皆さんに危機が迫っていることを知ってもらうためです。１１月１日に私はある未来の出来事を見ました。それは、来月１２月５日の金曜日、午前９時に、未だかつてない大地震が起きて、東京中が大パニックになるというものです。私の見た未来では犠牲者も大量に出てしまいます。その危機を知らせるために私はこちらの動画を上げさせていただきました。どうか１２月５日に東京にだれもいないことを祈っています。それがこの動画を上げた私の願いです。皆さんの懸命な判断をよろしくお願いします」

そんな内容の動画が３分くらいで流された。 動画を観終えた後、小西はこちらに振り向 いてきた。

「こっちはすでに調べはついている。このフューチャーフォックスと名乗っている人物はお前だろ。言い逃れはできないぞ」

すでに逮捕状が出ており尋問部屋にいるので言い逃れをするつもりはなかった。ただ言い逃れできないことはわかっていたが、いたずら半分の気持ちで小西に聞いてみることにした。

「ちょっと、何を言っているのですか。言い逃れできないというのはどういうことでしょうか」

小西はそんなこともわからないのかという顔をした。わかって聞いたつもりだったが、 その小西の顔には少しイラッとした。

「まず、この部屋だがお前の家の中に上がらせてもらった時、家具からその配置まで何から何まで同じ配置だ。写真にも撮らせてもらっている。それに、この声は変声機も何も使用していない。お前本来の声だ。声の照合をすれば確実だが、わざわざ照合をしなくても認めるだろ？それに、この動画の主のフューチャーフォックスと名乗っている人物の服装とお前の服装は同じだ。まだ他にもこの動画の主とお前の特徴には類似点があるが、聞くか？」

どうやら警察は俺の想像以上にこのフューチャーフォックスなる人物について調べているようだ。確かにフューチャフォックスの服装と今の俺の服装は同じだ。まぁ、服装はわざと同じにしているがそれをいうつもりはない。

話を聞いていた俺は小西の真剣な顔を見て、確かに言い逃れはできないなと思った。予想外に早く警察が俺にたどり着いたことに、「はぁ」と少しため息をつきたい気分になった。

事実この動画を上げたのは他でもない俺こと福田蒼空だ。

「わかりました。言い逃れはしません。この動画を上げたのは俺です」

「ふん、ようやく認めたようだな。では、なぜこんなふざけた動画を上げたんだ。しかも こんなふざけた内容で５００万以上の再生回数になっているなんてな。さぞ儲けたんじゃ ないのか」

「そうですね。上げた理由に関しては長くなるので、先に後者のどうでもいい内容の方か ら答えておきましょう。お金は全く儲けていませんよ。ああいうのは広告費用で稼ぐもの で、俺は動画に広告なんて設定していません。そして今のところ、これ以上動画を上げる予定もありません。ちなみに、５００万以上の 再生回数はネット関係に有力なツテを使ったお陰でその視聴数になりました」

少し尋問している警察官が怪訝な表情をする。

「ツテとは一体なんだ。お仲間がいるのか。だとしたらそいつについても吐いておいた方 が身のためだぞ」

「ツテについては答える気はありません。それにいずれわかることです」

俺は一旦頭を整理するためにここにきた状況のことを思い出していた。 さて、まずここがどこかというと警察署の尋問部屋だ。狭いし少し暗めの部屋だ。今は昼間の１２時頃だが、よくテレビの刑事ドラマとかで出てくるカツ丼とかももちろん用意されていない。

なぜ俺が警察署の尋問部屋にいるのか。今朝の９時ごろ、俺は普通に家にいていつも通りの日常を送っていた。玄関チャイムの音がなって外に出てみると、現在尋問している警 察官の小西が立っていた。

「あなたがこの家の主の福田さんですね。私はこういうものです」

小西は警察手帳を見せてきた。俺は少し驚いたが冷静に対応するよう心がけた。

「はい、私は福田で確かにこの家に住んでいます。それで、警察が一体なんの御用でしょ うか」

「あなたに逮捕状が出ています。警察署にご同行願えますか」

落ち着いた様子で小西は言ってきた。逮捕状についてだが身に覚えはある。あの東京大地震という予言の動画を上げたことに関係があるのだろう。

ただ身に覚えはあったのだが、２点ほど気になることがあった。１点目はあの動画を上げることで逮捕状まで出るのかと思った。少し警察で話すことにはなるなと思っていたがどうやら自分の見積もりが甘かったらしい。２点目は、警察が来るのがいくらなんでも早すぎると思った。俺が動画を上げたのは１１月１２日の朝だ。そして今日は１１月１７日だ。あの動画からまだ５日しか経っていない。あの動画だけでは、俺こと福田蒼空を特定することも俺がどこに住んでいるかもわからないはずだ。俺の予想では警察が訪れるのはまだ数日はかかると思っていた。

とりあえず疑問に思ったので目の前にいる小西という警察官に聞いてみることにした。 「何故俺に逮捕状が出ているのでしょうか。身に覚えがないのですが」

小西は警察手帳を確認して答えた。

「フューチャーフォックスなる人物についてご存じでしょうか。こちらがそのフューチャーフォックスと名乗る人物の写真です」

小西は警察手帳に挟んでいる写真を見せてきた。その写真を見た俺はやはり動画のことかと思い答えた。

「フューチャーフォックスって謎の予言者のことですよね。それなら俺も動画で観ました よ」

小西は怪訝そうな顔をした。

「実は、このフューチャーフォックスと名乗る人物が住んでいる部屋は、以前うちの署の ものが住んでいたことがありまして……それでそのマンションに住んでいるものを見張っておりましたが、最有力者はあなたでした。そこで福田さん。我々警察はあなたを徹 底的に調査して、こうして逮捕まで漕ぎ着けたわけです」

俺はその話を聞いて警察が完全にその予言者について特定していることに驚いた。

しかし、まさか前にこのマンションに住んでいた警察官がいたとは。それは予想できな い。

だが、間取りを見ただけで以前住んでいたとわかるものなのか。それとも何かあの動画 には写っていたのだろうか。

疑問もあるが、こうして警察が自分のところまで訪ねて来てしまったのでそれを知っても意味がない。警察が来るタイミングは少し想定外だったが、念のため早めに準備は済ませていたためこの家でやることは一つだけだ。

だからその用事を済ませば、問題なく警察署に行くことができる。

「わかりました。警察署についていきます。 その前に少しトイレに行っても問題ありませ んか？家に入って見張って置いてもらって構わないので」

そう言うと、小西は了承してくれた。

「こちらも待っている間に福田さんの部屋の様子を証拠品として撮らせていただきます」こちらに拒否権はないと思うので、「はい」と了承しておいた。

俺はトイレに入ると鍵をかけ、トイレに隠しておいた携帯を出した。

この時のために携帯を２台用意していた。もし警察に重要参考人ということで家を訪ね

られて、トイレに行くといっても、その時に携帯を没収されると危惧していたからだ。

しかし、逮捕状は出ていたがトイレに入る俺を身体検査して携帯などの証拠品を没収することはなかったので、警戒のしすぎだったようだ。

トイレに隠していた携帯には予めメール文を記載していた。少しだけそのメール文を変更しメッセージを送った。念のため送ったメッセージは削除しておき、再び同じ場所に隠しておいた。

これでこの家でのやることは全部終わった。安心してトイレから出て、部屋の様子を撮影している小西に話しかけた。

「俺の部屋の様子は撮り終わりましたか」

「ああ、しっかりと撮らせてもらった」

「そうですか。早いですね。そろそろ警察署に行くのですよね。警察署で逮捕に至った経緯を教えてください」

俺はそう言い、よく刑事ドラマなどで見るような、手錠をかけられるように両手をグーの形にして前に差し出した。

小西は怪訝そうな顔をした。そして、それはこちらのセリフだと言わんばかりに俺の両手に手錠をかけようとしてきて、しかし思い出したように言ってきた。

「手錠をかける前に、財布や携帯などを念のため渡してくれ」

「はぁ、わかりました」

俺は財布と携帯を小西に渡した。

その後両手に手錠をかけられ、警察署に俺は連行された。

現在の警察署の尋問部屋

携帯や財布などの証拠品は全て警察に没収され、この尋問部屋にいる。没収は連行される前だったので問題なく用事を済ませることができたが、それでも無事に用事を済ますことができてよかったなと今頃になって安堵した気持ちになった。

「そのツテというのは本当に後でわかることなのか」

俺は無言で首を縦に振る。「はぁー」とため息をつきながら小西は言ってきた。

「とりあえずそのツテについては今のところはいい。しかし、こんな動画を上げたばかりに俺たち警察に捕まるとは。無闇に人々の不安を煽るものではなかったな」

そう聞いて俺はツテについて深く聞かれずに済んで少しほっとした。深く追求された時に説明するのが少し面倒だなと思っていたからだ。

警察に捕まったことについては、驚きはしたが正直問題ないと思っている。なぜなら、捕まった方が話は早いと思っていたからだ。

そんなことを考えていると、どうやら俺のポーカーフェイスが気に入らないのか小西が挑発したように言ってくる。

「こんな予言で日本で捕まったのはお前が初めてだよ。調べたところ海外では何件かあったみたいだがな。数日後にはどこかの新聞欄に小さく乗っているだろうな。親御さんはさぞ悲しむだろう。たく、何を考えてこんな動画を上げたんだ？こんな動画を上げても逮捕されないとたかを括っていたのか。だとしたら我々警察をなめすぎだ」

その話を聞いて俺は、自分が日本で初の予言者逮捕ということに驚いた。

正直なところ俺以外にも何人かそういった逮捕者がいてもおかしくはないと思っていたからだ。どうやら海外にはいるみたいだが。

しかし、驚きはしたが興味はない。それに逮捕されるのもある意味ではこちらの予定通りなので、特に動揺することもなく俺は淡々と答える。

「俺はただこれから起きることの真実を伝えただけです。親が悲しむかどうかはこの後の結果次第ですね。確かに俺は今警察署にいますし、逮捕状も出ているみたいですが、この予言の動画が罪かどうかはまだ決まっていません」

「まだ、そんな馬鹿げた妄想を言っているのか。大勢の人々の不安を無為に煽ったことを今のうちにしっかり反省しておいた方がいいぞ」

小西は怒りというよりは、哀れな人を見るかのような目で俺を見てくる。

どうやら小西は冷静になってきたようだ。小西の怒りが収まってきたのを感じ、今なら冷静に話を聞いてくれると思ったのでこちらのカードを切ることにした。

「妄想ではありませんよ。それに反省するつもりもありません。なぜなら、俺にはある特殊な能力があるんです」

特殊能力は俺が唯一交渉できる材料だ。どのタイミングでこのカードを切るか考えていたが、今がそのタイミングだと思った。

「特殊な能力？」

呆れたような顔を小西は浮かべた。

しかし、俺がどういった経緯でこのような犯行を及んだのか、調書を書いているであろう柴田にも内容を記載できるようにするためにも、呆れながらに聞いてくる。

「その特殊能力というのはどのような能力なんだ？やはり、動画でも言っていた通り未来が視えるというものなのか？」

「そうですね。その通りです。俺の特殊能力は動画でも言っている通り未来が視えるというものです」

「未来ね……どうやって未来なんてものを視るんだ？」

「未来を視る方法は至ってシンプルですよ。よく寝ている時に見るものがあるじゃないですか？」

小西は少し考えたそぶりを見せる。

「寝ている時に見る……夢のことか」

「はい。夢のことです。その見た夢が現実に起きているのですから、いわば正夢ですね」 「夢……正夢ね……そんなことでこんな仰々 しいことをしでかしたのか」

確かに、小西の言うとおり夢を見たと言うだけで普通の人はこのような暴挙は行わないだろう。それに、夢だけならば俺もこのような予言の動画を上げるようなことはしなかった。

しかし、俺にはこの夢が正夢になると言う確信があった。

「そうですね。もしただの夢ならば俺もこのようなことは行わなかったでしょう。しかし俺には夢と正夢を区別することができるんです」

「夢と正夢の区別？それはどうやってするんだ？」

「そのことを話すためにも少し俺の過去の話をさせていただきます。少し長くなると思いますが構いませんか？」

小西が答えようとしたところで扉の開く音がした。反射的にそちらの方を向くとスーツを着ているメガネをかけた、前髪が少し邪魔そうな気難しそうな顔をした人が立っていた。年齢はおそらく２０代後半くらいだろう。

その背後には付き人といった６０代くらいの男性が立っており、手にはビデオカメラを持っていた。

「その話、私も立ち会ってもよろしいでしょうか？」

突然の来訪者に俺は驚いた。小西の方をみると呆れたようなため息をついていた。その様子から察するにどうやら事前に話は通っていたみたいだ。

俺はもう１人の調書を記載しているであろう柴田の方を見てみた。

柴田は突然の来訪者に驚いたそぶりも見せず、淡々と調書らしき紙に何やら書いている。俺はその様子を見て少しイラッとした。

どうやら突然の来訪者について知らないのは俺だけのようだ。俺は気になったので聞いてみることにした。

「あなたは一体誰ですか？」

その気難しい顔の人は少し小馬鹿にしたような顔をして俺を見てくる。

「君は少しせっかちのようだ。これから説明するところだったよ。私は政府の関係者で名前は横山誠也だ。こういった特殊な出来事について調べている」「特殊な出来事ですか……まだ何も起こっていないと思うんですが」

俺は横山が言っていることについて不思議に思ったので聞いてみることにした。俺の言っていることがわからないのか不思議そうな顔を横山は浮かべた。

「不思議な出来事は起こっているだろう。君がこちらの予言の動画を上げたことがすでに不思議な出来事だ」

横山が言ったのと同時に横山の付き人であろう人物が携帯をポケットからだし、予言の動画を見せてくる。

この予言の動画が不思議な出来事というのは、俺には何を言っているのかよくわからなかった。予言の動画を上げているのはこの動画１つだけだ。もしいくつか予言の動画を上げていて、その予言が当たっているのもあれば、確かに不思議な動画と言えるだろう。

しかし、この動画１つだけが上がっている状態で見ても、おかしな奴が変な動画を上げていると思うだけだろう。

まぁ確かに再生回数は５００万回以上と多いので不思議な動画かもしれない。

「不思議というのは再生回数のことですか？」

「再生回数？」

またも横山は不思議そうな顔をし、付き人が持っている動画を見る。その反応を見るに再生回数とも違うのだろう。

「本当だ。確かに再生回数が多いな。しかし私はそんなことに興味はない。この動画の内容が不思議な出来事だと言っている」

その返答に俺は驚き、もう一度質問してしまう。

「再生回数ではなく、この動画が不思議な出来事ですか？」

「ああ」

横山は即答で答えた。俺は驚いた。確かに予言の動画が上がっているのは不思議な出来事かもしれない。

しかし、この横山のように関心を持つことは稀だろう。まして、横山はこの動画の主、 つまり俺が嘘を言ってないように思い込んでいるように見える。

どうやら何か確信があるみたいだ。そうでなければ、ただの馬鹿だ。 横山の方を見てみると何やら考え事をしているみたいだ。横山はこちらを振り向いた。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな」

その問いに少し呆れ「あ、こいつやっぱり馬鹿かも」と思ったが、そんなことを言っても仕方ないので、福田蒼空と名乗った。

「横山が入ってきたことで少し脇道にそれたがそろそろ本題を聞いてもいいか？」と小西が言ってきた。

そういえば、俺の正夢について過去のことを話そうとしていたところだった。どうやらこの政府の関係者という横山という人も俺の話を聞きたいがために、この尋問室に来たみたいだ。

「話す前にこの話の内容をビデオカメラで録画してもいいだろうか？」

横山はこれから正夢についての話をしようとしていた俺に言ってきた。

俺はなぜビデオカメラを撮る必要があるのだろうと疑問に思った。

「カメラならこの尋問部屋にもついていると思うんですけど……」

眉を顰め監視カメラがある方を見ながら俺は言った。

「この尋問部屋のビデオカメラは前に一度見させてもらったが少し性能が悪くてね。私は綺麗な映像で撮りたいのだよ」

それを聞いて俺は何でもいいかと思った。

「はぁ、まぁ俺に拒否権はないと思うのでどっちでもいいですよ」と小西の方を俺は向いた。小西は特に注意をする気配はない。

俺と小西の様子を見て横山は満足した様子で付き人に言った。

「そうか。それでは田中よ。しっかりと彼の話を録画しておいてくれ」

田中と呼ばれる付き人が「失礼します」といい、持っているビデオカメラを俺の方に向け録画してくる。

あの付人、田中と言うのか。そう思い、ビデオカメラの方を向くと少しだけ緊張してきた。面と向かってビデオカメラで撮られることにあまり慣れていないからだ。

話しを始める前に前に時刻を確認しておいた。今は１２時を過ぎたところのようだ。

少し緊張しながらも、俺は正夢が起こった過去の出来事について話し始めた。

「そうですね。お話しした通り俺には正夢を見られるといった特殊な能力があります。この予言の動画を投稿する以前に５回、厳密に言うと６回ですが正夢を見ました。ややこしくなるので正夢を見たのは５回ということにさせていただきます。それで、その５回の正夢の出来事について順にお話をさせていただきます。最初の正夢を見たのは７歳の時です」

初めての正夢

蒼空が７歳の頃の花火大会の前日、夜に寝ている時にある夢を見ていた。７歳の頃の夢だったが、夢の内容はとてもシンプルな内容だったので今でも覚えている。当時、夢を見ていた時は、それが正夢だとは全く思わなかったが……。

夢の中は、椅子と机とその上にテレビのリモコン、そしてテレビが置かれており、蒼空は椅子に座っていた。立ちあがろうとしてもなぜか力が入らず椅子から立つことはできない。

立ち上がれないので仕方なく上を見上げた。電灯はなかったが、なぜかほんのり明るく薄暗いという程度で周りを見る分には問題なかった。

しかし周りを見回しても何もなかった。どうやら椅子と机とテレビ、そしてその机の上にテレビのリモコンと思われるものがおいてあるだけだ。

テレビは真っ暗で電源はついていなかったので、机の上に置いてあるテレビのリモコンに手を伸ばしてリモコンをとり、電源ボタンを押した。

テレビをつけると大勢の人たちが騒いでいる映像が映る。

屋台などの店が大量に並んであり、浴衣を着ている人たちが多くいた。どうやら祭りのようだ。そしてその祭りには見覚えがあった。

去年にその祭りに行き、そして明日もその祭りに行く予定だ。明日の祭りが楽しみすぎてこんな夢を見ているのかなと蒼空は思った。

テレビの映像が何もしていないのに突然場面が変わり、大きな木の下に１人の子ど もが映る映像へと切り変わった。その子どもは親とはぐれたのか、わんわん泣いているようだ。

子どもは水玉模様のついた浴衣姿であり、どこかで見た雰囲気をしているが、涙を拭いている手で顔を覆っておりよく見えない。子どもの周りに何人か大人がいるのでそち らの方をみると、どうすればいいか困っているようだった。少し話し合いをしているみたいだが、その泣いている子どもに話しかけようとしている人はいなかった。

そこであたりが真っ暗になり、目を開けた時にはいつも見慣れている天井がそこにあっ た。

変わった夢だったなと蒼空は思ったが、顔を洗ったり、歯を磨いたり、朝ごはんを食べていると自然と夢のことについては忘れていた。

朝ご飯を食べながら、父と母と今日の祭りは楽しみだと話し合っていた。今日は休日なので祭りが来る時間まで蒼空は特にやることがない。祭りはまだかなと思いながらゲームやテレビを見ながら過ごしていた。

そして待ちに待った祭りの時間、祭りのために買ってもらっていた水玉模様のついた浴衣に着替え両親とその祭りに行く。人はたくさんいるが美味しそうな屋台がいっぱいあり、蒼空はその光景に目を輝かせる。

「はぐれないように気をつけてね」

蒼空のことを心配した母がそう言い、手を繋ごうとする。そこまで子供じゃないよと思いながら母の手をしっかりと握る。

「母さん、焼きそばが食べたい」

「はいはい、あなた蒼空は焼きそばが食べたいそうよ。頼んでもいい？」

「ん？俺が買いに行くの？」

「どうせあなたビールとかお酒の類を買うんでしょ？そのついでにお願い」

母にそう言われた父は納得するように頷いた。

「……確かにそうだな。ああ、わかった。蒼空他に何か食べたいものはないか？焼きそばのついでに買ってくるぞ」

　蒼空は少し考えたがすぐに思いついたのか笑顔になった。

「うーんとね、わたあめとホットドッグが食べたい！」

父も蒼空のその笑顔を見て自然と笑顔になった。

「わたあめはあると思うが、ホットドッグはどうだろうな？ま、探してくるよ。蒼空と母さんはその辺のんびり歩いてみていてくれ。何かあったら携帯に連絡を入れてくれ」

そう言い父はその場を去っていった。

「お父さんが戻ってくるまで適当に遊んでよっか」

「うん」

周りにある屋台から遊べるものを探し、輪投げなどで遊びながらのんびりしていた。

のんびり遊んでいると、周りの人たちが先ほどよりも多いことに母は気づく。歩くのも結構大変なくらいの人の量だ。

しかし、蒼空は先ほどよりも人が多くなっていることに気づかず、ある一点の場所に意識が集中している。蒼空の見ている先には紙芝居をしているところがあった。

「人が多くなってきたからはぐれないようにしっかりと手を繋いでて」

母はそう言ったが紙芝居に興味が向いている蒼空には聞こえない。

あまりの人混みの多さで苛ついた人がいたのか乱暴に人を押し退けて通ってくる人がいた。

その人に母はぶつかられ、蒼空の手を離してしまう。

「いたた……」 そう呟いた母は、蒼空と手が離れていることに気づかなかった。ぶつかってきた相手に少し文句を言ってやろうかと思い周りを見たが、ぶつかってきた人はそばにはいなかった。

「蒼空大丈夫？困った人もいるよね」

手を繋いでいたと思っていた蒼空に話しかけたつもりが気づくと手は離れていて、蒼空はそばにいなかった。ぶつかったことで意識がそっちに持っていかれ、蒼空と手が離れていることに気づかなかったのだ。

「蒼空どこにいるの？」

母は大慌てになった。

蒼空は母と手が離れていることに気づかず、人混みの中をその７歳という体の小ささを活かしするすると進んでいく。

目的の紙芝居のところにつき、蒼空はその紙芝居を楽しんで見ている。 紙芝居が終わり、満足した蒼空は辺りを見回すと母が近くにいないことに気づく。 蒼空は紙芝居の場所から離れ、母を探すため歩く。

しかし、人が多いため母がどこにいるかわからない。一気に蒼空は不安な気持ちが込み上げてきた。

「お母さんどこ？」

泣きそうになりながら歩いていたが堪えきれなくなって泣いてしまった。蒼空は疲れたのか大きな木のそばで泣きながら立ち止まっていた。

わんわん泣きながら「お母さんはどこ」と叫んでいた。周りの人たちは困ったような顔をしており、「誰か呼んだ方がいいんじゃないか？」など話をしている。

その木の下で不安な気持ちで泣きながら立ち止まっていた蒼空だが、３０分くらい経った頃に、母と父がそばに来ていた。母と父はお互いに顔を見つめ安堵したように息子である蒼空を抱きしめた。蒼空はわんわん泣いて両親に抱きついたが、 疲れたのかいつの間にか眠っていた。

父と母はその様子を見て寝ている息子に言った。

「１人で寂しい思いをさせてごめんね」

そう言い息子の頭を撫でて帰路についた。

祭りのあった数日後、蒼空はふとしたことで祭りの前日に見た夢の内容を思い出していた。もしかして夢に出て来た、木の下で泣いていた子供は自分のことなのではと思った。

しかし、祭りから数日が経ってしまったあとなので蒼空にはその夢に出て来た子どもが自分だったのか判断ができない。けど、なんとなくだがこの出来事は記憶しておいた方がいいだろうと思い、その夢の内容と現実で起きたことを日記として残すことにした。

それが「正夢」だと確信できるようになったのは数年後の正夢を見た時だった。

「初めての正夢はこんな感じでしたがどうでしたか？」

俺は、小西と横山の顔を見る。

「ふん、そんなのは結果論だな。後からならどうとでも言える内容だ」

小西はくだらないといった感じの様子だ。

「夢と正夢の区別というのは、その薄暗いところでテレビを見ているということが判別方法なのか？」

正夢と夢の判別方法について横山が興味ありげに聞いてきた。

「はい、そうですね。正夢を見る時は、薄暗い部屋にいて、椅子に座っており、そこから立つことはできず、テレビの映像を見ています」

小西は俺のその発言に怪しみながら質問してきた。

「今回の地震での予言の時も寝ているときにその場所に行き、映像を見たのか？」

「はい。その場所にいたことで正夢と確信し、東京の皆さんにいち早く知らせるためにあのような動画を投稿しました」

尋問部屋の場が静まり返る。小西は何を言っているのだといった表情をしており、俺の言っていることを全く信じていなさそうだ。

横山の方を見ると、真面目な表情をしており何やら考え込んでいる。そして、俺の方を向き言ってきた。

「この話だけでは判断ができないな。他に４つ正夢の出来事は残っているのだろう？それを聞かせてくれないか」

横山は正夢の出来事の続きが早く聴きたいようにそう急かした。

カメラを持っている横山の付き人はさっきから微動だにしていない。辛くはないのだろうか？

そんなことを思っていても仕方ないので、二度目の「正夢」について俺は語り出すことにした。

「二度目の正夢は小学５年の頃に見ました。小学生の頃に林間学校というものがあったじゃないですか。１泊２日でお泊まりするやつですね。その林間学校に行く二日前に正夢を見たんです」

２度目の正夢

見覚えのある光景だ。蒼空は椅子に座っており、動くことができない。周りには机とその上にテレビのリモコンが置いてあり、目の前にはテレビが置かれている。

あれはいつの頃だったろうか。前にもこんな光景を見た気がする。そうだ。あれは７歳の頃の祭りの日の前日に見たんだった。あの時は祭りで親とはぐれて泣いている姿の子どもを見たんだった。

それでその子どもというのは多分蒼空自身のことであると、確信はないが蒼空はそう思っている。

ということは、このテレビの電源をつければ何か未来が見えるのだろうか。あの時は７歳で、夢で見たことが現実に起きるなんて考えられなかったが、今は少し違う。

いつかの国語の授業で「正夢」という単語が出てきたことがあり、夢で見た内容が現実でも起きるなんてそんなことありえないよなと隣の席の子が言っていたのを思い出す。

その隣の席の子に同意しようとしたが、７歳の頃の出来事を思い出し「そ、そうだよね。現実でそんなことが起きるなんて、あ、有り得ないよね」と動揺した返答をしたことを思い出した。少し恥ずかしいことを思い出してしまった。ぶんぶんと蒼空は首を振り、気持ちを鎮める。

とにかく、この電源ボタンを押すと本当に過去に映像を見た時のように未来が見えるのか。それともあれは単なる偶然だったのか。それがわかると思い、蒼空はドキドキした気持ちでリモコンの電源ボタンを押した。

テレビをつけると大勢の子どもたちが１人の大人の話を聞いている。大人の言っていることはノイズがひどく全然聞き取れなかった。それを聞いて蒼空はこの映像では音声を聞くことができないのかと少しがっかりした気分になった。

しかし映像をよく見てみると、子どもたちがもっている荷物の多さや格好が普段と違っているので、何かなと思った。そうして考えていると明後日は林間学校があったなと思い出した。この映像は林間学校のことかと蒼空は思った。

それにしても、正夢はその出来事が起きる前日に見るものだと思っていたが、そうではないらしい。前に祭りの夢を見た時は、その日の前日だったはずなので勝手にそう思い込んでいたようだ。

とりあえずその映像の出来事が本当に明後日の林間学校のことなのか、映像に映っている人物達を注視する。先ほど映像でしゃべっていた大人の１人が蒼空の通っている学校の先生の１人だということに気づいた。大勢の子ども達の中にも蒼空の友達が多く 含まれており、その中には蒼空自身も映っていた。

やはりこれは正夢になるのだと思い、それと同時に前の祭りの時のことを思い出し、 気を引き締めてこれから先の映像を見ることにした。

映像の場面が変わり、映っている映像は３階建てくらいの建物とその周りには大自然がある。どうやら宿泊場に着いた景色であるみたいだ。

その証拠に、先ほどの映像のように先生の前に生徒全員で集合して座っている姿も見える。そして、見覚えのない大人がいるのは、この宿泊施設の関係者だろう。

そう思っていると、また映像の場面が変わり、生徒達が共同してカレーを作っている姿が映し出される。カレーを作る生徒達は皆とても楽しそうに料理をしている。

映像を見ていた蒼空は少し不思議に思った。特に変わったことが起きず、スケジュール通りに、林間学校の映像が進んでいるからだ。

てっきりこの正夢は前回の迷子の時のように何かが起こることを見せてくるものだと思っていたからだ。

まぁしかし、まだ正夢と思われるものはあの時の１回しか見ていないのでこんなものかと思い、続きを見ることにした。

料理を作っていた映像から、生徒達が協力して木の枝を集めているシーンに切り替わった。キャンプファイヤーの準備をしているらしい。

こういった雑用ごとは決まってさぼるやつが出てくる。小学５年生ともなればなおさらだ。 蒼空がそう思った通り、映像にも遊んでいる生徒達が映し出された。どうやら、１０人くらいでサボって鬼ごっこをしているようだ。

やれやれと思い映像を見ていたら、どうやら蒼空も映し出され一緒に鬼ごっこをやっているようだった。

「おい、俺さぼるな」

咄嗟に夢の中でそう呟いてしまった。まぁ俺も小 学５年で遊び盛りなので仕方がないと客観的に見て心を落ち着けることにした。

鬼ごっこをしている生徒達が、少しだけ足が見えづらくなる草むらに入って、走り回っ ている。その近くには先生がいる。先生は遊んでいる生徒達に向かって何か言っているようだったがノイズがひどくてよく聞き取れない。映像を見た感じでは遊んでいる子ども達に注意しているように見える。そう思うと、映像で一緒になって遊んでいる自分自身に呆れる。

そう思っていると映像が切り替わり、先生の視点で腕時計を見るシーンに変わった。時刻は１７時３０分ごろだ。急に時刻を出して変な映像になったと思ったら、「きゃー！」という悲鳴が聞こえた。ノイズがひどかったがその悲鳴が大きかったのか聞き取れた。

そしてまた映像が切り替わり、叫んでいたと思われる女の子と脚を抱えて座り込んでいる女の子が映っていた。座り込んでいる女の子は苦しそうな顔を浮かべている。

その映像をよく見てみると、草むらにうねうね動くものが映っている。

またも映像が切り替わると、蛇の顔が画面にはっきりと映し出された。

「うわ！」と驚き叫び、反射的に立とうとしたが、椅子に固定されているのか立つことはできなかった。立とうとして立てないのは少し辛い……。

座り込んでいた女の子は蛇に噛まれたようだ。林間学校に来てまで災難すぎる。

続きの映像をみようと思いテレビ画面を見ていると急に当たりが真っ暗になった。

気づいたら部屋のいつも見慣れている天井を見ていた。目が覚めたらしい。ジリリリと目覚ましがなっているので目覚ましを止める。時刻は７時半だ。

久しぶりに変な夢を見たな。いや、変な夢ではなく正夢と思った方がいいだろう。

あの時は小学１年で、初めて見た正夢だったので起きてからすぐに正夢のことを忘れていた。

しかし、今度の正夢は２度目だ。忘れるなんてことはしない。念のため正夢の内容をメ モに取ることにした。

まずは、蛇に噛まれた女の子についてだ。

あの子は確か、石川優希という名前だったはずだ。

そこまで喋った覚えはなかったが、なぜか夢の中で一緒に鬼ごっこをしていたな。まぁ大勢で遊んでいたので不思議ではないが。

その石川が蛇に噛まれたのは草むらで、時刻は１７時半ごろだったな。

そういえば、蒼空は林間学校では時計係だったので腕時計をつけて行くことができる。

これなら自分の腕時計を見ながら、１７時半ごろになるのを確認できるので、石川が草 むらに入るのを止めるタイミングがはっきりわかり、かなり楽になったと思う。

そんな風に考えていると、「朝ごはんできたから早く起きなさいよ」と母が部屋に入っ てきた。

「あら、起きてたの。早く着替えて朝ごはん食べにきなさい」

そういい、母は部屋を出ていった。

メモや考え事をしていたら、もう学校に行く時間になっていた。蒼空はすぐに着替えを すませ、朝食を食べて学校に行った。

学校では特に変わったことは起こらずいつも通りの学校生活を送っていた。強いて変わったことといえば、明日からは林間学校なのでみんながはしゃいでいたことだ。

しかし、蒼空自身はあまりはしゃぐ気にはなれなかった。正夢のことが気がかりだからだ。蛇に噛まれる張本人である石川の方を見てみる。

石川も明日の林間学校が楽しみなのかはしゃいでいる１人だった。

その様子を見て、明日の林間学校では蛇に噛まれるから気をつけたほうがいいよというのはとてもじゃないが言えなかった。

正夢については親を含め、蒼空は誰にも言っていない。それに友達に言ったとしても変な奴だと思われるだけだと思い言っていない。

そもそもまだ２度目なので蒼空自身正夢だという確信がない。

だから、石川に林間学校では蛇に噛まれるから気をつけたほうがいいよなんてもとより 言うつもりはなかった。

そんなことをわざわざ言わなくても解決方法はいくらでもある。

その解決方法というのは、石川を１７時半ごろにあの草むらに入れなければいいのだ。

そう結論づけた蒼空は、今日の学校生活をいつも通り過ごすことにした。

そして、林間学校当日がやってきた。夢の通り林間学校は順調に進んでいた。カレー作りも終わり、まだ少し時間があるので先生がご飯を食べる前にキャンプファイヤー用の薪集めをしようと言った。

ここからだと思い、蒼空は自分の腕時計で時間を確かめる。時刻は１７時１５分だ。ちゃんと夢に出てきた先生の腕時計と自分の腕時計の時刻が同じことは確認済みだ。夢の内容を振り返ったときに、もし夢で出てきた先生の腕時計と自分の腕時計の時間が違っていたらやばいということに気づいたので、あらかじめ確認しておいた。

それから１０分間くらい薪を集めていたが クラスメイトの１人が飽きたのか、遊ぼうぜと言った。蒼空と石川含め何人かそれに賛成し、１０人で鬼ごっこをすることになった。

別に蒼空は鬼ごっこに参加しなくても良かったのだが、参加した方が石川としゃべりやすいと思ったので参加した。

ジャンケンで鬼を決めた。鬼になったのは、佐藤という女の子だ。この佐藤という女の子は夢で叫んでいた女の子だ。

真相としては、鬼となった佐藤が石川を追いかけて、草むらに逃げ込んだときに石川が蛇に噛まれたのだろう。蒼空はそう考えながら、石川が逃げた方について行った。

石川は蒼空がついてきたことに気づき、蒼空に喋りかけた。

「福田くん、こっちに逃げてきたんだ」

「まぁね」

２人はあまり喋ることがなかったのでそれだけで会話は終わった。

蒼空は辺りを見回す。例の草むらはすぐ近くにあるようだ。鬼の佐藤に追いかけられた時に草むらがある方に逃げて、蛇に噛まれたようだ。ひとまず、そう考えをまとめた。そして、石川に喋りかけようとした。

しかし、石川とはあまり喋ったことがなく仲良くもなかったので、少し喋りかけづらい。

とりあえず、喋りかけずに時刻を確認すると時刻は１７時３０分だ。

そろそろ時間だと思った瞬間「福田くん、鬼の佐藤さんが来たよ」と石川が言い、草む らのほうに逃げようとする。

蒼空は石川が草むらに向かって逃げようとするのを慌てて手を掴んで止めた。

「そっちは危険だ」

「……危険？」

石川は不思議そうな顔をする。しかし、それは一瞬で慌てたような顔をし「佐藤さんが すぐ近くだよ」と言った。

その言葉に反射的に蒼空は後ろを振り向いたが、鬼の佐藤にタッチされた。

「タッチ！これで鬼は福田くんだよ」

佐藤はそう言い草むらの中に走って行った。その佐藤の走って行く姿を見た時に蒼空はしまったと思った。

次の瞬間、佐藤は転んで泣き出してしまった。その声に何人か集まってきて、先生もき た。先生が佐藤の所に駆け寄ろうとした時に、草むらから蛇が出てきた。

集まってきた生徒たちはパニックになり、「蛇だ」と叫んだりしている。

先生は、佐藤の足を見てふくらはぎに蛇の歯形があることに気づく。

「みなさんここからすぐに離れて、宿泊場に戻ってください」

先生はそう言うが、佐藤の足を噛んだ元凶である蛇は生徒たちが多くてびっくりしたのか、いつの間にかいなくなっていた。

周りの生徒たちは先ほどまでパニックになっていたが、蛇がいなくなったことで冷静に なり、それぞれ宿泊場に戻って行った。

草むら近くにいた石川と蒼空はまだ宿泊場に戻ろうとはせずその場に残っていた。

「びっくりしたね」と石川は蒼空に言った。

………… 。蒼空からの返事がなかったので石川は蒼空の顔を覗いてみた。

蒼空の顔は真っ青になっていた。

「福田くん、どうしたの？」

心配そうな顔をして石川は蒼空に聞いた。

「俺のせいだ」

「え？」

「俺のせいで佐藤は……」

そう言った蒼空は宿泊場に走って戻っていった。

「俺のせいってどういうこと？」

疑問に思った石川だけがその場に残されていた。

その後、林間学校の行事であったキャンプファイヤーはなくなり、生徒達は宿泊場で過ごしていた。

数日後、楽しかったとは言えない林間学校が終わりいつものように学校に行った。いつものように学校に来たが、下駄箱に手紙が入っていた。手紙にはこう書かれていた。

「放課後に学校の近くの公園で、この前の林間学校について少し聞きたいことがあります。 石川」

そう手紙に書いてあった。

放課後か……。特に予定はなかったのでそっちは問題なかったが、しかし林間学校についてか。少し面倒だなと蒼空は思った。無視するのもありだと思ったが、そのほうが後々面倒なこととなると思ったので放課後学校近くの公園に行くことを決めた。

学校では石川は特に俺に意識することもなく普通の学校生活を送っているように見えた。少しゆるそうな雰囲気があったので、このような手紙を送ってきたことに驚きはしたが、 意外と表情が読めなかったのであり得るかなとそう考えることにした。

蛇に噛まれた佐藤もふくらはぎの部分に湿布を貼っていた程度でひとまず元気そうであることを確認し、蒼空は安堵した。

そして放課後、その公園に行くとすでに石川はその待ち合わせの公園にいた。石川は蒼空が公園についたことに気づくと早速声をかけてきた。

「福田くん、来てくれてありがと」

「ま、あんな手紙渡されたらね。それで林間学校について聞きたいことって何？」

石川は顎に指を乗せ考えるそぶりを見せる。

「うーんとね。気になることが何点かあったんだけど、一番気になってたのは、福田君が俺のせいで佐藤はって言ってたことだね」

「そんなこと言ったっけ？」

知らないそぶりを見せて、石川の反応を伺う。

石川は少し真剣な表情をして「うん、言っていたよ」と言った。その真剣な表情にこれ以上知らないそぶりをするのは失礼と思い、正直に答えることにした。

「ああ、確かにそんなセリフは言ったな」

石川は真剣な表情を浮かべたまま追求してきた。

「それってどういう意味？あれってただの事故じゃないの？」

その言葉にどう答えたものかと思ったがシンプルに事故と答えることにした。

「まぁ、ただの事故だよ」

「ただの事故なら福田くんのせいじゃないじゃん。なんで自分のせいだって思ったの？」

そう言った石川の様子を見ると不思議そうな、わからないといった表情を浮かべている。

その表情を見た蒼空はこれは蒼空を責めているというわけではなく、本当に不思議に思っているようだと思った。

そんな石川の様子を見て蒼空は考える。今まで正夢のことについては家族にも話したことはなかった。それにまだ正夢を見た回数も今回のを含め、たったの２回しかなかったので、誰かに言ったとしても信じてもらえるとは思えなかった。

それに蒼空自身もまだ半信半疑だった。だが、実際に夢の通りに現実は動いている。そんな薄気味悪さを一人では抱えたくなくて、あるいは石川の様子を見て正夢のことを話しても信じてくれるだろうと思ったのか。

そう考えたのか、蒼空は石川に正夢について話すことにした。

「寝ている時にさ、よく夢を見ることがあるだろ。俺はさ、その夢が現実になる正夢を見 れるんだ」

「正夢？そういえば授業でそんなの習ったね。……え？正夢が見れるの？」

信じられないと言った様子で石川が言ってきて、やっぱり打ち明けたのは失敗だったか なと蒼空は思った。そりゃいきなりこんなことを言ったら驚くよねと思ったが、急に正夢 について打ち明けようとするのが怖くなった。

冗談だよと引き返そうと思った時に「その正夢で佐藤さんが蛇に噛まれる夢を見てそれ を防げなかったから自分のせいって言ってたの？」と石川が言ってきた。

蒼空はそんな石川のセリフに心底驚いた表情を浮かべたが、「福田君？」と石川に言われ、それで我にかえり説明をする。

「いや、正夢で見たのは佐藤さんが蛇に噛まれることではなくて、石川さんが蛇に噛まれる所だったよ」

そんな蒼空のセリフに石川は目を大きく開き驚いた様子だった。

「私が蛇に噛まれる正夢？でも実際噛まれたのは佐藤さんだったよね？」

そう言った石川は顎に指を乗せ考えるそぶりを見せる。

考える時に何度も石川はそのポーズをしているので、蒼空は、石川は考える時にそういった癖があるようだと思った。

そう思っていると、はっと何かに気づいたのか石川は言ってきた。

「私が蛇に噛まれる夢を見たからあの時、草むらに入ろうとしていた私を止めたんだね」

蒼空は石川のその言葉に正解だと言わんばかりに頷いた。

「ああ、そうだ。そして俺が石川さんを止めたせいで佐藤が代わりに蛇に噛まれてしまっ たんだよ」

　それを聞き、石川はなぜ蒼空が自分自身を責めていたのか理解できた。

「なるほど、それで俺のせいだって自分を責 めていたわけだね」

蒼空は無言でコクリと首を動かす。少しだけ沈黙の時間が流れる。石川は何かを考えているようだ。

蒼空は石川がすんなり正夢のことについて受け入れてくれたことに嬉しく思った。しかし、同時に佐藤のことについて何か言われるだろうなと思い少し怖くなっていた。

考えがまとまったのか石川が口を開いた。

「そうだ、福田くんに言わなければいけないことがあったんだ」

そう沈黙を断つように石川は言ってきた。やっぱり何か佐藤のことで言われるだろうなと思い石川の顔を見た。

しかし、石川の表情は真剣な表情を浮かべていいたのではなく、緩やかな笑顔を浮かべていた。

「助けてくれてありがとう！」

そう言った石川は頭を下げた。その様子に蒼空は驚いた。

「なんでお礼を？」

蒼空がそう言うと、石川は顔を上げ口を開いた。

「だって、あの時草むらに入る私を止めてくれたおかげで私は蛇に噛まれずに済んだんで しょ？だったら、お礼をいうのは当然の筋だと思って言ったんだよ」

自分がお礼を言うのは当たり前のことだと言わんばかりに石川は言った。その言葉が嬉しかった蒼空は、しかし素直に喜ぶことはできなかった。

「けど、そのせいで佐藤が蛇に噛まれることに……」

　石川は納得したように頷いた。

「確かに、もっといい止め方はあったかもしれないね。例えば、草むらには蛇がいるから 気をつけた方がいいよとか言っておけば誰も近づかなかったかもしれないね」

その石川の発言に蒼空は何も喋ることができない。確かに、元凶である蛇に近寄らせな ければ誰かが蛇に噛まれることもなかった。

そんな簡単なことも気づけなかった自分に腹が立った。

そんな蒼空の様子を見かねた石川がフォローするように言ってきた。

「でも、そんなことを福田くんが言ったとしても、言うことを聞かなかった生徒がいたかもしれないよ。だからま、今回のことは仕方ないよ」

「けどそれでも、」そう言おうとした蒼空のセリフを遮るように石川は言った。

「私が言いたいことは、佐藤さんが蛇に噛まれたのは福田くんのせいじゃないってことと、 助けてくれてありがとうってことだよ。だからもう自分を責めることは言わない！」

石川は自分の両手をクロスしてペケの形を作り、蒼空の目を見てそう言ってきた。その石川の仕草が面白かったのか蒼空は笑みをこぼした。

「わかったよ……ありがとう」

照れ臭そうに蒼空は言った。

その蒼空のセリフに満足したのか石川はにっこり笑顔になり「わかればよろしい」とお どけた感じでそう言った。

話がひと段落し「そろそろ帰ろうか」と蒼空は切り出した。石川は顎に指を乗せ考えるそぶりを見せる。何かまだあるんだろうなと蒼空は思い、石川がしゃべるのを待つことにした。

「ところでさ、その正夢って私以外に誰かに言ったりしたの？」

　石川が聞いてきたことが少し意外だったので、蒼空は少し驚いた。

「……いや、家族にも言ってないよ。正夢について言ったのは今回が初めてだよ」

「そっか」

照れたように石川は頷いた。そして少し真面目な表情になった。

「誰にも言ってないんだったら、私も他の人に言わない方がいいよね。うん、わかった言 わないでおくよ」

頼んでいなかったが、そう結論づけたように石川は言ってきた。

まぁ確かに言われないほうが蒼空としては面倒ごとが少なそうなのでありがたいとそう思い「ありがとう」と石川に礼を言った。

まだ話があるのか石川は続けざまに言ってきた。

「正夢を見たのは今回で何回目なの？」

　蒼空はその質問に素直に答えた。

「２回目」

　そう言うと石川は納得したように頷き、まだ何か気になるのか質問した。

「ちなみに１回目はいつ見たの？」

「小１の頃だから４年前だな」

「４年前か。じゃあ次に正夢を見るのは４年後の可能性が高そうだね。ということは中学 生になってからか」

そう言われた蒼空は少し考えるそぶりを見せるが、肩をすくめ「どうだろう。この正夢 についてはわかんないことだらけだし、次いつ見られるかなんてわからないよ」と答えた。 「そっか」

少し残念そうな表情をして石川が返事をしたかと思えば、すぐさま切り替えて緩やかな笑顔を浮かべた。

「じゃあさ、次に正夢を見た時は私に言って！力になるから」

その提案に反射的に拒否しそうになったが、今回みたいに間違った解決方法にしないためにも石川に力になってもらうことは重要だと考え、その提案に乗ることにした。

「そうだな。次に正夢を見た時は石川に相談するよ」

　そう言うと石川は嬉しかったのか先程よりも笑みを深めた。

「じゃ、約束ね。……そうだ。約束守るように指切りしておこう」

石川はそういい、小指を蒼空の前に差し出した。

蒼空は少し恥ずかしい気持ちになったが、自分の小指を石川の小指に繋いだ。

「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます指切った」

石川はそう言い小指を離し、最後に念押しに「絶対忘れないでよ」と言った。

蒼空は、「はぁー」とため息をつき「わかった。次に正夢を見た時は必ず石川に相談するよ」と言った。

そのセリフに満足したのか、「今日はもう帰るね。また明日学校で」といい石川は帰って行った。

このことがきっかけで石川とはよく話すようになり仲良くなった。

「２度目の正夢はこんな感じでしたがどうでしたか」

そう言い俺は小西と横山の顔を見る。ちなみにだが、ここで話した内容は林間学校が終わってまでのところまでだ。放課後での石川と話したことについてはこの場では言っていない。

話の内容を聞かれるのが恥ずかしいとかそう言ったことでは断じてない。話す必要がなかったから言わなかっただけだ。そう俺は脳内で納得するようにした。

「林間学校で蛇に噛まれる……ね。あながち起こらないとはいえないな。まぁしかし、それでその正夢を信じる気は全くないがな」

小西は相変わらず正夢については一貫して疑ったままだ。

「正夢の出来事については、まだ３つあるんでしょう？こちらはしっかりと録画できてい るのでいつ３回目の正夢の出来事を話してもらっても構わない」

横山も相変わらずといった感じか、早く正夢について話を聞きたいようだ。

しかし、横山の付き人の田中という人はビデオを真剣に撮っているのか先ほどからほとんど動いていない。休憩しなくて大丈夫なのだろうか。そう思ったが、付き人の田中は何も喋る気配はなかった。

こちらからは何も言うつもりはなかったので、３度目の正夢の出来事について話すこと にした。

「３度目の正夢は中学２年の頃に見ました。前の２件の出来事のように行事はなかったで すが、担任の先生が妊娠をしていて長期の休みをとるという２日前に正夢を見ました」

３度目の正夢

見覚えのある景色だ。椅子に座っている蒼空はあたりを見渡し、机とテレビ、そのテレ ビの上にリモコンがあることを確認する。

この景色を見るのも３度目だ。前に見たのは確か小５だったので、３年経っている。最初に見たのが確か７年前の小１だったので、石川が言っていた４年起きに正夢が見られるというのは間違いなのだなと思った。

３度目の景色ということもあり蒼空はこれから正夢を見ることを確信し、テレビのリモ コンの電源ボタンを押した。

テレビの画面に映ったのは中学校の景色だ。どうやら授業をしている映像が流れている ようだ。黒板には日付が記載されており、６月２０日の金曜日とある。

この夢から覚めた時の日付が６月１８日なので、どうやら２日後に起きる出来事のよう だ。

授業の風景は蒼空のいるクラスが映し出されている。担任の先生の鳩山が国語の授業を している。

鳩山先生のお腹は大きく、妊娠していることがわかる。確か今週の金曜日に妊娠のため長期 休暇を取ると言っていた。ということは、この映像の授業は鳩山先生にとって最後の授業とな る。

いつもの授業よりもクラスが楽しそうな雰囲気になっているのは、何か、国語の授業をしながらミニゲームでもやっているのかもしれない。そう考え微笑ましく思った。

そう考えていると映像の場面が変わり、鳩山先生が階段を降りようとするシーンが映し出される。

その映像を見た瞬間、蒼空は嫌な予感がした。そして、それと同時に降りる階段につまづいたのか鳩山が正面から倒れていった。鳩山先生は動こうとするが動けない。なんとか携帯を出し、どこかに電話をかける。しばらくして他の先生が通りかかり何かを言っているがノイズひどくて聞き取れない。そのノイズの音を聞いて、そういえばこの正夢では音声はノイズで聞き取れないことを思い出した。そのことに少し蒼空はいらだった。

その先生は何か言った後、鳩山先生を担いで保健室に連れていった。

保健室に入り２人は何か言っていたが、当然その会話はノイズがひどく聞き取れなかった。状況的に鳩山先生がその先生に頭を下げているので、お礼をいっているのだと思った。

しかし、鳩山先生の顔は青ざめており、心ここにあらずといった様子だった。

その映像を見た蒼空はまた嫌な出来事が起ころうとしているのかと思った。

そう思っていると映像の場面が変わり、病院の映像になった。鳩山先生はベッドで泣いており、そばには鳩山先生の夫らしき人が鳩山の肩に手を置き、今にも泣きそうになりながら絶望した表情を浮かべている。

医者の先生が何やら喋っている様子だが、鳩山先生とその夫らしき人物には聞こえていないように見える。

そこであたりが真っ暗になり、気づいたら見慣れた天井がそこにあった。

どうやら目が覚めたようだ。夢で見た出来事を忘れないようにメモをとる。６月２０日の金曜日に鳩山先生が廊下の階段から転げ落ちることがわかった。

夢の様子だと鳩山先生のお腹の子供が流産したのだろうと思えた。あんな絶望した鳩山先生の顔は見たくない。なんとしても階段から鳩山先生を転げさせてはいけない。

そう思った蒼空は鳩山先生を助けることを決意する。

しかし、今回の夢からは日付はわかっても時刻がわからなかった。また外の景色も見ることはできなかったので、だいたいの時刻も予想することができない。 時刻がわからないので、２０日は一日中鳩山先生の様子を見た方がいいのかなと思った。

夢で見た内容のメモを取り終えたが、そういえば正夢を見た時は石川に相談するのを約束していたことを思い出した。

今は朝なので電話するのは迷惑な時間だなと思った。携帯があればメールなどで連絡で きただろうが、生憎と持っていない。

なので 学校で話すしかないかと思った。しかし、あまり人には聞かれたくない内容なので、学校だと口頭で伝えるタイミングが難しいなと思った。

そこで手紙を書くことにした。

手紙の内容は、正夢を見たので放課後に中学の一番近い公園で相談があるといったことを記載した。石川への手紙を書き終え、朝食を食べ中学校に行く。

学校につくと下駄箱から自分の上靴を取り出し、それから石川が来ていないことを確認 した。上靴があるのでまだ来ていないようだ。

蒼空と石川は同じクラスなので下駄箱が近い。あたりを見渡し、誰も人がいないことを確認する。

なんかラブレターを下駄箱に入れるような感じがして少し恥ずかしい気分になった。素早く手紙を石川の下駄箱の上靴の中に入れて、蒼空は自分の教室へと早歩きで行った 。

教室で友達と話していると石川が教室に入ってきた。石川と一瞬目があった気がしたが、すぐに石川は顔をそらし近くにいる友達と話をした。

それから放課後まで特に手紙の内容について石川とは話はしなかった。

放課後になり、友達が「これから遊ぼうぜ」と言ってきた。

それにたいし申し訳なさそうに「ごめん、今日はちょっとこれから用事があるから無理だわ。また誘ってくれ」と言って その友達の誘いを断った。

それから教室を出て歩いていると別のクラスの友達にも遊びに誘われたりして断るのに５分くらい時間がかかってしまった。

手紙に記載しておいた公園に着くと石川が公園のベンチに座りぼーっと空を見ながら待っていた。

「ちょっと待ったか」

蒼空はぼーっとしている石川の正面に立ち話しかけた。

蒼空の顔をみて石川は緩やかな笑みを浮かべた。

「ううん。そんな待ってないと思うよ。ちょっと眠くてぼーっとしていた」

石川は待ったことに特に気にしていない様子だ。まぁ待ったとしても少しだけだろうからそんなに気にしないかと思った。

ぼーっとしていた石川はニヤッと急に悪戯な笑みを浮かべ、からかうように言ってきた。 「そういえば、今朝、下駄箱見た時はびっくりしたよ。ラブレターが入っているのかなっ て。まぁ福田君の名前を見て違うことはわかったけどね」

その石川のセリフに対し、蒼空は少し恥ずかしそうに言った。

「それは俺も思った。手紙書いている時には特になんとも思ってなかったが、下駄箱に入れようとした時に急になんか恥ずかしくなった」

その蒼空のセリフにお互いに吹き出す。笑いが収まった後、蒼空は何かを思いだしたように石川に尋ねた。

「それにしても、３年前に石川が俺の下駄箱に手紙入れた時はなんか恥ずかしい気持ちに ならなかったわけ？」

「そんなことあったっけ？」

とぼけたふりをして石川が言った。

　絶対とぼけているだけだろと思った蒼空は追求して聞いた。

「おいおい、あっただろ。そのことがあったからこうやって石川に相談しているんだけど」

それを聞いて石川は笑みを浮かべた。

「冗談冗談。ちゃんと覚えているよ。ちょっとからかっただけ。さてと、それじゃそろそろ本題に入ろっか」

石川はあからさまに話しを逸らそうとしていた。

ジトッとした目つきを石川に向けて「なんか話逸らそうとしてない」と石川に言った。 「そんなことないよ」と石川は言い、無理にでも話題を変えるため本題を切り出した。

「正夢を見たんだよね？前に見たのが３年前だったから結構見るのに時間かかったね。その３年前よりさらに前の正夢を見たのは確か７年前だったね。４年以内に正夢を見られるとかそういった法則なのかな？」

ここで先ほどの話のツッコミを入れたかったが、まぁ本題に入ったし突っ込むのは後々 でいいかなと思い、頭を切り替え石川が座っているベンチの隣に座った。

「正夢がどうやって見られるのかといった法則はさておき、３年ってあっという間で、なんだかんだ長いよな。もう正夢は見られないのかなとちょっと思ったりもしていた」

「正夢を見られる条件がわからないもんね。ま、それは今考えても仕方ないことだね。で、どんな正夢を見たの？」

蒼空は正夢で見た内容について、石川に話した。

「そっか……鳩山先生が、明後日の金曜日に階段で転んで流産するなんて」

石川は普段あまり見せない真剣な表情を浮かべる。

「けど、明後日に階段に転ぶことがわかっていれば防ぐことができそうだね」とすぐに石 川は明るく振る舞った。

「ああ、俺も防げると思う。それに今回は前の正夢のように、他の人が蛇に噛まれるといった別の被害について考えなくていいから、だいぶ楽だと思う」

蒼空は前の失敗について思うところがあったのかそう言った。

そのことに石川は微笑み「確かにそうだね。今回鳩山先生以外が階段で転んだとしても怪我をする程度だからね。別の被害については私も考えなくてもいいと思う」と言った。

その点はラッキーだったなと言っていた２人は大きなため息をつく。

「時間がわからないと結構きつそうだよね」

「だな。１７日は基本的に階段に近づく鳩山先生について行かないといけない」

前の正夢の出来事の時は、時間についてわかっていたのでその点で蒼空は苦労することはなかった。

しかし今回はいつ起こるか時間がわからないので苦労することになりそうだ。

鳩山先生は国語の授業の担当なので基本的に教室での授業になる。ちなみに蒼空と石川の中学は一年生が３階で、２年生が２階、３年生が３階の教室となっている。

そして、クラスは１学年ごとにクラスが５クラスあり、１組が一番階段近くにあり、以 降のクラスから階段から遠ざかっていく。

蒼空と石川は２ー１なので最も階段に近い。これは鳩山先生が階段に落ちないようにするための好材料の一つだ。また、その日は体育も教室から移動する授業もないのでこれも 好材料の一つだ。

しかし一番の好材料は階段を使わずに職員室から教室を移動できる３年生になることだったが、蒼空たちは２年生なので階段を上ることは避けては通れない。

蒼空は自分たちがやるべきことについて話しをした。

「とりあえずは授業が終わったら鳩山先生のところにすぐ駆けつけることをした方がよさ そうだな」

その言葉に、石川も頷いた。

「うん。やることとしてはそれしかなさそうだよね」

そのセリフの後お互いに考え事をしているのか二人の間に沈黙が流れる。

やるべきことを何も思いついていなかった石川が本当にこれだけで大丈夫なのかと思い「本当にこれしかやることないのかな」と石川は疑問を口にした。

それに対して蒼空は眉を顰め難しい表情を浮かべた。

前に失敗をしてしまったので、思いついた対策だけでいいのか心配になっているのだ 。

そんな蒼空の様子を見て石川はパチンと手を叩いた。

「あいたた……」

思いっきり手を叩いのか石川は痛がっていた。その様子に呆れた蒼空は「何をやっているんだ」 と言った。

その蒼空の様子に石川は笑みをこぼした。

「まだ１日猶予はあるんだし、なんとかなるよ、きっと」

どうやら蒼空を落ち着かせるためにわざと手を叩いたようだ。痛そうだったのはわざと じゃなさそうだったが……。確かになんとかなると思いながらやる方が対応が出来そうだと蒼空は思った。

「ここで深刻になりすぎるのも良くないよな」

「そうだよ。ということで今日はこれで解散してまた明日相談しよ」

それで今日のところは蒼空たちは帰路に着いた。

しかし、翌日の相談では特にこれといった 対策は出て来ず次の日の朝何時に集合すると言ったことだけ決め、その日は解散となった。

そして、正夢で見た出来事が起こる当日となった。

朝８時に学校の近くの公園で石川と待ち合わせしていた蒼空はいつもよりも早く家を出た。

約束の時間の２分くらい前に到着したが、石川はすでに公園のベンチに座って待ってい た。石川の座っているベンチに近づき「おはよ」と挨拶した。「おはよう」と少し眠そうに石川が挨拶を返してきた。

石川が朝眠そうなのは通常運転なので仕方ないなと思い、蒼空は話を切り出した。

「いよいよ今日だな」

そう言った途端、石川は眠そうな顔から真面目な顔をして「そうだね」と言った。切り替えが早いなと内心思った。

「昨日は特に他の対策が思いつかなかったから、とりあえずは今日１日中、鳩山先生を俺ら２人で見張っておこうと思うがそれで問題ないよな」

石川はそれで問題ないと思い、頷いた。

「うん、問題ないと思うよ」

「じゃあ、最初は職員室で鳩山先生が教室に移動するのを手伝うところだな」

その蒼空のセリフに石川は考えになかったのか驚いた様子だった。

「そっか。階段でこけるかもしれないってことは、当然朝移動してくる時もこけるかもしれないんだ」

しかし、少し指を当てて考え込んだあと何か疑問があるのか蒼空に聞いた。

「でもさ、確か階段を降りるところでつまずいて倒れたんだよね。だったら、階段を上ってくる時は関係ないんじゃない？」

その疑問に対して、蒼空はあらかじめ考えていたのか、スラスラと答えた。

「ああ、確かに正夢では階段を降りる時に、足を踏み外して倒れていった。けどもし、階 段を登っているときに何か忘れ物をしたことに気づいたらどうする？」

そう質問すると、石川は納得した様子で頷いた。

「なるほどね。そういうケースもあるのか。ちょっと盲点だったよ」

「１度失敗している身としては、できるだけ失敗しないように考えたからね」

その蒼空のセリフに石川は両手で顔を抑え、顔から手を離したかと思うと「よし！」と自分自身に喝を入れた。

「ふー……私はまだまだ認識が甘いようだね。……本当に今日がその日なんだ。なんかちょっとまだ実感が湧いてなかったよ」

　その石川のセリフに仕方ないと言った様子で蒼空が答えた。

「まぁ、石川はこれが最初だからな。仕方ないといえば仕方ないさ」

だが、その言葉は石川には少し逆効果だったようだ。

「ううん、人の命がかかっているんだから、もっと真剣にならないとね」

どうやら完全にスイッチが入ったようだ。

「じゃ、そろそろ学校に行くか」

「うん、行こう」

そう話しをして、二人は学校に向かった。

そして学校につき、荷物を持ったまま職員室の前で鳩山先生が来るのを待っていた。先生達はチャイムが鳴ってから、職員室から教室に移動するので、他の先生に会わないように隠れて待機していた。もし隠れずに鳩山先生を待っていたら他の先生に「早く教室で座っていなさい」と言われてしまうからだ。

そうして隠れて待っていると、鳩山先生が職員室から出てきたので、待機場所から出て鳩山先生に近づいた。

近づいた蒼空と石川に驚いた様子の鳩山先生が「あなたたちどうしたの？」と言ってき た。

蒼空と石川は顔を見合わせ、「先生今日が最後の授業ですよね」と石川が言った。

「最後と言えば最後ですけど、落ち着いたらまた復帰しますよ」

「けど、予定では２年生での担任は今日が最後ですよね。だったら２年生の最後くらいはお手伝いしようと思いまして、こうして待っていたんです。今の状態だと荷物持つのもやっぱり大変でよね」

その石川のセリフに微笑んだ鳩山先生は「そんなことを言われたら怒るに怒れないじ ゃない。わかったわ。今日１日は荷物運びお願いしてもいいかしら」と言った。

「けど、二人も必要ないんじゃないかしら」

鳩山先生がそういい、蒼空のほうを向いてくる。

蒼空はそのセリフになんて返したものか焦ったが「いやー何か重たい荷物があった時 に福田くんの力も必要かなと思って連れてきました」とさらっと石川が答えた。

鳩山先生は少しだけ考えたそぶりを見せたが「まぁいいでしょう」と二人で手伝うこと を認めてくれた。

そして、無事に昼休みまで先生の荷物の付き添いをしていた。

昼休み、蒼空と石川は誰も利用していない空き教室で話し合いをしていた。

「今のところは先生が階段からこけるようなそぶりはなかったね」

「そうだな。ということは午後以降ということだろう」

「時間がわからないとずっと気を張っていないといけないから大変だね」

蒼空と石川はお互いにため息をつき、疲れた様子を見せる。

「そうなんだよな。２限目の国語の授業の時はそこまで気を張らなくてよかったんだけど それ以外の授業の時が結構気を張るんだよな」

蒼空がそう言うと少しだけムッとした表情を石川が浮かべた。

「それって、廊下に鳩山先生が通るか心配だってこと？」

蒼空は下を向いていて、石川の表情が変わっていることに気づかずいつも通りに話す。

「ああ、授業中だからって廊下に行かないとは限らないからな。もし廊下に行く姿を見逃 したと思ったらゾッとする」

そのセリフに無言で頷いたあと石川はジトっとした目で蒼空を睨んだ。

睨まれていることに気づいた蒼空は「どうしたんだ？」と石川に聞いた。石川は少し不貞腐れた様子で答えた。

「福田くん、色々考えてくれているのはいいんだけどね、そういったことはちゃんと私にも共有してほしいんだよね」

そのセリフに蒼空は黙ってしまった。しかし、先ほどの石川とのやりとりを思い出しちょっとした反論をする。

「けどさ、授業中に鳩山先生が出るかもしれないっていうのは、石川も気づいていたそぶりだったよね」

石川は顎に指をあて考えるそぶりを見せる。どうやらこの反論は効いたようだと思っているとすぐに石川は喋り始めた。

「それはさ、朝に私が気づいてなかったことについて福田君が教えてくれたでしょ？」

蒼空はなんのことかと思い、朝の出来事を思い出す。

「ああ、朝に先生が教室にくる際も気をつけた方がいいって俺が言ったやつだね」

蒼空がそう言うと、石川は指を差してきた。

「そう、それ。それを教えてくれたから今回の授業中でも気をつけないといけないことに 考えついたんだよ」

「ということは、石川も俺にそのこと共有していないじゃん」と蒼空は先程の続きで反論してみた。

石川は冷静な態度で頷いた。

「うん、休み時間とかでも共有できたけど、明らかに気づいていることに対して言おうと は思わなかっただけだよ」

蒼空はその石川のセリフに首を傾げ、疑問に思ったので聞いてみた。

「明らかに気づいているっていうのはどうしてそう思ったんだ？」

その蒼空のわからないと言った様子が面白かったのか石川は少し吹いてしまった。

「ふふっ。だって、授業中に蒼空くんのほうを向くと難しい顔して廊下側の方をみているんだよ。そんな姿みたら、気づいているのなんてすぐわかるよ」

確かに授業中廊下に意識を集中していたのかあまり教室のことについてはみていなかった。また、授業している先生に怒られると廊下に意識を集中できなくなるので、授業態度と廊下側に意識を集中していたため、石川がこっちをみていたことに気づいていなかった。「はぁー」とため息が出た。

「確かにそれだと俺が授業中に鳩山先生が階段を降りるかもしれないことに気づいている のは明白だな」

「でしょ」

「ああ。……情報の共有か。確かに思いついたことは共有しとかないといけないよな。す まなかった。これから気をつけるよ」

蒼空は椅子に座ったまま頭を下げ謝っているそぶりを見せる。その様子に満足したのか石川は微笑み「分かればよろしい」と言った。

そしてまたジトっとした目つきを向けて「他にも何か共有しとかないといけないこと はない？」と聞いてきた。

どうやら蒼空がまだ何か思いついたことを隠しているのか疑っているようだ。

「ああ、何もないはずだ」

「はず……ね。」

石川は納得していない様子だったが、時計を見て席を立った。

「そろそろ授業の時間が近づいてきたね。職員室に行こっか」

「了解」

それから放課後まで鳩山先生につきっきりだったが、正夢の出来事と思えることは特 に起きなかった。

１５時半に授業が終わり、生徒達が帰っていく。１５時４５分になると教室に残っている生徒はいなくなった。

蒼空と石川は授業が終わって、帰りの挨拶をした後もしっかりと鳩山先生の荷物を持って職員室まで送り、誰もいない２ー１の教室で、２人で話し合っていた。

「まだ、何も起きてないよね」

真面目な表情で石川は蒼空に聞いた。蒼空は外の景色を見て、ぼんやり今日の出来事を考える。しかし、先生が階段からこけるような様子はなかったことに顔を険しくし、答えた。

「ああ、まだ何も起きていないはずだ」

そんな蒼空の様子に石川は疲れたようなため息をこぼす。

「はぁ。だよね。鳩山先生の荷物を持ったから、階段で転ばずに済んだと考えるのは流石 に楽観的すぎるよね」

蒼空は夕焼けの空を見ながらぼんやり考える。しかし、石川の意見に対し否定も肯定も できないことに気づき気落ちしてしまう。

「わからない。もしかしたらその可能性もあるのかもしれない」

蒼空は浮かない表情だ。その可能性は流石にありえないと内心思っているようだ。

「それか、今までの正夢で起きたことは単なる偶然だったのかもしれない」

今回の正夢では時間がわからない。そのことが蒼空の気持ちを弱気にさせてしまい、そんな弱気なセリフを吐かせてしまったのかもしれない。

石川は机を両手で叩いて立ち上がった。

「それは、鳩山先生が学校から無事に帰った時に考えればいいことだよ。だから、とりあ えず、職員室行って鳩山先生の様子を見に行こうよ」

何か言おうとした蒼空だったが、それもそうだと思い、椅子から立ち上がり石川とともに職員室に行く。

職員室の前に着きドアにノックをして入る。

「失礼します。２ー１の福田と石川ですけど、鳩山先生はいらっしゃいますか」

近くにいた先生が鳩山先生の座席を確認し「鳩山先生は今は席にいないようですね。何か用事でしたか」と答えてくれた 蒼空と石川は顔を互いに見合わせ、ごくりとつばを飲み込む。

「鳩山先生はどこに行ったか聞いていませんか？」

　焦った様子で２人は聞いた。

「さぁ、私は聞いてないわね。鳩山先生の隣の席の中村先生ならどこに行ったか知っているかも」

２人は急いで中村先生のところに向かう。

「中村先生、鳩山先生がどこに行ったか聞いていませんか？」

机で作業をしていた中村先生が手をとめこちらに振り向いた。

「鳩山先生なら音楽室に行くと言っていましたよ。当分学校に来られなくなるから、見に行くと」

「すいません。ちょっと急用ができました。これで失礼します！」

中村先生の話を途中で遮って二人は職員室を後にした。

廊下に出ると二人は走り出した。走りながら慌てた様子で蒼空が言った。

「石川は階段を上がって二階から音楽室に向かってくれ。俺は一階から行って、音楽室近くの階段を上るから！」

蒼空の判断をすぐさま理解し「了解！」と返事をして石川が別のルートで音楽室へと向 かった。

蒼空は全力で走ったまま、またやってしまったと思っていた。階段でこける夢を見たので、 勝手に教室から職員室に向かう所の階段でこけると思い込んでいた。それに、鳩山先生は担当教科が国語で、音楽教室へ行くことはほとんどないと思っていた。

自分の考えの甘さに、顔を歪め泣きそうになる。しかし、事態は一刻を争うので、足は 止めない。蒼空は走りながら右手で自身の頬を思いっきり叩く。眉を顰めながらも先生が無事であることを祈る。

そうこう考えているうちに、音楽室近くの階段までついていた。階段を駆け上がり、折り返しの地点に到着する。

上を見るとちょうど鳩山先生が階段を降りようとしていた。鳩山先生は蒼空に気づき、声を出そうとしたが、階段に躓いてしまう。

「先生危ない！」と蒼空は叫び、なんとか鳩山先生の前の階段まで上がり、階段を転げ落ちそうな鳩山先生を支える。

しかし、支える体勢が悪かったのか、支えた蒼空自身後ろに倒れそうになる。このままじゃ鳩山先生と一緒に階段に転げ落ちると思ったその時「福田くん！」と石川が叫ぶ声が聞こえた。

その声が聞こえてすぐに、鳩山先生は蒼空が支えているのと逆の方向にお尻から座り込むように倒れた。どうやら石川が上手く鳩山先生を支えて後ろに安全に倒したようだ。その様子を見てほっとしたのか、元々バランスを崩していたのか、蒼空は階段を転げ落ちた。

「福田くん大丈夫？」

階段から転げ落ちた蒼空を心配してか、鳩山先生の両肩を両手で支えて座り込んでいる 状態で石川が階段の上から声をかける。

蒼空は倒れた体勢のまま「大丈夫」と返事をした。その返事に石川はほっと胸を撫で下ろす。事態を把握しきれていない鳩山先生はびっくりした様子で固まっている。蒼空は立ち上がり、体のどこも痛みがないことを動かしながら確認し、階段を上る。

階段から転げ落ちた蒼空が上ってきたことで鳩山先生は少し落ち着きをとり戻し、蒼空 と石川のそれぞれ二人に顔を向けた。

「先生大丈夫ですか？」

階段を上がってきた蒼空が心配した様子で聞いた。

「福田くん、あなたこそ大丈夫ですか？」と逆に心配した様子で鳩山先生が聞いた。そのまま鳩山先生は座っていた状態から立ち上がろうとする。それを支えるように石川も鳩山先生と同時に立ち上がる。

立ち上がった鳩山先生は蒼空の身体を触り「どこも怪我はないですか？」と改めて心配した様子で聞いた。

「階段から転げ落ちはしましたが特にどこも怪我はありません。運が良かったようです」 と笑顔で蒼空は答えた。その様子にほっとしたのか、鳩山先生は膝から沈み込むように床に座り込んだ。

「本当に無事で良かったです。あと、ありがとうございます」

座り込んだまま鳩山先生はお礼を言った。そのお礼の声は霞んだ声になっており、目か ら涙が溢れそうになっていた。蒼空は照れ臭くなったのか、少しだけ鳩山先生から目を逸らし「いえ」と言った。

鳩山先生は、ポケットからハンカチを取り出し、目に当てた。「ふー」と吐息を出したかと思えば「よし」といい、立ち上がった。先ほどまでの泣きそうな顔からいつもの先生の顔に戻っていた。

「福田くん、どこも怪我はないようですが階段から落ちたのですから念のため病院に行ってくださいね」

「はい、わかりました。先生も階段から落ちはしませんでしたが、病院には行ってください 」

その返しが嬉しかったのか、鳩山先生は微笑んだ。

「福田くん、石川さん本当にありがとう。あなたたちのおかげで最悪の事態にならなくて すみました」

蒼空と石川は顔を見合わし、「いえ」とお互いに照れ臭そうに返事をした。そこで２人は思い出したかのように「職員室まで送ります」と言った。

鳩山先生は少しだけびっくりした表情をしたがすぐに微笑み「お願いします」と少し頭 を下げた。

職員室まで送った２人は、鳩山先生がどうやって家まで帰るか尋ねた。

「家まではどうやって帰るんですか？」

鳩山先生はその質問ににっこりと微笑んで答えた。

「夫が車で迎えにきてくれるわ。もちろん夫に病院に連れて行ってもらってから帰るつもりよ」

「そうですか。では俺たちはこれで失礼します」

安堵した蒼空は挨拶をしてくるりと回れ右して帰ろうとしたが、石川に肩を軽く叩かれ 耳打ちで「なんで音楽室行ったのか聴かないの？」と言われた。完全に忘れていたといった様子で再び回れ右する。

鳩山先生は蒼空のその様子に不思議そうな表情を浮かべた。蒼空は間を取るためコホンとわざとらしく咳をする。

「ところで先生なぜ音楽室に行ったのですか ？」

鳩山先生は下を向き少しだけ口角をあげ、穏やかな表情を浮かべる。

「私はこの学校の卒業生だったの。それで部活は吹奏楽部でよく音楽室を使っていたの。 それで週に１回は放課後に音楽室に行くようにしていたの」

なるほどと蒼空と石川は思った。そこで石川が疑問に思ったのか指を顎に当て考えるそ ぶりを見せ言った。

「先生そういうことはもっと早く言って欲しかったですよ」

石川は表情には出ていないが、内心不貞腐れた様子で聞いたのだろう。蒼空自身も少しだけ内心ため息をつきたくなる気分だった。

「なんとなく言おうとは思わなかっただけですよ。それに最初の自己紹介で言わなかった ら言うタイミングなんてないでしょ」

それもそうだと思い、蒼空と石川はお互いに顔を見合わし、ふっと笑う。

ピコンと携帯の音がなる。鳩山先生は携帯を確認し夫が迎えにきたようだと携帯を見せ てくれた。ついでだからといい、蒼空と石川は鳩山先生を車まで見送った。校長先生と教頭先生も見送りについてきた。部活で残っていた生徒たちの何人かも見送りにきていた。

鳩山先生が乗った車がどんどん学校から去っていく。夕日で少し赤みがかっている空が、 寂しさを思わせるような、別れを告げているような感じがした。

鳩山先生を見送った後、蒼空と石川はいつもの学校近くの公園に来ていた。

「「今日はお疲れ様」」

お互いに労いの言葉をかけた。蒼空と石川は公園のベンチに腰掛けた。石川は腕を上に伸ばす。伸びを終え、空を見上げながら石川は言った。

「それにしても今日は疲れたねー」

蒼空は下を俯きながら「ああ」と答えた。蒼空のその元気のない様子に疑問を覚えたのか石川は聞いてみた。

「なんか元気ないね。全部終わったのにどうしたの？それとも全部終わって疲れたって感じ？」

蒼空はベンチにもたれかけ、空を見上げる。口を少し開け、「はぁぁ」と少し大きめのため息をつき「ちょっと今日の出来事について思うことがあってね。もう少しなんとかできたと思うんだよね」と覇気のない声音で蒼空は言った。

石川は顎に指を当て考えるそぶりを見せる。

「うん、そうかもね」

そう返事をし、続いて蒼空をフォローするように「けどさ、結果、鳩山先生が無事に帰れたから良かったじゃん」と笑顔で言った。

しかし、蒼空自身はまだ納得していない様子だった。

「結果オーライといえば聞こえはいいんだけど、ギリギリ救えたのは運が良かっただけだよ」

前に失敗したことがあったので今回のギリギリの成果に満足していない様子だった。

そんな元気のない蒼空を見て、石川はベンチから立ち上がり、座っている蒼空の正面に 移動した。そして、下を向いている蒼空の頭にチョップを繰り出した。

蒼空は何事と思い、叩かれた部分を手で触って、状況が理解できていないような表情を石川に向ける。石川は優しく諭すような笑顔で言った。

「もしさ、福田くんが正夢を見ていなかったらそもそも先生は階段から転げ落ちて大変な ことになっていたんだよ。それを助けた福田くんがそんな元気のない表情をしていたらあんまりよくないと思うよ」

蒼空は夕日に照らされるその石川の笑顔を見て少しだけ顔を赤らめる。蒼空は照れた顔を見られたくないのか首をぶんぶんと横に振る。落ち着いたのか再び石川の方を向き「元気がないわけじゃないんだ。ただ、鳩山先生がこけた原因が俺にあったんじゃないかって思ったらちょっとね」と言った。

その言葉に驚いた様子で石川は「それってどういう意味？」と聞いた。

蒼空はあまり言いたくなさそうに下を向いたが、決心したのか上を見上げ石川の方を向 く 。

「俺が階段をかけ上がった時に鳩山先生がこっちを見た気がしたんだ。多分そのせいで転 けたと思うんだよね」

そう思って、蒼空自身罪悪感を抱いているようだ。その蒼空の様子を見て少し驚いた石川だったが、すぐに穏やかな表情を浮かべた。

「それはさ、正夢でみた内容と変わっていたから、鳩山先生が階段からこける原因が変わっただけじゃないかな」

そう言われた蒼空は石川の言っていることが理解できなかったのか「どういう意味 だ？」と疑問を口にした。

石川は顎に指をあて答えた。

「夢で見た時はさ、鳩山先生の近くには誰もいなかったんだよね？」

「ああ」

「けど現実では福田くんが近くにいた。夢で見た時と状況が変わっていたら、鳩山先生が 階段をこける原因が変わっても不思議じゃないよ」

それを聞いて目を見開いた蒼空は言葉の意味を理解したのか「そうだったのか」と呟いた。

「だから、３年前の時も石川の代わりに蛇に噛まれる人が出たのか」

どこか納得した様子で蒼空は言って石川の方を振り向いた。しかし石川は首を傾げていてどこか納得していない様子だった。

「うーんちょっと違う気はするけど、まぁ大まかにはそうだと思う」

石川は納得していないことを説明するのが面倒だったのか、とりあえずはそうだねと納 得しておいた。

「ま、あれだよ。正夢の内容を変えようとしているから、現実が変化してもおかしくはないよ」

石川は両手を叩いてそうまとめた。それもそうかと納得した蒼空はベンチから立ち上がった。そして石川の方を振り向き「今回は色々ありがとう。助かった」と石川の目を見てお礼を言った。

お礼を言われて照れたのか、少しだけ蒼空から目を逸らし「どういたしまして」と言っ た。そう言った石川の表情は、口角の両端が少しだけ上に上がっていた。思い出したように蒼空の方を向き「また正夢を見た時は相談してね」と言った。

蒼空は頷き「ああ」と笑顔で答えた。

「じゃ、また月曜日に学校で」と石川が言ってその日は解散した。

「３回目の正夢はこんな感じでした。どうでしたか」 蒼空は少し喋り疲れたように「ふー」とため息をついた。

「どうでしたかと言われてもな。そもそも俺は調書のためにお前の話を聞いているのであって、正夢がどうのこうのなんて話信じていないぞ」

相変わらず、小西はこちらの話を信じていない様子だった。ただ、話はちゃんと聞いて くれているようなので問題はないと俺は思っている。

「なかなかに興味深い話だ。聞いた限りの話の内容だと便利なものだな、正夢というもの は」

横山は相変わらず俺の話に興味津々のようだ。反応としては小西の方が正しいと思うが、 信じてくれるのは、それはそれでうれしく感じる。まぁ全て本当の話だが、嬉しいものは嬉しい。

俺は今何時なのか確認する。時刻は１４時３０分だ。まだ話すことは２つあったのだが、 時間的に話せるのは１つだけになりそうだ。

「では、４度目の正夢について話をさせていただきますがいいでしょうか」

俺は、この場にいる全員に目を向ける。全員軽く頷いたのでどうやら話しても問題ない ようだ。

「４度目の正夢は高校２年生の頃でした。高校の友達が空手の大会に出る１０日前に見ま した」

４度目の正夢

椅子に座っている。立てないことを確認し、あたりを見回す。薄暗く、そこには机と椅子とテレビとテレビのリモコンしかない。その景色を見ただけで蒼空はこれから正夢を見るのだろうなと思った。前に見たのは中学２年生の頃なので３年前のことだ。

今回はどんな正夢を見るのかドキドキしながらテレビリモコンの電源ボタンを押した。

テレビに映し出された映像は、蒼空が通っている高校で名前は上島高校だ。どうやら体育の授業の映像のようだ。

しかし、映像に違和感がある。映像の人物たちがあまり見覚えのない人たちだからだ。

大勢の人を映し出していた映像は、ある１人の人物を映し出した。その人物は蒼空の高校では有名人なのですぐに名前が思い浮かんだ。名前は柴田直充だ。とにかく運動神経が良くて、空手の全国大会に出ていて学校で注目されていた。

蒼空も少し喋ることがあったが、気さくでいいやつだったことを覚えている。映像は体育の授業でサッカーをしていて、柴田がゴールを決めるシーンが映し出されていた。

映像が切り替わり、柴田の登校シーンの様子が映し出される。柴田は走っている。そして走って３０分くらいで高校についている。映像を見て思ったのだが、柴田の家から学校 までは大体駅２駅分くらいはありそうだ。

よくやるなと蒼空は思った。同時に柴田ばかりが映像に映し出されるので、今回の正夢 は柴田に関連することなのだろうと気を引き締めた。映像が切り替わり、学校での授業での柴田の様子が映し出される。

真面目に授業を受けているようだ。学校での評判が生徒と先生の両方にいい人物なので、真面目に授業を受けている様子は当然と思うがそれを蒼空はすごいと思った。

授業では黒板が映し出されており、日付を見ることができた。１０月２６日（木曜日） と記載されていた。

映像がまた切り替わり、夜になっていた。柴田は部活終わりでも電車には乗らずに走って帰っているようだった。

翌日疲れないのかなーと思いながら見ていると、また映像が切り替わった。

公園に柴田は居て、他校の生徒達に絡まれている様子だった。その生徒達の制服には見 覚えがあった。電車で通学している時によく見かける制服だったからだ。

蒼空が通っている高校の一駅前の学校で西成高校という名前の学校だったはずだ。絡んできた生徒達は３人いて、そのうちの１人が突然柴田を殴りにかかった。柴田はそのパンチを避けて何か叫んでいる。西成高校の生徒も何やら叫んでいる様子だった。４度目の正夢だが、音声くらいはしっかり拾って欲しいなと思う。何かしゃべっているのは口元を見ればわかるのだが、ノイズだらけで話の内容は基本的にわからない。

いつ見てももどかしい気持ちになる。

しばらく喧嘩のシーンが流されたが無事に柴田が勝った。今までの夢の傾向からして、 この不良達に柴田がやられると思っていたがそうではなかったらしい。

柴田は倒れている他校の生徒達に何やら呟いて荷物を持って去っていった。

しかし、柴田が公園から去ったというのに映像は切り替わらなかった。なぜと思い、ビ デオリモコンの早送りボタンを押してみる。早送りボタンはただの飾りだったようで特に反応はしない。今まで電源ボタンしか押したことがなかったので、これは新しい気づきだと思って喜んだ。しかし、すぐさま何を考えているんだと思い、真剣に映像を見つめる。

公園の映像から切り替わらず体感時間で１０分くらい同じ映像が流されていると倒れている生徒と同じ制服と思える人物が１人やってきた。

そのやってきた人物が何か言ったのか、その場に倒れていた３人は体を痛そうにしながらも起き上がった。

やってきた人物は起き上がった３人を見て、話をしている。片手にはビデオカメラを持っているようだった。話している声はノイズがかかっていてちゃんと聞こえないが、その人物は悪そうな表情を浮かべている。倒れていた３人組もその人物につられて悪そうな表情を浮かべている。ただ体が痛いのか、無理をしている様子ではあった。

映像が切り替わり、広い体育館の中にいるような映像に切り変わった。 白い空手着を着た人が何人もいて、それぞれ違う場所で、１対１で試合をしている。トーナメント表も映像に映し出されて、蒼空はこの映像が空手の大会だと気づく。

武道館には時計があり、日付も記載されていた。日付は１１月５日の日曜日だ。日付も確認し辺りを見回していたが、凄い熱気だなと思った。

そう思っていると映像が切り替わり、そこには空手着を着た柴田と審判と思われる人物が何やら話をしていた。柴田は深刻な表情を浮かべて、審判と話している。

しかし、審判との会話は終わったのか、下を向いて立ち尽くしている。その表情は今にも泣きそうになっている。そんな柴田の元に誰かが近づいてきた。近づいてきた人物は空手着姿で少し分かりにくかったが、公園で柴田が去ってから現れた人物だ。

その人物が柴田のそばで何か呟いたかと思うと、柴田は走り出して武道館を後にした。

そんな柴田の様子を見て、その人物は邪悪な笑みを浮かべていた。

映像が切り替わり、邪悪な笑みを浮かべていた人物がどこかの事務所にいるシーンで受 付に名前を記載しているところだった。日にちも大会が行われていた１１月５日ではなく １０月２８日の土曜日だった。

映像の日付が過去に戻ったことに、蒼空は前の日の映像も流れることがあるのだなと思った。

記載した名前には、村田遼とあった。村田遼という名前とその顔は忘れないように気をつけておこうと思った。顔の特徴は、黒髪で耳にかかる程度の髪型だ。顔にはこれと言った特徴はないがつけているメガネのフレームが赤色で特徴的な形をしていた。見た目は体格が良く身長も高そうだ。多分見かけたらわかると思う。

しかしなぜこの村田という人物が映し出されたのか蒼空には疑問だった。そう思っていると村田はＵＳＢを事務所の人物に渡していた。そのＵＳＢに保存されている映像を見て 事務所の人が驚いた様子を見せていた。

その事務所の人が見ていた内容も映像に映し出された。柴田が１０月２６日の木曜日に公園で喧嘩していたシーンが映し出されていた。そういえば公園の映像の時に村田がビデオカメラを持っていたので、どこかに隠れて撮っていたのだろうと思った。

映像が切り替わり、審判達がトーナメント表の書いている紙に柴田の名前のところに横線を入れて失格と記載するシーンが映し出された。

また、映像が切り替わり、柴田が部屋の中にいるシーンが映し出された。日付は１１月 ８日の水曜日で時刻は１０時だった。柴田は学校を休んでいるようだ。

映像には映されていないがその前の月曜日と火曜日も学校を休んでいると思われる。

部屋の中は暗く布団にくるまっている。柴田の表情には悲しみと憤怒が混ざったような とても辛くて息苦しそうな表情をしていた。

そこで辺りが真っ暗になり、目を開けたらいつもの見慣れた天井がそこにはあった。

ジリリリと目覚ましの音がなっている。目覚ましをとめ、時刻が午前の６時半であることを確認した。

今回の夢は情報量が多かった。まぁ、情報量が多かろうが少なかろうが正夢はメモを取ることにしている。

重要人物は、柴田と村田の２人だ。公園で喧嘩をしていた３人組も気になるが、夢を見た限りだと主犯は村田だと思われるのでそこまで重要人物ではないと思う。

次に日付は１０月２６日木曜日、１０月２８日土曜日、１１月５日日曜日、１１月８日 水曜日と計４回出てきていた。

この日付の中で最も重要と思われるのは１０月２６日木曜日だ。その日に柴田が公園で 西成高校の３人組と喧嘩して、そのシーンを村田に撮影された。

その撮影されるのをどうにかしなければ、柴田は大会で失格になってしまう。

今日の日付が１０月２３日の月曜日なので、後３日ある。

蒼空は夢で見た情報をまとめ終え、朝食を食べて学校に向かった。電車の中で、メールを作成し正夢を見たことを優希に報告し、放課後に家の近くの最寄駅のカフェで相談と連絡しておいた。

優希は中学生の時にも正夢の出来事の回避を手伝ってもらっていた相棒だ。

蒼空と優希は同じ高校に通っている。同じ高校に通ったのは、蒼空が正夢を見た場合、 それを手伝うのが便利だからといって優希のほうが蒼空にあわした。

中２の時は石川と呼んでいたが、気づけばお互いに下の名前で呼ぶようになっていた。 高校生になって、蒼空と優希は親から携帯を買ってもらっていた。３年前は手紙を書いて優希の下駄箱にそれを入れたのを思い出した。

今考えてもやっぱり恥ずかしいなと蒼空は思った。そんなことを考えているとピロンと携帯の音が鳴った。優希からメールがきており、了解と短く返信が来ていた。蒼空はそれを確認して携帯を閉じた。

学校の授業が終わり、家の近くの駅のカフェに来た。優希はすでにカフェのテーブ ルに座っていた。携帯をいじりながらのんびりしているようだ。

蒼空はミルクティーとサンドイッチを注文して、優希が座っている席の前に来た。携帯をいじっていた優希が顔をあげこちらに気づき「お疲れー」と緩やかな笑顔で言った。蒼空もそれに倣い「お疲れ」と言って、席近くのカゴに荷物を入れて、優希の目の前に座った。席に着いた蒼空はひとまずミルクティーを口にした。

優希は悪戯な笑みを浮かべて「正夢の報告がラブレターじゃなったのはガッカリだな」と言った。そのセリフに漫画みたいにミルクティーを吹き出しそうになったがなんとか耐えた。しかし、反動でゴホッゴホッと少し咳き込んだ。

その様子が面白かったのか、優希はテーブルに腕をつき下を向いて震えていた。

「３年前のことをいちいち持ち出すなよな」

ジトっとした目で優希の方を向いた。顔を上げた優希はまだ少しだけ顔に笑いが残っていた。

「ごめんごめん。蒼空が正夢を見た時はこのネタでからかうと決めていたんだよね」と悪びれる様子もなく優希は答えた。仕方ないなと蒼空は「はぁー」と溜め息をついた。

「冗談はここまでにしてと、で、どんな正夢を見たの？」

優希が急に真面目な表情をして本題について聞いてきた。だから、いつもながら切り替えが早いんだよと蒼空は内心思いながら、今回の正夢の内容について、優希に話をした。

１通り話を聞き終えた優希は指を顎にのせ考えるそぶりを見せる。指を顎に乗せるのは 何か物事を考える時の優希の癖だ。考えがまとまったのか顎から指を離した。

「とりあえず、今回の達成目標は柴田くんを空手の大会に無事に出場できるようにするこ とでＯＫ？」

その質問に対し蒼空は「その認識で問題ない」と答えた。優希は日付を確認し「じゃあ、１０月２６日木曜日の喧嘩を止めれば解決かな」と言った。蒼空はその質問に対しては、はっきりとした答えがないのか首を傾げ答えた。

「どうだろう。木曜日に喧嘩が起こらなければ確かに解決だと思うが方法はどうする？」

その質問に対し、優希は黙り込んで注文していたメロンパンをかじる。優希の返答を待つために蒼空も注文していたサンドイッチを食べる。メロンパンを食べ終えた優希がナプキンで口元を吹いて、顎に指をのせる。

考えがまとまったのか、顎から指を離した。

「公園に行かせずにまっすぐ家に帰ってもらうといいんじゃないかな。念のため、走って家に帰るんじゃなくて電車に乗って帰ってもらうとか」

目を瞑って蒼空は考えた。その意見に対し特にこれといった反論はなかった。

「とりあえずは、その方向で明日柴田に話しをつけに行こうか。それでいいか？」

「うん、私が考えたことだしとりあえずそれでいいよ」

お互いに納得して席を立とうとしたが、蒼空が何か思い出したように「あっ」と言った。

少し驚いた優希は「どうしたの？」と聞いた。

「明日柴田といつ話す？放課後だと柴田は部活があってかなり遅くなると思うが」

その疑問に合点がいったのか優希は顎に指を乗せて考えるそぶりを見せる。

すぐに思いついたのか顎から指を離し「そんなに話すこともないし、昼休みに呼び出せ ばいいんじゃない？」

蒼空は「はぁー」と少し疲れたため息をした。

「やっぱそうなるよな。他のクラスに行くのってなんとなく嫌なんだよな」

蒼空は人見知りではないが、だからと言って人と話すのが得意という訳ではない。それにあまり絡みのないクラスに行くということはこれまでなかったので、少しだけ嫌だなという気分になる。そのセリフに優希は首を傾げる。

「蒼空って柴田くんのメールアドレス知らないの？」

その質問に対し蒼空は当然だと言わんばかりに頷いた。

「まぁ、確かに柴田とは何回か喋ったことはあったが、それだけでメールアドレス交換しようとはならなかったな。こんなことなら交換しておけばよかった」

当然のように頷いていたが、何かを思い出したのか疲れたような表情をする。その蒼空の表情を見た優希は悪戯な笑みを浮かべた。

「じゃあさ、柴田くんの下駄箱に手紙を入れて昼休み体育館裏に来て下さいって書けばいいと思うよ」

蒼空は嫌そうな顔をして「絶対に断る」と言った。その様子が面白かったのか優希はまた下を向いて震えている。「はぁー」とため息を着いた蒼空は「ま、明日直接柴田のクラスに行って昼休み話せないか聞いてみるとするよ」と言った。

まだ笑っている優希は「うん、わかった」と返事をした。そしてその日の正夢の相談は終了となった。

翌日の昼休みに蒼空は優希と共に柴田のクラスに来ていた。初めて入るクラスだったの で少し緊張していた。深呼吸をして落ち着いていたら、優希が「失礼します」と言って入 って行った。

思いきり良すぎだろと思ったが、まぁありがたいなと思った。そして優希の後ろについてクラスに入って行った。クラスを見渡すと柴田が席に座っているのが見えた。近づくと１人で勉強していることがわかる。昼休みに１人で勉強って凄いなと思いながら前にいた優希と場所を入れ替わり話しかけた。

「柴田、今ちょっといいか」

勉強に集中していた柴田はペンをとめ、こちらを向いた。その表情には一瞬誰？という表情を浮かべたがすぐに思い出したように目を見開いた。

「福田だったよな、確か。どうしたんだ？うちのクラスに来るなんて初めてだよな」

そう言った柴田は優希の方を向き不思議そうな表情を浮かべた。

「後ろの子は誰だ？俺知らないよな？」

それに対し優希はいつもの調子で穏やかな笑顔をして答えた。

「うん、話すのは初めてだよ。まぁでも私は柴田くんが有名人だから知っていたよ。あ、 ちなみに私は石川優希って言うんだ。よろしくね」

そう軽く挨拶した優希に少し驚いた様子を見せたが、すぐに柴田は笑顔になって「俺は柴田直充。よろしく石川さん」と言った。

マイペースな優希も凄いなと思ったが、すぐに合わせられる柴田も凄いなと思った。さすが先生や生徒問わず人気なだけはあるなと思った。

優希との初対面の挨拶が終わったのか柴田はこちらに振り向き「それで何か用事がある のか？」と言ってきた。

その言葉を待っていたのか、蒼空は「ああ、ちょっと柴田に用事があるんだ。ちょっとここじゃ話しづらいから来てくれないか」と答えた。柴田は一瞬だけ考えるそぶりを見せたが右手で頭をかいて「まぁいいか」と言った。

その後、柴田のクラスを移動し人があまり来ない空き教室にきた。

「で、人に訊かれたくない話ってなんだ？」

教室に来るなり柴田は本題を切り出してきた。蒼空と優希は互いに顔を見つめて頷き、蒼空が一歩前を出た。

「柴田ってさ、学校からの帰り道はどうやって帰っているんだ？」

質問を聞いた柴田だが、そんな質問が飛んでくるのは予想外だったため、驚いた表情を見せる。

「なんでそんなことを聞くんだ？」と疑問を口にした。当然の疑問だったがその疑問に対して答えを用意していなかった蒼空は「まぁ、ちょっとね」とぼかした。怪訝な表情をしていた柴田だったが、別にいいかといった感じで「走って帰っているよ」と答えてくれた。

返事が帰ってきたことに蒼空は心の中で安堵し「なんで走って帰っているんだ？」と聞 いた。眉を顰め少しだけ疑いの表情を浮かべる柴田だがこの質問にも素直に答えてくれた。「空手の大会が近いからな。運動がてら走って帰っているんだ。それに電車代も小遣いにできて一石二鳥だしな」

そういった理由で家から学校まで走っていたのかと蒼空と優希は納得した。しかし、柴田の走る行為を止めなければ解決しないと思い、ある提案をした。

「走って帰ると怪我をするかもしれないし、大会までは電車で帰った方がいいんじゃない か。それに、部活でも練習しているんだからオーバーワークかもしれないよ」

とりあえずやんわりとした表現で走らないでくれと柴田に言った。しかし、柴田はそれを笑い飛ばし「練習じゃ物足りないから走っているんだ。それに走っているだけで怪我なんかしねぇよ」と言った。

こちらの言い分には聞く耳を持たない。当然と言えば当然だ。蒼空は少し考えるそぶりを見せる。そんな蒼空を手助けするように優希が柴田に質問した。

「部活の練習が物足りないなら、居残り練習するのはどう？」

その質問に対しても迷うことなく柴田は答えた。

「部活はもちろん残っていい時間までしているが１９時までで短いんだよな」

１６時部活開始と考えたら３時間もやっている。それだけ部活をしたら十分じゃないのかと蒼空と優希は思った。

その二人の雰囲気に気付いたのか「体力が有り余っているからな。３時間だけじゃ足り ないんだ」と柴田は補足した。

そう言った柴田は先ほどから思っていた疑問を口にした。

「俺に放課後走られるのは何か不都合なのか？」

直球な質問に蒼空と優希は互いに顔を見合わすが答えられない。その様子に何か察した柴田は「なんで俺に走られると不都合になるのか謎だな」と言った。

蒼空は何か答えなければと思い「別に不都合というわけではないんだが」と言った。疑問の表情を浮かべる柴田だったが吹っ切れたように笑った。

「そっちにどう言う事情があるか知らねぇが放課後走るなと言われるのは無理な相談だ。 話はそれだけか？」

柴田の中では走って帰ることは決定事項のようだ。走るのをやめさせるのは難しいと感じた蒼空は「ああ」と答えた。

「そうか」と笑顔で言った柴田はそのまま立ち上がり空き教室を去って行った。残された蒼空は優希に「うまく行かないもんだな」と愚痴をこぼした。

「そうだね」と優希は答えた。２人は「はぁー」と大きくため息をついて「放課後に昨日のカフェで打ち合わせしよう」と言って空き教室を去っていった。

授業が終わり、２人は昨日きたカフェにやってきていた。カフェでの注文は２人とも昨日と同じで、蒼空がサンドイッチとミルクティーを頼み、優希がメロンパンとオレンジジュースを頼んでいた。席に着くなり「どうする？」と蒼空は優希に聞いた。

優希はその質問には答えずにメロンパンを一口食べる。食べながら考えていたようだったが、思いつかなかったのか「どうしよっか？」と逆に質問してきた。

蒼空もサンドイッチを食べて考えるそぶりを見せる。しかし、何もいい案が思い浮かばず、このサンドイッチは美味しいなということしか思い浮かばない。サンドイッチを食べ終えた蒼空は何も思い浮かばなかったので現在の情報をまとめるため優希に言った。

「とりあえず、思い浮かばないから今の情報をまとめようか」

仕方ないかと言った様子で優希が「了解」と言った。

「公園で喧嘩が起こるのは１０月２６日木曜日の１９時３０分ごろだ。そして今日は１０ 月２４日なので後２日しかない。柴田がその公園に近付かなければ喧嘩は起こらずにビデオを撮られる心配もないと思う。しかし、今日柴田に走らないでと提案したが拒否された。あの様子だと走るのはやめてくれないと思う。ざっくりとだがこんなところか」と今の状況をざっくりと蒼空はまとめた。

それに対して優希は「そうだと思う」と返事をしたが、顎に指をあて考えるそぶりを見 せる。その様子を見て蒼空はミルクティーを飲んで優希の考えがまとまるのを待っていた。

数分後何か思いついたのか、優希は顎から指を離して口を開いた。

「解決方法って公園に近づかないようにするだけで本当にいいのかな？」

蒼空は質問の意図がわからないのか「どう 言う意味だ？」と聞き返した。少しだけ考えるそぶりを見せた優希だがすぐに返答を思いついたのか答えた。

「３年前にもあったじゃん。鳩山先生が階段でこけた原因が変わった出来事」

それを聞いた蒼空は優希が何を言おうとしていたのか理解した。

「つまり、公園に行くのを防いでも別の何かの原因で柴田が大会に出られないことを危惧 しているってことだな？」

その返答に満足したのか「うん」と笑顔で優希は頷いた。その優希の様子を見て笑みを浮かべた蒼空だが、防ぐ方法が未だ思いついていない現状を思い出し頭を抱えた。

それから数分が経ち優希は何か思いついたのか「あっ」と声を出した。蒼空は優希の方を向いて「何か思いついたのか？」と言った。

優希は緩やかな笑顔で「蒼空の家って執事が何人かいたよね？」と聞いてきた。今更なぜそんなことを聞くんだと疑問に思った蒼空は「確かに何人かいるけど執事がどうしたんだ？」と聞いた。優希は緩やかな笑顔を変えずに「だから、大人の人にその喧嘩を注意してもらうんだよ」と自信満々に言った。

蒼空はそのセリフに「なるほど」と驚いた様子になった。蒼空は走ることをやめさせる 方法で考えていたので喧嘩を仲裁するというのは考えていなかった。

「それならうまく行くかもしれないな」と言った蒼空の顔は笑顔だった。

「でしょ」と優希は変わらず笑顔で答えた。だが、少しだけ蒼空の顔は心配ごとがあるのか浮かない顔に戻った。その顔を見た優希は「何か心配事でもあったの？」と聞いた。

蒼空は「うーん」と唸って「俺が執事を動かせるのは週に何度もってわけじゃないから な。２６日にその執事に喧嘩を仲裁してもらうだけで、はたして成功するかどうかなんだよな」

それを聞いて優希も少し浮かない表情を浮かべる。そして、指を顎に当て考えるそぶりを見せるが特にいい案は思い浮かばなかった。

「とりあえず今日の話し合いはここまでかな」と優希が言った。蒼空はあまり浮かない表情をしているが何も思いつかないため解散を受け入れた。

別れ際に「まだ明日があるからきっと今日よりもいい案が思い浮かぶよ」と緩やかな笑 顔を浮かべた。

その優希の表情に対して、浮かない表情を向けるのは失礼と思い、少しだけ口角を上げてできるだけ笑顔で「ああ」と返事をした。優希と別れてから蒼空は寝るまで喧嘩を止める方法について考えていたが思い浮かばずに眠ってしまった。

目を開けると蒼空は驚いた。蒼空の周辺は薄暗く置かれているものはテレビと机とその 上にテレビのリモコン、そして蒼空が座っている椅子だけだ。その場所は蒼空がまた正夢を見ているのだと確信させるものだった。

しかし、今まで見た正夢では同じ出来事で２度見ることはなかった。考えていても仕方 ないと思い蒼空はリモコンに手を伸ばし電源ボタンを押した。映像は蒼空たちが通っている高校の授業中の様子だ。黒板には日付が記載されており、１０月２６日木曜日と記載されていた。

喧嘩が起きる日のようだと思ったところで映像が切り替わった。柴田が部活終わりに走って帰っている様子だった。あたりはすっかり暗くなっている。そして柴田は公園に入った。公園に入った柴田は前の正夢と同じように西成の生徒の３人組に絡まれていた。また前と同じ正夢を見るのかと思った。

しかし、喧嘩をしようと３人組の１人が柴田に殴りかかろうとしたところで少し離れた ところで声がした。その声を発した人物が映像に映し出された。現れたのは蒼空もよく知っている人物で、その人物は蒼空の家で執事をしている坂本だ。

坂本が来て西成の生徒３人組は去っていった。坂本が柴田に何か声をかけているようだ。

しかし、正夢の映像ではノイズがひどく何を言っているのかわからない。柴田が頭を下げて何かを言っているのを見て、多分坂本が、柴田と西成の生徒３人組が喧嘩をしようとしていたところを注意して、そのケンカを止めてくれたことに柴田が礼を言っているところなのだろうなと思った。

そのまま２人は少しだけ話した後、別れていった。公園には誰もいなくなったが、その 近くでビデオカメラを持っている村田の映像が映し出されていた。

その村田の表情は苦虫をすり潰したようなイラついた表情を浮かばせていた。

どうやら優希の言った案はうまく行くのだと思い安堵した。

しかし、それで正夢は終わらずにテレビの映像はまだ流されたままだ。また授業中の映像が流され出した。日付が変わっており１０月２７日金曜日と記載されていた。

その映像が流された瞬間とてつもなく嫌な感じがした。そして先ほどと同じく、柴田が学校の帰り道で公園に入る映像に切り替わった。先ほどと同じく西成の３人組の生徒がいた。今度は先ほどの２３日の映像と違い、坂本の注意は入らずに喧嘩が始まっていた。

そして その公園の近くにはビデオカメラでその喧嘩のシーンを撮影している村田の姿があった。ビデオカメラで撮影している村田の表情は邪悪な笑みを浮かべている。

その邪悪な笑みに、はらわたが煮え繰り返るような気分になった。多分、今まで一番怒 っているのだろうなと蒼空自身そう思った。

映像が切り替わり、柴田が大会を失格にさせられているシーンになった。柴田は泣きそうになりながら大会会場の武道館を去っていった。

そこであたりが真っ暗になり、目を開けるといつもの見慣れた天井がそこにはあった。

時計を見ると６時２０分で１０分早く起きたようだ。目覚ましが鳴らないようにその機 能を止めておく。

しかし、同じ出来事で２度も正夢を見たことには驚いた。少しだけ、正夢を短期間で２回見たことについて考えはしたが、特に思い当たることはなかった。

どういった理由でこの正夢は見るのだろう？

そう疑問に思ったが答えが出ることはなかった。

そんなことを考えていても仕方ないので夢の内容について蒼空はメモをとり、正夢で見たことについて考え始めた。２６日の木曜日の喧嘩を止めたとしても２７日にまた喧嘩をしていた。

多分だが、その２７日の喧嘩を止めたとしても１１月５日の大会が始まるまで、村田は柴田に喧嘩をさせるだろう。

村田の邪悪な笑みは意地でも柴田の大会出場を失格させる意図が窺えた。

それにしてもあの村田の邪悪とも思える笑みはムカつく。なぜそこまで柴田を大会に出場させたくないのかわからなかった。

柴田は優勝候補の１人だから、出てほしくなかったのかと考えたが、そんなことでこんな大それたことをするのかと思った。

考えていても仕方ないと思い正夢の内容を思い出していた。柴田が失格させられるのは喧嘩のシーンをビデオに撮られていたからだ。ビデオを撮られたせいで大会の運営にその証拠を提出され失格となってしまう。

しかし、２６日の喧嘩を止めても次の日に、喧嘩が起きてしまう。それ以降も同じ結果になると考え、村田の映像をどうにかするしかないと考えた。

映像をどうにかすると言っても執事の坂本を動かせるのは１日だけなので、どうするこ ともできないなと思った。

ふと柴田の持っていたビデオカメラが引っかかった。そして何か閃いたのか、夢で見た村田のような邪悪な笑みを蒼空は浮かべた。そして携帯のメールに今日の放課後にいつものカフェで集合と優希に送った。

学校では優希とは特に話をせず、時間が過ぎて放課後になった。そしていつものカフェで蒼空と優希は集まっていた。

蒼空と優希は昨日と同じメニューのサンドイッチとミルクティー、メロンパンとオレン ジジュースを注文して席についた。

蒼空は自信があるのか席に着くなり話し始めた。

「いい案が思い浮かんだ」

その一言に優希は緩やかな笑顔を浮かべた。

「私は特に思いつかなかったよ。どんな案を思いついたの？」

少し慌てた様子の優希に手を伸ばして「まぁ、待て待て」と蒼空は言った。

そして真剣な顔になり「実は昨日も正夢を見たんだ」と言った。その一言に優希は目を大きく見開き驚いた。

「また正夢を見たの？」と気づいた時には聞き返していた。

「ああ」と冷静を装って蒼空は頷いた。

「どんな正夢を見たの？」と前屈みになって優希は聞いた。

「優希の案はある意味では成功していたが、結果的には失敗していた」

言い回しがわかりづらいのか優希は「それってどういう意味？」と質問した。

「大人に注意してもらうという案だが、１日だけ見れば成功していたということだよ。つまり１日だけ成功しても次の日に襲われて、その喧嘩のシーンを主犯格である村田にビデ オで収められてしまう」

その説明に優希は納得した様子で「蒼空の執事の坂本さんは確か１日しか動かせないって言っていたよね。ということは、大会まで１週間以上ある現状では厳しいね」

優希のセリフに頷き「実際２度目の正夢でも失敗に終わっていた」と蒼空は言った。そこで何か疑問に思ったのか優希は不思議そうな表情を浮かべた。

「同じ出来事で２度目の正夢を見たのは今回が初めてじゃなかったっけ？不思議なことも 起こるものだね。どう言った原理で正夢を見ているんだろうね？」

その優希の問いに対し、両手を肩のところまで上げてわからないというポーズをした。 「正夢がどう言う原理で起きているのか今朝ちょっとだけ考えたが、結局答えはわからな かった。だからまぁ考えるだけ無駄かなと思っている。それに正夢を見ていることがもうすでに不思議な出来事だよ」

少しだけ目を見開いた優希は「それもそうだね」と笑った。

二人とも少し落ち着くためにサンドイッチとメロンパンを一口食べた。そして話をもどすように「どこまで話していたんだっけ？」と蒼空は言った。

優希はナプキンで口を拭いてから「喧嘩を止める解決方法を言おうとしていたところだ よ」と言った。

「そういえばそうだった」と言い蒼空は解決方法について優希に話し始めた。

「西成の生徒３人組と柴田が喧嘩するのを止めるのは正直難しいと思うんだよね」

優希が何か言おうとしたが、蒼空はそれを手で遮った。そして話を続ける。

「だから、喧嘩を止めるのではなく村田の撮影しているところをどうにかする」

「それって、喧嘩を止めるのではなく撮影している村田って人を注意するってこと？それ ならまた次の日も結局喧嘩をふっかけてビデオを取ろうとするんじゃないの」

優希は蒼空に手で遮られる前に素早く自身の疑問をぶつけた。

その意見に対し蒼空は優希の前では見せたことのなかった、少しだけ悪そうな顔で笑い 言った。

「村田の撮影シーンは別に注意しないさ。存分にその喧嘩のシーンは撮ってもらうことに するさ。ただ、喧嘩のシーンを撮影しているのは村田だけじゃないがな」

うわー悪そうな顔と思いながら、蒼空の意見について考えるため優希は顎に指を当てた。 「つまりこちらもビデオを撮るってこと？」

「ああ、目には目を歯には歯を撮影には撮影をってね」と即座に蒼空は頷いた。

そして続けて言った。

「それも村田のように一箇所だけの撮影じゃなくて、いろんな角度から撮れるようにする。 もちろん、撮影している村田自身も撮影する。そして、そのビデオを村田に見せて脅す」

そのセリフに優希は呆れたような表情を浮かべる。

「脅すって怖いことするね。けど……悪くない方法だね」と蒼空と同じように悪そうな笑 みを浮かべる。そして、疑問があるのか優希は質問した。

「けど、いろんな箇所に撮影ってどうするの？」

それに対し、蒼空は自信満々に答えた。

「それは、坂本の担当分野だ。なんとかしてもらうよ」

「……そこは人任せなんだ」と優希はまた呆れた表情を浮かべた。

そしてその日の話し合いは無事に終わった。翌日の１０月２６日木曜日、事件当日の日 がきた。

蒼空と優希はいつも通りの日常を送った。そして授業が終わり柴田は部活に向かった。

蒼空と優希はその日はカフェで集まらずにそれぞれ自分たちの家に帰っていった。

そして事件が起きる１９時半ごろがやってきた。蒼空は家でのんびりしていた。ピロン と音がなり携帯を見ると優希からメールが来ていた。メールの内容は「今日の作戦うまく いくかな」といったものだった。

そのメールに対し「大丈夫だ」と返信を入れておいた。

そして１時間半が過ぎ時刻は２１時となっていた。２階の自分の部屋の窓から見ると坂本が歩いているのが見えた。

すぐさま一階に降りると坂本がちょうど家の中に入ってきた。

「どうだった？」と慌てるように帰ってきた坂本に聞いた。

その様子を見て坂本は「落ち着いてください」といい「撮影したものを少しだけ見やすいように編集しますので３０分だけお時間ください」と説明し、自分の部屋に戻っていった。

少しだけ文句を言いたくなった蒼空だが、我慢して３０分間、自分の部屋で待つことにした。

３０分が経ち蒼空の部屋のドアにコンコンコンとノックが響く。すぐに蒼空は扉を開け「うまく撮れていたか？」と聞いた。それに対し坂本は毅然とした態度で「はい、無事に撮影できていました。どうぞご覧ください」と言いＵＳＢを渡して部屋を去っていった。

蒼空は坂本と一緒に見たいと思ったが、坂本は先ほどまで蒼空の都合に合わせてくれて いたので、これ以上こちらの都合に付き合わせるのは悪いと思い１人でみることにした。

動画の内容は蒼空の希望するものがしっかりと収めれられていた。

喧嘩が始まるシーンからしっかりと撮影されており、同じシーンを撮影しているであろう村田の姿もバッチリと撮影されていた。

また嬉しいことに、喧嘩が終わった後に倒れている３人組に近づく村田の姿が映し出さ れており「よくやったな３人とも。これで柴田はこの喧嘩の動画を大会に渡すだけで失格 となるだろう」と言っている村田がしっかりと録画されていた。

これで予定どおりに村田を脅せる。早速、明日村田を脅す作戦を決行するために優希にメールで伝えた。

メールには、明日の朝、学校近くのカフェで集合と記載しておいた。そしてメールには蒼空が今見た動画も載せておいた。１０秒もたたずに、ピロンと携帯の音が鳴り確認すると「了解」と短く返信が帰ってきていた。

翌日、朝早く起きて支度をして家をでた。電車に乗っていると「おはよう」と声をかけられた。振り向くと優希がいた。「おはよう」と返事をした。

それだけ言葉を交わし電車の中では特に話はしなかった。午前７時に落ち合う予定のカフェに到着した。

お互いにコーヒーとサンドイッチを注文して席についた。

席に着くなり優希が「うまくいったね」と笑顔で言った。

「ああ、坂本には感謝だな。ここまで完璧な動画が撮れるとは思っていなかった。あとは 俺たちの番だな」

そういうと優希は真面目な表情をして「そうだね」と言った。

「ところで村田って人を脅すのはどうするの？普通に動画を見せても私と蒼空君の二人だけじゃ逆に脅される気がするんだよね」

その点が気になるのか優希は質問した。その質問に対して蒼空は少しだけ悩んだそぶりを見せる。そして口を開き「今日の昼休みに柴田に正夢について話そうと思う」と言った。

優希は少しだけ驚いていたが、緩やかな笑顔をして「了解」と言った。そして悪戯な笑みを浮かべて「蒼空じゃボコボコにされちゃうから、ボディガードに柴田君に来てもらうってことだね」と言った。

そのセリフにむっとした蒼空だが、まとを得ていたため「そういうことだ」と少し悔しそうに言った。

優希は蒼空のその様子がおかしかったのか少しだけ控えめに笑った。

「じゃあ、今日の昼休みに柴田君のクラスに行くわけだね」

そのセリフに「そうだった」と思い出したように嫌そうな顔をした。蒼空のその嫌そうな顔を理解したのか「前に昼休みで話した時にアドレス交換しておけばよかったじゃん」と言った。

「そうだな。今日アドレスを交換しておかないとな」

朝の話し合いはそれで終わり、２人は朝食を食べて学校に向かった。昼休みになり優希と共に、柴田がいる教室に向かった。前と同じで柴田は机で勉強しており、呼び出しには問題なく応じてくれた。

空き教室に行く予定だったが、動画を録画しているＵＳＢを持っていたため、パソコン教室を借りた。蒼空はあらかじめ午前の休み時間にパソコン教室を借りる手続きを済ませておいた。

動画を見てもらう前に、柴田に正夢について話をした。柴田は話を最後まで聞いてくれ たが、とても信じられないといった様子だった。

しかし、昨日公園で襲われたことは柴田しか知り得ないことだった。そのため蒼空の正 夢について強く否定できていない。柴田のその様子に満足した蒼空はパソコンにＵＳＢを接続して昨日の喧嘩のシーンの動画を見せた。その動画を黙って見ていた柴田だったが、 動画が終わるとその内容にショックを受けたのか片手で目を押さえ沈黙していた。

蒼空と優希はその柴田の様子を黙って見守っていた。３分が経過した頃、柴田が口を開いた。

「この動画はどうやって撮ったんだ？」

その質問に対し蒼空が答えた。

「それはうちの執事の坂本に頼んだんだ。正夢で喧嘩をする場所はわかっていたからな。 セットするのは比較的簡単だったよ」

悪い笑みを浮かべて蒼空が言った。

「よく言うよ。ビデオカメラを公園にセットしたのは全部坂本さんなのに」と２人に聞こ えないように小声で優希が言った。

その声が少し聞こえたのか蒼空が「何か言ったか？」と優希の方に向いて言ったが「何も言ってませーん」と優希が答えた。

柴田は少し驚いた様子で「執事がいるのか。福田って金持ちなんだな」と言った。蒼空は「まぁね」と少し嬉しそうに答えた。その笑みにつられて少し笑みを浮かべた柴田は真剣な表情をして「それでどうするんだ？」と今後について蒼空に聞いた。

蒼空も真剣な表情を浮かべて「この喧嘩を仕組んだ主犯格である村田を脅そうと思う」と言った。

「村田を知っているのか」と驚いた様子で柴田が言った。

「ああ、名前は正夢で見たからな。その時に覚えておいた。あとはどうやって村田に接近 するかだな」

そう言って蒼空は両腕を組んで考えるそぶりを見せる。

優希も顎に小指を当てて考えるそぶりを見せている。

「遼の連絡先なら知っているぞ。あ、遼ってのは村田のことな」と平然と柴田が答えた。

それに驚いて「なんで知っているんだ？」と蒼空が聞いた。

「だって俺、遼とは同じ時期に空手を習った仲だからな。確か幼稚園の時に一緒に習って ずっと続けてんだよね。あいつのお父さん日本でも有名な空手家で最初は２人で一緒に教 わっていたよ」

柴田は過去を思い出すように眼を細めた。

「そうなのか。それだと脅すのは気が引けるか？」と気になったことを蒼空は聞いた。

柴田は上を向き考えがまとまったのか、口を開いた。

「気が引けないと言えば嘘になるが、かといって黙って大会を失格になるのは絶対にしたくない。だから、きっちりと問い詰めようと思う」

その覚悟が嬉しかったのか蒼空は笑顔になり「そうか。わかった。じゃあ村田との話し 合いのセッティングは任せた」と言った。

柴田も親指を立てて「おう」と返事をした。

「それじゃ昼休みの話し合いはこれで終わりだな」と蒼空が言ったが、「メールアドレス の交換忘れているんじゃない？」と優希が言った。

蒼空は完全に忘れていたと言った様子だったが切り替えて携帯を取り出した。柴田も携 帯を取り出し３人はメールアドレスの交換をした。

「放課後は校門前に集合にしよう」と蒼空が言った。そのセリフに思い出したように柴田 が「そっか。放課後になるのか。じゃあ今日の部活は休むことを連絡しないとな」と残念 そうに、呟いた。

その呟きを聞こえた蒼空と優希が何か声をかけようとしたが「まぁ、大会に出れるかど うかの瀬戸際だから仕方ないか」と柴田が呟いたのを聞いて特に何も言わなかった。

そして昼休みの話し合いはそれで終わった。

放課後になり校門前で集合していた。

「村田との話し合いの場は用意できたか？」

集まってすぐに蒼空が口を開いた。その質問に対して「おう、バッチリだ」と笑顔で柴田が答えた。

そして携帯のメール画面を見せて「集合時間は１７時で集合場所は俺の家になった」と 柴田が言った。そして蒼空達３人は柴田の家に向かった。集合時間より早めに家に着いた。

柴田の家は オートロックがついている立派なマンションの一室だった。家に上げてもらったが玄関に両親の靴は見当たらなかった。

「母親は買い物？」と優希が聞いた。

「いや、働いているよ。生活自体は厳しくないんだが、母親は仕事が好きなのか働いてる んだよね。好きなことをやるのはいいことだよな」と笑顔で柴田は言った。

「今日の話し合いについては両親がいないのは好都合だな」と冷静な口調で蒼空は言った。 「ああ、それについてはその通りだ」と真剣な表情を浮かべて柴田が言った。

しかしまだ集合時間までは時間があったのでリビングで話し合うためのセッティングをしていた。１０分くらい経つとモニターから音が鳴り映像が映し出された。そのモニターには村田が映し出されていた。オートロックを開け村田をマンションに招き入れる。

村田がマンション入口から家に来るまでに柴田は深呼吸して落ち着こうとしている。

その様子から緊張していることがわかる。無理もないかと蒼空は思った。そして村田が家にやってきた。４人掛けテーブルがあるリビングに柴田が村田を出迎えて話し合うことになった。

リビングに入ってきた村田の表情を見たが、蒼空と優希の２人の顔を見て誰だこいつらとなっているだけで、なぜ呼ばれたのかわかっていなさそうだった。

それぞれ椅子に腰掛けた。ちなみに席は柴田と村田が正面を向くように座り、柴田の隣 に優希が座り、村田の隣に蒼空が座った。

その直後村田が「この２人は誰だ？」と聞いてきた。柴田は「この２人は俺の友達だ。男の方が福田で、女の方が石川だ。村田にこの２人を会わせたくなって呼んだんだ」と言った。

そう言うと、村田は眉を顰めてこちらを警戒するそぶりを見せるが特に何も言わずに柴 田の方を向き直す。蒼空と優希も柴田の方を向く。柴田は両手を叩き「さてと、前置きはここまでにしとくか。本題に入ろう」と真剣な表情で村田を睨んだ。

村田も柴田を睨み返した。敵対心をあからさまにしている柴田を見て、村田もなぜ呼ばれたのか理解したらしい。

「遼、昨日俺は公園でお前の学校の生徒３人組に喧嘩を吹っ掛けられた。お前の差金なの か？」

あまりに直球な質問に蒼空は驚き、何か言いたくなったが我慢しておくことにした。 「何の話だ？大会前にお前、喧嘩なんてしてんのか。失格になっても知らねぇぞ」

村田は何を言っているのかわからないと言った表情で知らないふりをした。まぁ知らないふりをするよなと思った蒼空は柴田の方に顔を向けた。柴田も蒼空の方を向き頷いた。

その様子が気になったのか村田は蒼空の方に顔を向けた。蒼空はＵＳＢを取り出して柴 田のノートパソコンを借り、ＵＳＢに保存している動画を再生した。黙って見ていた村田だったが、喧嘩が終わって自分が現れたことに「何だこれは⁉」と憤った様子を見せた。

そんな村田に対し柴田は冷静に「で、この喧嘩はお前の差金なのか？」と改めて同じ質 問をした。

その質問に対し村田は今度は黙っていた。

「何でこんな真似をしたんだ？」と柴田は怒りを抑えながら聞いた。

村田はそれには答えずに「どうやってこの動画を撮ったんだ？」と聞いた。それに対し 柴田は蒼空と優希の方を振り向いた。

その柴田の行動だけで察したのか「お前ら２人がこの動画を撮ったのか？」と聞いてき た。

「ああ、厳密には俺ら２人で撮った訳ではないが、この喧嘩を撮影しているお前ごと撮影 すると決めたのは俺だよ」

その蒼空のセリフに苛ついたように「なぜそんなことをしたんだ？」と言った。

蒼空は当たり前のように「友達が痛い目に遭うってわかっていたら助けるのはごく自然 のことだろ」と言った。

そのセリフに村田は苛ついたのか「ちっ」 と舌打ちをした。

「なぜこの場所で喧嘩が起こることを知っていた？俺と３人以外は知り得ないはずだ。誰か一人を懐柔したとしても喧嘩が起こることを事前に知っていないとそんな行動はできな い」

「その情報についてお前に言うつもりはない。それに喧嘩のシーンはお前が撮影している姿ごと撮っている。お前にとってはそれが重要なことだろ？」と蒼空は不敵な笑みを浮かべて言った。

村田は忌々しげに「そうかよ」と言った。

「で、福田つったか？俺にこの動画を見せて何をさせたいんだ？」

「村田、あんたが明日、もしくは明後日にやろうとしていることをやめてもらいたい」

村田の表情が歪む。

「そんなことまでお見通しかよ。ふざけてやがるな。まぁビデオを録画している姿を見て 入れば察しもつくか」

「もし、やめなければこちらもこの動画を提出するまでだ。確かに仕組まれていたとはいえ路上で喧嘩をした柴田は大会を失格になるかもしれない。だがこちらの動画を提出すれば確実にお前は失格になるだろうな」

その蒼空のセリフに村田は何も言わず椅子にもたれかかり上を見上げる。

少しの沈黙の後、村田は口を開いた。

「直充が失格になっても俺が出られないんじゃ意味がないな。……はぁ、わかった。要求 を飲む。大会の事務所に俺が撮った動画は提出しない」

村田はポケットから財布を取り出し、メモリーカードを柴田に差し出した。村田の行動が理解できなかったのか「何の真似だ？」と柴田が聞いた。

「こっちの作戦は全部バレているんだ。その録画データはもう俺には必要ない」と村田は 諦めたようにセリフを吐いた。

「なぜこんなことをしたんだよ？俺はお前とこの大会で戦えるのを楽しみにしているんだ ぞ」

怒ったように、しかしどこか表情は悲しそうに柴田は言った。その柴田のセリフに村田は怒りを露わにして「楽しみだと？ふざけるなよ。俺はお前が目障りなんだよ。何の血筋もないお前がどんどん強くなるお前が心底目障りだった」と捲し立てるように言った。 「……そうだったのか」とどこか寂しそうに柴田は言った。

「ああ、そうだよ。遼、お前にわかるか？親が凄いからと言って子どもにもそれを押し付けてくる周りの連中どもが。優勝しても親が優秀だからと当然といい、負ければ呆れられ てしまう。俺は優勝したのならその結果を喜んで欲しかっただけなのに……」

柴田は何も言えずに黙り込んでしまう。優希の方を見ると何も言わずに村田の話を聞い ていた。誰もいいそうになかったので、蒼空は口を開いた。

「お前の親が空手の世界の有名人で、周りがお前に期待しているのはわかった。だが、そ のことと柴田を今回の大会で失格にさせるのは結びつかないと思うんだが」

そう言うと村田は蒼空を睨みつけ自嘲するように笑った。

「確かに関係はないかもしれない。けどな中３の頃に直充に大会の決勝で負けた時に周り の連中は直充を褒め称え、そして俺にはガッカリした様子を見せた。そのことが、凄くむ かついたんだ。中２の頃の同じ大会では俺が勝ったのに、その時は誰も何も言わなかった。 こんなの不公平だろ」

村田は目を潤ませ言った。

「それが理由か」と蒼空は言った。

「ああ、そうだよ。そして俺はその中３の大会から練習では体がちゃんと動くのに、試合 になると思うように体が動かなくなった。おかげで高１の大会では都内ベスト４にすら残ることができなかった。だから、全てがうまく行っている遼に痛い目にあって欲しかった。 そんな下らない理由で今回のことをしたんだよ」

それを聞いた柴田は席を立ち上がり、村田の前に行きその胸ぐらを掴み立ち上がらせた。 「なぜそのことを俺に言わなかった」

怒気を含んだ声で柴田は言った。

「お前が活躍するのが目障りだから今回の大会に出ないでくださいと正面切っていえと。 はっ、言えるわけないだろ」

どこか諦めたように村田は言った。

「そんなことじゃねぇよ。周りの期待が重かったとなぜ俺に相談してくれなかった」

その言葉に村田はイラッとし「お前に相談しても俺の気持ちはわからねぇだろ。俺とお前の境遇は違うんだ」と言った。

「ああ、俺とお前の境遇は違う。けどな、俺はお前が凄いやつだって認めているんだよ。周りの評価とかどうでもいいじゃねぇか。お前のライバルである俺が、お前を凄いやつだって認めているんだ。それだけで十分だろ」

その傲岸不遜な言葉に村田は絶句した。蒼空と優希も黙り込んで柴田の方を向いていた。

村田は胸ぐらを掴まれていた柴田の手を払い除け「何だよそれ」と呟いた。

村田は力が抜けたように床に座り込んだ。

「……何でそんなことで俺は嬉しく思っちまうんだ。俺は何がやりたかったんだろうな。 ほんと馬鹿だわ」

そう言い村田は立ち上がった。そして頭を下げて「すまなかった。俺は大会に出場しな い。今回のことについてちゃんと責任を取らないとな」と言った。

頭を下げている村田に対し、柴田はその頭にチョップをした。

「急に何するんだ？」

村田はチョップをされた頭を触って柴田の方を見た。

「責任を取るって言うなら大会にでろ。寮が出ていない大会なんてつまらん」

その柴田の言葉に村田は目を大きく見開きそして下を向いた。

「……いいのか。大会に出ても。俺はお前を失格にさせようとしていたんだぞ？」

柴田は今度は村田の肩を叩いて「ああ。済んだことはもういい。だから、大会で俺を楽 しませろ。それが今回の出来事の許す条件だ。」と言った。

「俺が出場したせいで優勝できなくても知らないぞ」

「やってみろ。お前が俺に勝てるならな」

柴田と村田はそのやりとりだけで仲直りをした。そのやりとりを見て、蒼空は優希に小声で「こんなことで仲直りってできるもんなんだな」と言った。優希は笑顔で「そうみたいだね」と言った。

それでその日は解散となった。そして、何事もなく大会の日はきた。蒼空と優希は柴田を応援するために武道館にやってきていた。

柴田は順調に勝ち進んでいる。村田も順調に勝ち進み現在３回戦をしている。村田の３回戦の試合が始まる前に蒼空と優希の席の近くの人がボソボソと話をしているのが聞こえる。

「あの村田ってやつ父親が有名なのに、高校になってから動きが固くなって３回戦止まり なんだぜ」

優希はそう言ったやつにムッとした表情を向けたが、柴田が近づいてきて「無視しとけ ばいいんだよ。ああいった連中は」と言った。

「けどさ」と優希が言いかけたのを遮って「どうせこの試合を見たら黙ることになる」と柴田は言った。

結果、村田は３回戦の相手に圧勝した。先ほどボソボソと話していた連中が唖然とした 表情をしていた。

柴田は当然と言わんばかりに「１回戦、２回戦のあいつの試合を見たが去年の時のよう な固さが完全に抜けていた。まぁ、当然の結果だな」と言った。その言葉に、優希は悪戯な笑みを浮かべて「柴田くんは村田くんに勝てるの？」と聞いた。

柴田は少し笑みを浮かべて「どうだろうな。ただ、決勝戦が凄く楽しみだ」と言って客席上から去っていった。

そして大会が終わり、その帰りにお疲れ会ということで、蒼空と優希と柴田の３人は外 食をしている。柴田は店に入ってから試合で負けた愚痴を言っていた。優希は「そうだね」などと適当に相槌を打ち、蒼空は注文したミートスパゲティを黙々と食べていた。

一通り愚痴を言い終えた柴田は大会で疲れているのか、蒼空の倍以上の料理を僅か１０ 分ばかりで平らげた。

蒼空と優希は柴田が愚痴を言っている間に食べ終えていたので、柴田の食事を見ていた がその食べっぷりに唖然としていた。

「食べた食べた」と満足そうに柴田は言った。

「ありがとな」と突然柴田が呟いた。蒼空と優希は柴田の方を向いて「どうした？」と聞 いた。

柴田は少しばかり真面目な表情をして「今回の件だよ。助けてくれてありがとう」

蒼空と優希は互いに顔を見合わし優しく微笑んだ。

「「どういたしまして」」

その後、他愛もない話をして時間を潰し店を後にした。帰り道に柴田が「それにしても正夢って凄いな」と言った。

「ああ、見ている本人である俺も凄いと思っている」

「ところで石川は何で福田の正夢を知っているんだ？」と疑問に思った柴田は優希に質問 した。

「柴田くんと同じだよ。過去に正夢を見た蒼空に助けられたからだよ。それ以来仲良くな って、蒼空が正夢を見たら手伝ったりしているんだよね」と優希は穏やかな笑顔で答えた。

それをきき柴田は少し考え込んだ。そして蒼空の方を向いて「なぁ福田、俺もお前が正 夢を見た時に手伝いをしていいか？」と真剣な顔で言った。

少しだけ驚いた蒼空は優希の方を向いた。優希は穏やかな笑みを浮かべている。それを見て蒼空も笑みを浮かべて「ああ、もしまた正夢を見た時はよろしく頼む」と言い手を差し出した。

「４度目の正夢の出来事はこんな感じでした。如何でしたでしょうか？」

俺は、小西と横山の２人を交互に見た。

「たく話が長いな。まだもう１つ正夢の出来事はあるんだろ？ちゃっちゃっと終わらせて くれ」と興味なさげに小西が言った。まぁ小西は俺の話を信じていないのでこの反応は仕 方ない。

「４度目の正夢も実に面白い話だった。家に帰ってビデオを見直すのが楽しみだ。それにしても次の正夢で最後か。少しばかり残念だ」と横山は言った。正直横山は結構不気味だと思っている。俺のこの荒唐無稽な話を信じているように見えるからだ。

横山が俺を信じる理由は何かあるのだろうと思ったが、今はどうでもいいことなので頭 を切り替える。

そして俺は尋問室に置いてある時計を見た。時刻は１４時５５分だった。それを確認し 俺は「最後の正夢の出来事について話す前にトイレに行ってきていいですか？」と言った。

小西は「はぁー」とため息をつき「仕方ないな。柴田トイレの付き添いを頼んでいいか」と言った。

「これから皆さんの分の飲み物を買いに行こうと思っているんですが……」と直充は言った。その言葉に困った表情を見せた小西だが「仕方ない。付き添いは俺が行くとしよう」 と言った。

先に直充は尋問部屋を出て行った。出て行く際にこちらを向いてきたので、目を合わせるだけしておいた。そして俺が尋問部屋を出る際に小西は「横山さんたちも休憩してくれていいですよ」と言った。

「いえ、私たちはこのままここで待っているよ 」

横山たちはこの尋問部屋から離れる気はないようだ。ずっとビデオを撮影している田中さんを休憩させればいいのにと俺は思ったが、田中さん自身も移動する気はないようだ。

そして俺と小西はそのままトイレに向かった。

尋問部屋からでた直充は自販機があるところには向かわず、警察署の外に出た。警察署を出てすぐの木のところにニット帽を被った２０代くらいの女性がいた。女性はこちらを向いて穏やかな笑みを浮かべた。

「お疲れ、直充」

「ああ、お疲れ優希」

２人は軽く挨拶し、警察署でどんなことが起きているのか気になっていたのか優希が聞 いた。

「警察署での蒼空の話はどんな感じ？」

直充は笑顔で「結構楽しいぜ」と言った。

「楽しい？」と優希は怪訝な表情を浮かべる。

「蒼空の正夢の話は何度聞いても飽きないってことだ」

「……なるほどね」と優希は合点がいったのか笑顔になった。

「と言うことは順調にことが運んでいるってことだね」

「順調か……」と少し含んだ物言いを直充はした。少し険しい表情をして「何か問題あっ たの？」と優希が聞いた。

「ああ、大学時代の蒼空の正夢の話が聞けなくなりそうだ。その出来事は俺も活躍したと いうのに」とがっかりしたように直充は言った。

「……そんな下らないことでややこしいこと言わないでよ」と呆れたように優希が言った。

そこで話を切り替えるように優希が「目的のものは持ってきたよ」と直充にＵＳＢを手 渡した。

「おう、確かに受け取った」と直充が言った。ＵＳＢを渡した優希は滅多に言わない愚痴 を直充に言った。

「今朝９時ごろに蒼空からメールが届いたんだけど、今日の１５時までに動画を編集して 持ってくるようにって書いてあったんだよ。 おかげでこの６時間すごく忙しかった。いや、 昨日で全ての証拠が集まっていたから今日中には編集をやろうと思っていたんだよ。けど 徹夜で作業をしていたから眠ってからやろうと思っていたら、メールが９時に届いた時に はびっくりしたよ」と捲し立てるように優希が言った。

直充は優希が少しばかりお冠のようだと思った。

そして優希の愚痴が終わり、「徹夜なら帰って寝ろよ」と言って警察署に戻ろうとした。 「ちょっと待って」と優希が直充を引き止めた。引き止められたことに驚いた直充が振り 向いたが、優希が先に話をした。

「私も警察署の中について行っていいかな？」

直充は少し驚いたが「まぁ優希は協力者だから大丈夫だと思うが、けど捕まる可能性も ０じゃないが、それでもいいのか？」と聞いた。

優希は笑顔で「そんなこと怖くないよ」と言った。

「そうか」と直充も笑顔でいい、そして「それじゃ一緒に尋問部屋に行くとしますか」と 言った。

そして２人は本来の目的である飲み物を買って尋問室に戻っていった。

尋問室に優希が入ってきて俺は驚いた。まぁこうなるかもなと心のどこかで思っていた ので優希にだけ見えるようにやれやれ仕方ないと言った感じで笑った。

女性に気づいたのか小西が「その女性は誰だ？」と直充に聞いた。

「その女性なら俺の協力者ですよ」と直充が答える前に俺は言った。

「協力者？」と怪訝な表情を小西がする。

「予言の動画の再生回数を手伝ってもらった協力者ですよ」

俺がそう言うと優希は軽くお辞儀をして「石川優希と言います。福田蒼空の協力者をしています」と言った。

「……ああ、そういえばそんなことを言っていたな。ん？と言うことはわざわざ捕まるためにこんな場所に来たのか？」と疑問を浮かべた表情で小西が言った。

俺は「そんなわけないでしょ」と小西の言ったことを否定した。

「彼女がここに来たのは、２つの動画を持ってきてもらうためです」

「２つの動画？」と小西が眉を顰める。小西と対照的に横山が目を怪しく光らせて「その動画というのは正夢で見た出来事についてなのか？」と言った。

俺はそれに頷き「はい。今までの正夢の話だけでは流石に信じてもらえないと思っていました。だから、今までの話はこの動画を持ってきてもらうまでのただの前座です」と言 った。

横山が残念そうに「ということは５つ目の正夢の話はしないのか。少し残念だ」と言っていた。

横山は最初から真剣に話を聞いていたので少しだけ申し訳ない気持ちになった。小西は状況が飲み込めていないのか、少し怒ったように「２つの動画とはなんだ」と言った。俺は冷静に「今までの正夢の話だと、小西さんが信じてくれませんよね？」と言った。

「当然だ」

「だから信じてもらうためにこの２つの動画が必要なんです」

どういう意味かわからなかった小西だが、横山は俺の言っている意味に慌てた様子を見 せなかったので何となくだが気づいているようだった。

「ま、説明するよりも動画を見てもらった方が早いですね」

そう俺が言うと直充がパソコンにＵＳＢをつけて１つ目の動画を再生した。その動画はある事件について俺が話している内容だった。そのある事件とは、すでに解決しているものだったが、まだ世間に公表されておらず、警察しか知らない情報だった。

その動画を見て横山が「ほう」と興味ありげに呟いた。しかし、小西の方はワナワナと 体を震わせ怒っているそぶりを見せる。

「何が正夢だ。こんな情報はそこのパソコンの得意な女が、警察署にハッキングして手に 入れたものなんだろ」

まだ小西は正夢について信じられない様子だった。俺自身この正夢では信じてもらうにはまだ弱いなと思っていたので問題ない。

そして２つ目の動画を再生した。その動画は警察官の１人が痴漢冤罪の手伝いをしていると言う内容だ。警察官を侮辱したその動画に小西は動画の停止ボタンを押して蒼空に怒りの表情を向けて立ち上がった。

しかし、直充が素早く動き小西に落ち着くようにと宥めた。

小西は少し落ち着いたのか席に座り動画を再生した。動画の内容に怒りの表情をしていた小西の顔はみるみるうちに青ざめていった。

その動画の内容には証拠がいくつもあったからだ。例えば、痴漢冤罪を手伝っている警 察官の名前が瀬戸康二だと判明していること。そして、瀬戸康二が「痴漢冤罪なんて楽な 稼ぎはないな」と言っているところをバッチリとビデオカメラで録画できていること。他にもあるが、小西はその動画の内容に頭が痛くなったのか頭を手で押さえ少しばかり沈黙していた。

尋問部屋にいる全員は小西が何か発するのを待っていた。十分が過ぎた頃、小西がようやく口を開いた。

「これは本当のことなのか？」それに対し俺は真剣な表情をして「はい、本当のことです」と答えた。

小西は「はぁー」とため息をついて「どうやってこんな交番にいる警察官を録画できた んだ？」と気になるのか聞いてきた。

それに対し、俺は直充のほうを向いて「協力者がいるからですよ」と言った。下を向いていた小西は俺が向いた方向には気づかずに、「協力者というのはその女性のことか？」と 聞いてきた。俺はそれに対し手を振って否定し「いえ、俺の協力者は彼女以外にもう１人います。そこで調書を記載している柴田くんのことですよ」と笑顔で言った。

小西はそれを聞いて驚愕の表情を浮かべ直充のほうを見た。横山も少し驚いた表情をして直充のほうを向いた。

直充は悪びれもせずに「はい、俺は蒼空の協力者ですよ。蒼空の正夢の過去話でも高校 生の男を助ける話がありましたよね。あれ、俺です」と言った。

信じられないと言った様子の小西だが、数分経って落ち着いたのか「柴田、お前は後で 説教だ」と言った。

直充は「ええー」と嫌そうにしていたが、小西はそれを無視して俺のほうを向き「お前 の、いや、福田さんの正夢のことについては今までの話も含めひとまず信じよう。……福 田さんの要求についてはわかっているつもりだが、もう１度福田さんの口から言ってくれ」と言った。

俺は小西が信じてくれたことに喜んだが顔には出さないようにした。

「信じてくれてありがとうございます。俺の要求は１つです。１２月５日の９時までに東 京から全員が道府県に移動していることです」

小西はその要求に対して諦めたような表情を見せる。

「……はっきり言ってそんなことは無理だ。俺が福田さんの言うことを信じていてもできることとできないことがある。東京の人たち全員を他の県に移動させるなんてそんな大それたことなんてできるわけがない」

その場にいる２人を残して、全員が下に顔を背け沈黙する。俺は警察の協力があれば、なんとか可能かと思っていたが小西の見積もりではダメらしい。少し落ち込むが、まだ地震が起 きる日までには２週間以上の期間がある。諦めるにはまだ早い。

そんなことを考えていたがその沈黙を打ち破るように１人の男が「東京全員を移動させ ることなら可能だ」と言った。その声を発した人物に全員が顔を向ける。その人物は横山だった。全員に振り向かれた横山は、特に何も言わなかった。

誰も何も言わないので俺は横山に「本当に可能なのか？」と聞いた。

横山は俺のほうを向いて「ここで嘘を言う理由はないな。可能だ」と冷静に言った。「だが、３日ほど時間がほしい。君の言っていることは信じてはいるが、現時点では絶対に信じているとは言えないからな」

俺はその物言いに違和感を持つ。横山が言っているのは３日経てば、俺の言っていることを信じられるだけの根拠、あるいは嘘がわかると言っているようなものだった。

しかし、横山の事情について俺が考えてもわからないので３日待つだけでいいのかと思 い「ああ、３日待つだけで行動してくれる可能性があると言うなら、俺はそれで問題ないですよ」と言った。

横山は特に表情を変えずに「ありがとう。では私が３日間調べている間に」といい小西のほうを向く。

「ああ、その間に警察でも福田さんが言っていた瀬戸について調べておくことにしよう。

まぁこれだけ証拠があるなら捕まるのは確実と思うが」と小西は言った。

そして小西は俺のほうを向き「申し訳ない。あなたを捕まえたのは早とちりでした。逮捕状は取り下げておきます」と頭を下げ謝ってきた。

「いえ、もともと逮捕される予定で行動していたので問題ありません。話を聞いてくれてよかったです」と俺は笑顔で小西に言った。小西も少しだけ笑い「では今日は帰ってくれて構いません。それとこれは預かっていた福田さんの持ち物です」といい俺の荷物を渡してきた。その荷物の中には、携帯や財布などが入っていた。 横山が俺の携帯を見て「３日後の結果をお伝えするために連絡先を教えてください」と言い、横山は自分の携帯を出した。

横山と連絡先を交換し、俺たちは尋問室を後にした。尋問室から出た後、小西が家まで送りますと言ってきたが、それを断って電車で帰ることにした。電車で帰っている時、優希が「うまくいってよかったね」と笑顔で言った。

俺はコクリと頷いた。そして優希が「出所祝いに、今日は蒼空の家でご飯食べよっか。あ、もちろん直充も呼んで」と言った。

「出所祝いと言っても１日も経ってないんだがな」

「それでもめでたいことだし、祝おうよ」

優希は笑顔で言った。その笑顔を見て俺は、これは無理矢理にでも祝いをやるんだろうなと思い「わかったよ」と返事をした。

「じゃあ、仕事が終わった直充と一緒に何か食べ物買っていくからそれまで何も食べないでね」

「了解」

そう話しいると優希の家の最寄駅に着いたので俺と優希はそこで一旦別れた。その日の２０時に俺の家に優希と直充がやってきた。直充は仕事から一度家に帰ったのか私服姿だった。俺は２人を招き入れた。２人ともデパートで買ってきたのか、それなりに豪華な出来合いの食事とお酒を買ってきていた。

３人でお酒を飲んで、食事をして今日の出来事について話していた。

「俺が蒼空の協力者だって言った時の小西先輩の様子は面白かったなー。まぁその後、凄く怒られたけど……」

「そりゃ、怒られるよな」

「そうだよねー」

「それにしても、数時間とはいえ捕まるなんてな」

「捕まることはないとは思っていたが一応予定に入れていたからな。それにしても直充、警察が俺の家にくるのちょっと予想していた日にちより早いんだが、なぜなんだ？」

「それは小西先輩がフューチャフォックスについて独自に調べていたみたいなんだ。なぜ 独自に調べていたのかは小西さんが、前に蒼空の部屋に住んでいたからなんだ」

その言葉を聞いて、小西に尋問されていたことを俺は思い出し、疑問に思ったので聞いた。

「え？あの人、警察署の誰かがここに住んでいたみたいなこと言ってなかったっけ？」

「それは嘘だよ。自分が住んでいたなんて小西さんは言いたくなかったんだろうね」

「……そんな理由かよ」

蒼空は少しだけ呆れた気分になったが、それでも何故動画を見ただけで以前住んでいる ところだとわかったのか疑問に思った。

「けどなんで、俺の部屋が以前小西さんが住んでいた場所だってわかったんだ？」

「それは、そこの壁にちょっとした汚れがあるだろ？」

「ああ。ってそれだけでわかったのか？」

「わかったというよりかは警官としての勘と言っていたな」

「……マジかよ」

尋問されているときは真面目で手堅いイメージがある人物だと思っていたが、どうやら小西さんは思い込みが激しくすぐに行動に移すタイプのようだ。けど、その思い込みが当たっているのだから怖いなと俺は思った。

そう思って尋問部屋の出来事を思い出していたら、もう１つ気になっていたことを思い 出した。

「横山って人が入ってきた時にお前驚いていなかったけど、俺に内緒にしてた？」

「ああ、別に内緒にしてた訳じゃなくて言うタイミングがなかっただけだ。蒼空が捕まってから１１時くらいに横山さんが途中から尋問部屋に参加していいかって言ってきたから な」

「それなら仕方ないか」

そう話していると優希が「それにしても今回の蒼空の正夢は今までで一番の大事だよ ね」と言った。

「そうだな。俺もまさか１１月１日に今回の正夢を見たことになったのは驚いた」

「ああ、俺もその日に蒼空からメールで呼び出されて話を聞いた時には驚いたな」

「私も驚いたよ」

そう言った３人は警察に捕まるまでの１８日間の出来事について思い出していた。

大地震の正夢

目を開けると目の前には、テレビが置かれていた。そして、蒼空は椅子に座っており立つことができない。辺りは薄暗く、テレビと椅子以外には机とテレビのリモコンしか置かれていない。

その光景を見て、また正夢かと蒼空は思った。前に見た時は確か大学生の時だった。あ の時の正夢は大学の学園祭の日に爆破すると言った、爆破予告があり実際に建物が爆破すると言った正夢で大変だったなと思い出していた。

もしあの時と同じくらいの正夢を見たら今の仕事はどうしようと考えたが、まぁ映像を 見ないとどんなことが起こるのかわからないのでテレビの電源ボタンを押した。

テレビ画面に映し出されたのはなんて事のない東京の渋谷の映像だった。相変わらずの 人の多さだと思い映像を見ている。

モニターが映し出され、日付が２０２５年１２月５日の金曜日と記載されていた。時刻も映し出されており８時５９分と表示されていて、そして９時となった。蒼空の見ているテレビが揺れた。そう思わせるほどにテレビの映像が揺れていた。渋谷を歩いている人たちは大パニックを起こしていた。

映像が切り替わり、ニュース番組が映し出された。東京全体で大地震が起こったことと、 東京の周りの県は地震が起こっていないことを報道していた。

蒼空が見ている映像が東京の各地域を５秒ごとに表示していた。各地域は５秒だけしか 映されていなかったがそこにははっきりとした悲劇が映し出されており、東京全体は大パ ニックとなっていた。蒼空はその映像に驚愕していた。

「こんなの今までの正夢の比じゃないだろ」

そう呟くことしかできなかった。東京全体の地域が全部映し出されたのか、またニュース番組の映像になった。日付が１２月１２日金曜日となっており地震の日から１週間経過している。

ニュースの内容は、今回起きた地震が観測史上最大の規模だったことと、東京での犠牲者は１００万人以上という事を報道している。

そして東京の映像がそのニュースの報道によって映し出されるが工事中の建物や古い家が倒壊していたりとひどいものだった。

そこであたりが真っ暗になり目を開けると見慣れた天井がそこにはあった。目覚ましが なっており、時刻は８時だった。

起きてからすぐに蒼空は夢で見た内容をメモに記入した。大地震が起きた日は１２月５日の金曜日だった。今日は１１月１日の土曜日なので１ヶ月以上先の話だ。

腕を組んで考えていた蒼空だが「とりあえず今働いている会社辞めるか」と決意した。

まずはラインで優希と直充にすぐ蒼空の家に来るようにと連絡を入れておいた。ラインを送ってから腕を組んで考えていた蒼空だが「とりあえず会社辞めるか」と決意 して辞表を書いた。

そして会社の上司に今すぐ会社を辞めたいことをメールで伝え辞表を添付して送った。そのメールを送る際、蒼空は少しだけ寂しい気持ちになった。蒼空は大企業の会社でサラリーマンをしており、社会人になってから賃貸マンションで１人暮らしをしている。

新卒からなので約３年間その会社で働いていた。居心地も悪くなかったので辞めるのは 少しばかりもったいないと思った。しかし、大地震の正夢を見た限りでは、仕事に行きながら対策なんてとてもではないができない。

対策をするにしても期間は１ヶ月とちょっとしか時間はないので、会社への未練は断ち切ってこれからのことについて考え始めた。

２時間ぐらい考えたが、特にこれといった案は出てこなかった。玄関チャイムがなり、モニターを見ると優希と直充が映っていた。

玄関のドアを開けると「おはよう」と穏やかな笑顔で優希が挨拶し直充も笑顔で「おっ す」と挨拶した。それに対し俺も「おはよう」と挨拶し２人を招き入れた。

部屋に座ってからすぐに優希が「こんなに朝早くから集合をさせたのは、正夢を見たってことでいいんだよね」と落ち着いた様子で言った。

蒼空はそれに対して２人の目を見て頷き、今朝見た正夢について話をした。話を聴き終えた優希と直充は互いに驚愕した表情を浮かべていた。

「本当にそんな正夢を見たのか？」と信じられないといった様子で直充が言った。それに対し蒼空は真剣な表情をして「ああ、本当だ。今までに俺が正夢のことで嘘をついたことがあったか？」と言うと優希が即答で「ないね」と答えた。

直充は落ち着くように「そうか。来月の１２月５日の金曜日に東京で大地震が起きて犠牲者が１００万人か」と独り言を呟いた。そして直充は自分の頬を両手で叩き「これからその対策を考えるんだな」と言った。

「ああ、これから対策を考える」

そうして３時間余りが経過して、時刻は１３時になっていた。３人は話し合いをしていたが特に何も案は思い浮かばなかった。

とりあえずお昼を食べに行こうかとなったところで蒼空の携帯の着信音がなった。

誰から電話がかかったのか見ると今朝メールを送った会社の上司からだった。その名前 を見た蒼空は「会社の上司から電話が来た。２人はのんびり昼食を食べてきてくれ。電話 が終わったら連絡するから」と言ってその電話に出た。

優希と直充が昼食を食べて２時間くらい外でぶらぶらしていると優希の携帯に電話がかかってきた。電話に出ると「会社の上司との電話が終わったから戻ってきて」と蒼空が言ってきた。「了解」と返事をし、優希と直充の２人は蒼空の家に戻ってきた。

部屋に座ると優希は「会社の上司が休みに何の用事なの？」と疑問に思っていたのか聞 いた。蒼空は平然と「今朝に仕事を辞めたいってメールを辞表とともに送ったからな。それで電話がかかってきたんだろ」と答えた。

優希と直充は驚いたのか互いに顔を見合わせ「まじか」と言った。優希は「けど結構仕事気に入ってたんでしょ。辞めてよかったの？」と心配そうな表情を浮かべ聞いた。蒼空は優希と直充のほうを向いて「今回の正夢は今までで一番やばい出来事だ。会社に行きながら対策を考えられるほど時間も余裕じゃない。ま、確かに仕事は気に入ってはいたんだけどね。仕方ないさ」と後悔していない様子で言った。

その言葉に優希と直充は互いに顔を見合わし、仕方ないなと言った感じで笑った。そして直充が蒼空のほうを振り向き「しかし、辞表を出したと言っても会社はいつ辞めるんだ？さっきの電話もどうせ引き止められたんだろ？」と言った。

「ああ、引き止められたけど、向こうが何を言ってきても辞めると一点張りしたからな。 無事に辞表を受理してくれたよ。まぁ引き継ぎとかあるからせめて２日間は来てくれと言 われたから月曜日と火曜日だけ行って、それで会社を辞めることになった」

何でもないかのように蒼空は言った。この話についてはこれで終わり、３人は大地震についての対策について１日中話し合ったが特に何もいい案は出なかった。

翌日の日曜日も１日中話し合ったが何もいい案は出なかった。

そして月曜日からはそれぞれ自分達の仕事をして、火曜日で蒼空は引き継ぎ作業を終わり無事に仕事を辞めることができた。蒼空は水曜日から仕事がないのでじっくりと対策を考えていたが金曜日が終わるまで特に何も思いつかなった。

優希と直充の２人もそれぞれ個人で対策を考えたりしていたが特にいい案は思い浮かばなかった。そして大地震の正夢を見てから１週間が経とうとしていた。１１月８日土曜日の朝に目が覚めると蒼空は驚いていた。また正夢を見たからだ。正夢自体はすぐに終わったが、いつもの正夢を見る場所にいたので間違いないと思った。

夢の内容はまだ公表されていない解決済みの事件について、警察官達が資料を用いて話 しているところだった。ただそれだけの内容だった。いつも正夢を見るときは何かしらの悲劇があったので正夢を見た時は地震以外にも何かあると覚悟していたが、特に大した出来事は起こらなかった。

しばらくその夢のことを考えていると、突如大地震の対策について思い浮かんだ。蒼空はすぐにラインで優希と直充にすぐに家に来るようにと連絡を入れた。優希と直充は連絡を入れてから１時間もせずに来てくれた。

そして蒼空は今日見た正夢について話し始めた。

「今朝、正夢を見たんだ。警察官達がまだ公表されていない事件について資料を用いて何 か話していたよ。正夢でみる会話はノイズがかかっていて全然聞き取れなかったが、資料 が見れたので大体は把握している」

そう言った蒼空は確認を込めて直充のほうを向き「東京での一家心中の事件なんだが、 この事件について警察はまだ世間に公表していない。その認識でいいよな」と聞いた。

「そのことか。俺はその事件について担当じゃないから詳しいことはわからないが、確か にまだ世間には発表されていないな」

「一家心中か。嫌な事件もあるもんだね」と悲しそうに優希が言った。

少しの間３人は沈黙したが、切り替えるように蒼空が「今日の正夢については何故見る ことになったのかはわからないが、その正夢のおかげで大地震の対策へのヒントを得た」 と言った。

その言葉に優希と直充は驚き「そのヒントというのは？」と聞いた。蒼空は直充のほうを向いてニヤリと笑い、「警察を利用するんだ」と言った。直充はよくわからないのか「俺は警察官だが、俺を利用しても大地震の対策にはならないと思うが」と不思議そうな表情をして言った。そのセリフに蒼空は呆れながら「違う違う、警察である直充個人を利用するんじゃなくて、警察という組織そのものを利用するんだ」と言った。

優希はそれで納得がいったのか「確かに今回の規模が東京全体に及ぶことだから、どこか大きな組織を利用するというのは当然のことだったのかもね」と言った。

その優希の言葉で直充も理解したのか「なるほどな」と言った。

そこで優希は疑問に思ったのか「ところで警察を利用するのは分かったんだけど、どう やって警察を利用するの？」と蒼空に聞いた。

蒼空は自信ありげに「それはこれから考える」と言った。優希と直充は呆れた様子で「やっぱそうだよね」と言った。

「とりあえずはこの正夢について警察に関心を持ってもらうことが重要だと思う。どうやったら関心を持ってもらえると思う？」

優希と直充はその蒼空の質問について考える。優希が何か思いついたのか手を挙げて言った。

「いっそのこと大地震についてネットに動画を上げたらどう？」

「動画か……なるほど、ありだな。けど動画を上げてどうするんだ。正直俺たちが動画を ネットに上げたところで見る人たちはたかが知れているだろ？」

その蒼空の質問に対し、優希は自信ありげに「私の仕事はフリーランスのプログラマー なんだけど、その仕事の関係でインフルエンサーとは仲が結構いいんだよね。その人達に 手伝ってもらって、視聴数を増やそうと思うんだ」と言った。

「なるほどな」と直充は納得していたが、まだ蒼空のほうは納得しておらず「なるほど。 確かにそれで視聴数は増えるかもしれないが、警察には別に興味を持ってもらえないんじゃないか？」と言った。

それに対し優希も反論できないのか「やっぱそうか」と残念そうに言った。しかし、それに対し直充は「その動画は十分に警察が興味を持つ内容だと思うぞ」と言った。

蒼空と優希は少し驚いた様子で直充のほうを向き「それはなぜだ？」と聞いた。

直充は平然と「まぁ動画の内容にもよると思うが、今回の場合はいつ、どこで、何が起 こるかといったことが分かっている。それらを全部、そうだな、仮に予言の動画という名 前にしておこう。それでその予言の動画をあげたら警察は注目すると思う。市民にとって は迷惑極まりない内容だからな。まぁ警察が注目するにはそれなりの視聴数が必要だと思 うが」と言い優希のほうを見た。

「つまり、私がどれだけ動画の視聴数を稼げるかにかかっているってことだね」と緩やか な笑顔で言った。その表情には特に緊張した様子はない。蒼空は両手をパァンと叩き話をまとめた。

「なるほどな。確かにその予言の動画は市民には迷惑極まりないな。下手したら俺は警察 に捕まるかもしれないな。だが、今回の場合は警察の協力が必要不可欠だ。印象が悪くて も俺個人に注目してもらわないといけない。 他にいい案も思い浮かばないし、やってみる 価値は十分にある。それで行こう」

そして３人はそれぞれ自分達のやるべきことをしていた。蒼空と直充は予言の動画の作成をし、優希は基本的には動画の作成だが、仕事で知り合ったインフルエンサーに頼み込み、動画が完成したら紹介してほしいと言ったことを連絡していた。

やることが決まったので、優希は平日でも無理に予定を空けて蒼空の家で作業をしていた。優希の場合はフリーランサーなので可能だったが、直充は流石に警察の仕事で予定を 空けられなかった。それでも仕事が終わると蒼空の家に来ていた。

３人は、動画編集は初めてで、ビデオカメラを買ったり演出を考えたりして、作成するのに時間がかかったが、１１月１１日火曜日の昼間に動画を作成することができた。蒼空と優希は徹夜明けで力なく横たわっていた。直充は平日なので仕事に行っている。優希はベッドでうつ伏せになっているが顔だけ蒼空に向けた。

「お疲れー」

「ああ、お疲れ」

蒼空も床にうつ伏せになったまま優希の方に顔だけ向けていた。そのまま２人とも１時間だけ仮眠をとった。仮眠から目を覚ますと動画について２人は話しあっている。

「寝起きで動画を改めて確認したが、完成度は悪くないな。フューチャーフォックスという名前と狐のお面はちょっとダサい気もするが」

「まぁ、こういうのはインパクトが必要だと思うよ。だからいいと思うよ。フューチャー フォックス、ふふっ」

優希は笑いを堪えきれていなかった。

「おいおい、やっぱダサいんじゃねぇか」

やれやれと言った様子の蒼空だったが、名前や格好はなんでもいいと思っているのかその後は特に何も言わなかった。ちなみにだが、狐のお面やフューチャーフォックスというのは直充の発案で、その格好をして動画に映っているのは蒼空だった。

のんびりと完成した動画を見ていたが、それが終わると蒼空は真剣な表情をした。

「それでこの動画はいつ投稿する？」

その言葉に優希も真剣な表情をした。「いつにしよっか？」

「正直この動画を上げて警察に注目されても、正夢のことを警察に信じてもらうのは難しいと思う」

優希はこの動画を上げればなんとかなると思っていたのでそう言った蒼空に疑問を感じた。

「それはなんで？」

そう質問したが、蒼空はそれには答えずに「とりあえず、直充が家に来てから話をしよ うか。あいつが来るまで時間があるし買い出しにでも行こうぜ」と言い立ち上がった。

そして買い出しから帰ってきて、１９時には直充も仕事が終わり蒼空の家にやってきて いた。直充が座布団に座ると優希が昼間の話し合いについて気になっていたのか素早く質問した。

「昼間の続きなんだけど、正夢のことを警察に信じてもらうのは難しいってどういうこと？」

昼間参加できていなかった直充もその言葉を聞いて、真剣な表情になり蒼空のほうを向 いた。蒼空は冷静な表情をして答えた。

「簡単な話だよ。今まで見た正夢のことを話したとしても出まかせだと思われて間違いなく警察に信じてもらえない」

優希と直充はそのことが盲点だったのか、そう指摘され納得した様子を示した。「……それは確かにそうだね。正夢っていうのは荒唐無稽な話だもんね」

「……はぁ、俺も気づかなかった。ちょっと考えればわかることだったのにな。確かに過 去の話をしても信じてもらうには弱そうだ」

「そうなんだよな」そこで直充が何か思いついたような表情をした。

「前に見た正夢を警察に言っても信じてもらえないか？ほら、まだ警察が公表していない 解決事件について」

「それも含めて難しいんだ。解決している事件だから、警察以外にも情報が漏れている可 能性が高い。そうなってくると正夢で見たから知っているというのは信じてもらえない」 「……そっか」

行き詰まったように沈黙が流れる。そんな沈黙を破るように蒼空は両手を叩き決心した 表情をした。

「可能性は低いけど、それしか方法は思いついていないのだから、やるしかないよな」

その様子を見て優希と直充は笑顔になった。

「ああ、やるしかないな」

「だね。やるしかないね」

夜も遅くなってきたので、作成した動画は明日の朝８時に優希が来てから配信すること を決め、その日は解散した。

蒼空は疲れが溜まっていたのか倒れるようにベッドに寝転んだ。

気づくと蒼空は椅子に座っていた。辺りを見回すと電球はないが少し明るく、テレビと机と机の上にテレビのリモコンが置かれているだけだ。

「また、正夢か。今度は何を見るんだ？」

そう思い、テレビの電源ボタンを押した。映像は電車の中の様子だった。人が多く混み合っていた。電車内の液晶ディスプレイが表示され次は新宿と表示され、新大久保から右矢印で新宿となっていることから、山手線の内回りの電車だということがわかる。

そして女子高生が隣の男性の手を持ち真剣な表情で何かを言っている。正夢では基本的 に言葉にノイズがかかったような音がしていて会話の内容は聞き取れない。男性は焦った 様子で何か言っていたが、結局その女性と一緒に新宿駅に着いてから降りたようだった。

電車から降りるシーンもしっかりと映し出されており、その風景を見て２人がいた車両 が３車両目であることがわかった。そして駅ホーム内の時計が１６時２５分とあった。どうやらその時間帯に電車が到着するようだ。電車内でのモニターを見た時は特に遅れも記載されていなかったので、その点は考慮に入れなくてもよさそうだ。そこで一旦考えるのは停止したが、このあからさまな状況だけで痴漢が起きたのだと察し、気分が悪くなる。

そして映像が切り替わり駅長室の中にいるようだ。新宿の駅長室なのだろう。駅長室に は、デジタル時計が置かれてあり、日付と時間が見れた。日付は１１月１３日木曜日で時 刻は１６時５０分だった。その場所には警察官と思われる人物と３０代くらいのスーツを 着た男性と制服を着た女子高生と駅員の４人がいた。

警察官は男性に怖い顔をして怒っているようだった。怒られていた男性はひどく怯えて いるようだった。女子高生は自分の顔を手で抑え泣いているように見えるが口元のかどが上にあがっていて笑っているように見えた。

映像が切り替わると女性が自分の通帳を見て笑っている様子が映し出された。それを見て確信した。同時に気分がさらに悪くなった。それにこの忙しい時に痴漢冤罪の正夢なんかを見せて何をさせたいんだと思った。

まぁしかし、正夢を見てしまったものは仕方ないし、日付も明後日の出来事なので十分 止められると思い、行動することを決意する。

そう考えていると映像がまた切り替わり、女子高生と警察官が交番で話をしている。警 察官は駅長室に駆けつけていた人物のようだ。交番には時計が置いてあり、日付が１１月１４日金曜日で時刻が１７時だった。

とりあえず日付はきっちり覚えておこうと思ったが、その映像を見て気になることがあった。示談金が支払われていてもこんな風に警察官に会うものなのか。正直そんな経験は したことがないのでよくわからない。

しかし、次の瞬間女性がその警察官に１万円の札束を渡す様子が映された。多分１万円 の札束は１０枚あると思われる。

渡された警察官は邪悪な笑みを浮かべその札束を受け取った。警察官は札束を財布に入 れ、警察手帳を取り出し自分の写真と名前が書かれているページを開いて女性に何か自慢げに話していた。

その際に瀬戸康二という名前がはっきりと映し出されたので忘れないようにしっかりと記憶に残した。

とりあえずこの映像から警察官の瀬戸がグルなのだということがわかった。はっきり言 ってあり得ない。警察官がこんな真似をしていいのかと思い激しい憤りを感じた。

そう思っているとあたりが真っ暗になり目を開けるといつもの見慣れた天井がそこにはあった。随分寝覚が悪くなる夢を見たなと思い、落ち着くため顔を洗いに洗面所に向かった。

時計を見ると時刻は６時半のようだ。優希が来るまでまだ１時間半もある。とりあえず 気分の悪さを落ち着けるためにぼーっと椅子に座り込んだ。そうやってぼーっとして椅子に座り込んでいると何か思いついたのか椅子から立ち上がり、悪い笑みを浮かべていた。

携帯を取り出し直充に電話をかけた。コール３回で直充は電話に出た。

「なんだ？蒼空がこんな朝早くから電話をかけてくるなんて珍しいな」

「ああ。実は頼みたいことがあって連絡した。 瀬戸康二って名前の警察官知っているか？」 「いや、知らないがその瀬戸康二って警察官がどうしたんだ？」

「単刀直入に言おう。その瀬戸康二の働いている交番を調べて今日のうちにそこに監視カ メラを仕掛けて置いてほしい。そして可能なら瀬戸康二の服にも盗聴器を仕掛けておいて 欲しい」

その言葉に直充は驚いていた。

「は？交番に監視カメラ？その瀬戸って警察官の制服に盗聴器？蒼空お前自分が何言って いるのかわかっているのか……」

「わかっている。わかった上で直充、お前に連絡を入れている」

そこで直充は、落ち着くために深呼吸をしているようだ。

「そこまで言うってことは、もしかして正夢を見たのか？」

「ああ」

「なるほど、わかった。とりあえずその正夢の内容について教えてくれないか。じゃない と動くに動けない」

「当然だ。今から正夢で見た内容について話す」

そして蒼空は正夢で見た内容について直充に話した。

「痴漢冤罪の手助けか。最低な警察官だな」

直充は怒りに声を震わせていた。

「やることはわかった。けど、監視カメラや盗聴器なんて俺は持っていないぞ」

「それについてはこっちで用意をしておく。昼に俺の家にこられるか？無理なら俺が警察署 に行くが」

「ああ、すまん。流石にそっちに行けそうにないわ。だから蒼空が警察署に持ってきてくれ」

「了解。１２時半ごろに持っていくよ」

それで要件を伝え終え、蒼空は電話を切った。朝食を食べて時間を潰していると優希が家に来た。

「早速動画の配信の準備しよっか」

部屋に入った優希はやる気満々の様子だった。とりあえず、蒼空は優希を落ち着かせるために座布団に座らした。そして今朝見た正夢についてのことと、直充に電話で頼んだことを話した。正夢の話を聞いている優希は流石に気分の悪い内容だったのか、珍しく怒った表情をしていた。

しかし、直充に電話で頼んだ内容を話したら、少し悪そうな笑みを浮かべていた。

「その正夢、腹が立つ内容だね。けど、今の状況を考えたらありがたいかもね」

蒼空も少し悪い笑みを浮かべて頷いた。

「ああ、腹が立つ内容ではあるが、現状を打破するには、不謹慎だが好都合の正夢だ」

そう話し、蒼空と優希はそれぞれ自分達のやるべきことを行った。蒼空は監視カメラと盗聴器を手に入れるため、実家にいる執事の坂本に電話をした。

「もしもし、坂本か。今大丈夫か？」

「お久しぶりです、蒼空様。ええ、今ちょうど手が空いていますがどうかされましたか」 「それならちょうどいい。実は頼みがあるんだ。確かその家に盗聴器と監視カメラがあったと思うんだが、探し出して持ってきてくれないか？できれば見つかりにくい盗聴器が３ 台、監視カメラが５台持って来てくれると助かる。それと監視カメラの３台は交番の中で もバレないものがいい。あと残りの２台は電車の中で撮影しても周りの人にバレないもの がいい」

「はぁ、盗聴器と監視カメラですか。それに結構な数が必要なのと少々細かい条件もあるみたいですね。また何かしようとしているんですか？」

「ああ、その通りだ。けど心配するな。悪いことに使おうってわけじゃない。東京を救う ために盗聴器と監視カメラが必要なんだ」

坂本はしばし沈黙し諦めたようなため息をした。

「はぁー、蒼空様が悪いことをしようとは思っていませんが、いつも唐突にお願いしてくるので私びっくりしてしまいます。わかりました。置いている場所はわかっていますので 今すぐ持っていきましょうか？」

「ああ、頼む。ありがとう」そう話をして電話を切った。蒼空が電話をしている間、優希は予定通りネットに動画を投稿していた。投稿をしてすぐに仕事で知り合ったインフルエンサー達に、メールを送った。メールの内容は「今動画を投稿しました。動画は下記のＵＲＬから見れます。どういった方法でも構いませんので、そちらを紹介していただけると助かります」というものだ。

それが終わり、しばらくのんびりして２人は時間を潰していた。１時間経過した頃に、坂本が監視カメラと盗聴器を鞄に入れてやってきた。玄関のドアを開けると坂本は両手で鞄を持って丁寧にそれを渡してくれた。

「こちら頼まれていたものです。数もちゃんと言われた分持ってきました。ご確認ください」

蒼空は監視カメラと盗聴器について確認した。どちらも小さく隠しやすい代物で満足した様子で頷いた。

「ありがとう。この品で満足だよ。それにしても頼んでおいてあれなんだが、よくこの数 の盗聴器と監視カメラが実家においてあったな」

「それ以外にもまだもう少しありましたね。監視カメラはセキュリティ上の予備でストッ クが多くあります。盗聴器については以前、蒼空様が遊びで買っていたものです」

そう言われ蒼空は思い出すようにこめかみに指をあて考え込んだ。

「そういえばそんなこともあったな」

「はい、ございました。それではこれで要件はお済みでしょうか？」

「ああ、毎度のことながらありがとう。助かるよ」

「それでは私はこれで失礼します」

そう言った坂本に蒼空は念のためといった様子で聞いた。

「少しは俺の家で休んでいかないか。お茶くらいなら入れるぞ」

「お心遣い感謝します。ですが、実家の方で仕事が残っていますので申し訳ありませんが 帰らせていただきます」

「そうか、わかった」

蒼空はそういい笑顔で坂本を見送った。荷物を持って部屋に戻ると優希が誰かと電話で話をしているようだ。会話の内容を聞かれてもいいのか、蒼空が部屋に戻ってきても移動せずに話しをしている。

聞こえてくる会話から察するにインフルエンサーと話をしているのだろう。そろそろ時間もいいので蒼空は監視カメラ３台と盗聴器３台を鞄に入れて家を出ようとする。優希の方を向くが、多くのインフルエンサーにメールを送ったのか電話にずっと出ている状況だ。

電話をしている優希が不意にこちらを見た。蒼空が外に出かける格好を見て、電話をしながらも笑顔で手を振ってくれた。蒼空もそれに手を振って家を出た。

そして電車で直充がいる警察署までやってきた。ちょうど１２時半ごろに到着して、警 察署の外で待っていると直充がやってきた。

直充は少しだけ申し訳なさそうな表情をしている。

「わざわざ警察署にきてもらってすまない」

「いいさ、直充忙しいだろ。それに午前中で俺のやるべきことは一通り終わったからな。 だから今の俺は暇なんだ」

笑顔で蒼空がいい、持ってきた鞄を直充に渡した。

「はい、これ。中身は今朝電話で話した監視カメラと盗聴器だからよろしく。どちらも小 さく、隠しやすいはずだから、多分なんとかなると思う。もし無理だった場合は言ってく れ。あ、ちなみにどちらも３台入れているからよろしく」

「ああ、了解した。俺の方は午前中空いた時間に瀬戸について調べておいた。こちらも多 分だが、瀬戸が働いている交番に監視カメラ、そして瀬戸が着ている制服に盗聴器が仕掛けられると思う」

その直充の言葉に満足したように蒼空は笑顔になった。

「では、頼む」

「おう」

そう言って蒼空は警察署を後にした。

１５時半ごろに警察署から家に帰ってきたが、優希は忙しそうにパソコンを使って作業 をしていた。

「何か手伝うことはないか？」

「うーん、特にないかな。ま、のんびりしててよ」

「そう言われてもやることないからな」

「それなら、何かご馳走買ってきてよ。もう少し時間がかかると思うから、そうだね、２ ０時くらいまでゆっくりしてきていいよ」

「了解」

蒼空は優希の邪魔にならないように部屋を出て、デパートに向かった。デパートで３時間くらいのんびりしてから、優希に頼まれていたご馳走を探すことにした。ご馳走を１時間くらい考えて購入し、家に帰った。家に帰ったのは優希に言われた２０時ちょうどくらいだった。家には直充の靴があり既に部屋にいた。

「お邪魔してるぜ」

「おう。それで、直充はうまくいったか？」

「ああ、ちゃんとバレないように、監視カメラと盗聴器を瀬戸のいる交番にセットしてき たぜ」

「ありがとう、助かるよ」

蒼空は頭を下げて礼を言った。

「気にすんなって」 嬉しそうな笑顔で直充がそう言った。

「それで、優希の方はどうだ？」

「うん、動画を上げてから、仕事で知り合ったインフルエンサーさん達に頼んだおかげで、 驚くことに動画の再生数は今で１００万回以上再生されているよ」

蒼空と直充はそれを聞いて驚いた表情になった。

「すごいな。まさかこの短期間でそれだけの再生回数になるなんてな。これで警察に目を つけられる可能性が高くなったな。そうだろ、直充」

蒼空は直充の方を向いたが、直充はＳＮＳでフューチャーフォックスについて調べてい た。

「ＳＮＳでもバズっているようだぜ。予言者あらわる⁉とかそんな感じでお祭り騒ぎのよ うだ。これなら警察には悪い意味で十分に注目されていると思う」

それを聞いた蒼空と優希はひとまずの達成感を得れたのか、「ふー」と互いに疲れたようにため息をついた。

「あ、そうだ」

優希は思い出したかのようにそう呟いた。

「この予言の動画、再生回数は多いんだけど、低評価が多いんだよね」

「……まぁそれは仕方ないさ。正直そんな評価よりもこれを見てもらうことの方が重要だ からな」

「それもそうだね」

それで報告は終わり、蒼空が買ってきたご馳走を３人は美味しくいただいた。食事を食べ終え、その片付けが終わった後に明日のことについて話し合った。

「明日は山手線内回りの１６時２５分に新宿駅に着く電車に乗ろうと思う。車両は３両目 だ」

「了解」

「俺も仕事がなかったら一緒に行ったんだがな」

残念そうに直充が呟いた。

「まぁ仕事だったら仕方ないさ。俺たちでそっちはなんとかしとくよ」

「ああ、頑張ってくれ。とりあえず俺は明日仕事だからこれで家に帰らしてもらうとする わ」

「あ、私もじゃあ家に帰るよ。明日８時ごろに来ればいいよね？」

「ああ、それでいい。２人とも今日も来てくれてありがとう。あと直充、盗聴器と監視カ メラのセッティングもありがとう」

「おう」

そう返事をし優希と直充は帰っていった。

そして翌日１１月１３日木曜日となった。８時になると優希が予定通りやってきた。 今日は痴漢冤罪が起こる日だ。時間になるまでどう動くか優希と話し合う。

「今日は現場に向かうんでしょ？」

「当然」

「どう動くか決まった？」

「一応は決まっている。これから話す」

優希は真剣な表情でコクリと頷き、蒼空が話し始めるのを黙って待つ。

「今日の１６時２５分に新宿駅につく電車３車両目で事件が起こるから、それに俺たちも 乗り込む。調べたが１６時２５分に新宿駅に着くのは１６時１６分の池袋駅の始発のよう だ」

「なるほど。その時間に池袋に乗って待機しとくってわけだね」

「ああ、そしてただ待機しておくわけじゃない。俺たちはそれぞれ監視カメラを持って件 の女子高生とサラリーマンが来るのを待つ。顔は俺しかわからないから、俺が合図するまで監視カメラの電源はつけなくていい」

優希は顎に指を当てて考えるそぶりを見せる。何か疑問があるようだ。

「監視カメラって言っているけど、怪しまれない？どんな監視カメラを使うの？」

そういえば優希は昨日坂本から受け取った監視カメラを見ていなかった。

蒼空はそう思い、２つの監視カメラを優希に見せた。１つはボールペン型のカメラで、もう１つはメガネ型のカメラだ。

「うわー、凄いカメラもあるものだね」

優希は少し引いた反応を見せ、その２つのカメラをしばらく眺めていた。そして何か疑問に思ったのか蒼空に聞いた。

「この２つのカメラってちゃんと録画できるの？」

「それについてはテスト済みだ。テスト方法だがメガネは普通にメガネとして顔に装着し、 ボールペンは胸ポケットに挟んで撮影したものだ。」

蒼空はパソコンにＵＳＢを繋げあらかじめその２つのカメラで撮影した映像を優希に見せる。

「なるほど、ちゃんと撮れているみたいだね。この映像を見た限りでは大丈夫そうだね」

蒼空はそれに対して頷いた。

「ああ、けどボールペンの監視カメラは比較的簡単なんだが、メガネの方が撮るのに少し コツがいる。だからメガネの監視カメラの方は俺が担当しよう」

「了解」

それで話し合いが終わり、しばらくしてから昼食を食べに外に出た。昼食を食べ終わるとまだ時間はあるので蒼空の家に戻った。

時間が来るまで２人はのんびりしていた。携帯をいじっていた蒼空だったが、見るものがなくなったのか携帯を閉じて優希の方を見た。優希はどこか悲しげな表情を見せていた。

その表情が気になった蒼空は優希に話しかけた。

「どうしたんだ？」

「何が？」

優希はこちらを振り向き、笑顔で言った。

「何か悲しげな表情をしていただろ？」

優希は悲しげな表情をしていた自覚がなかったのか少し驚いた表情をした。

「私、そんな顔をしてた？」

「ああ、していた。何か気になることでもあるのか？」

少しだけ沈黙した優希だが、「はぁー」とため息をついた。

「実はね、被害者のサラリーマンがちょっと可哀想だなって思ったんだよね」

「……優希」

「私たちはその冤罪事件を止められる立場にいるのに、それをせずに監視カメラを持って 撮影しているだけなんて、嫌だなって……」

蒼空はその優希の言葉に声をかけられずになる。

「ごめん、この後の作戦のことも考えて見過ごさないといけないっていうのもわかっているし、サラリーマンの無実がすぐに晴れることもわかっているよ。けど、それでも一時だけでもそのサラリーマンが謂れのない罪で罪悪感を覚えるのは、ものすごく悲しいことだ なって思って……」

「……そうだな。確かに悲しいことだな。やっぱ優しいな優希は。俺は正直そこまで考え がまわらなかった。けど、すまない。これ以上の手は見つからないからこのままでいく」

そう蒼空が言うと優希は覚悟を決めたように表情を真剣なものにした。

「そうだよね。全部がうまくいくためにはそうするしかないもんね。ごめんね、変なこと 言っちゃって」

「いや、いいさ。不満とかそういうのは言ってくれて構わない。それに俺に言えないこと は直充に言ったらいいし、逆に直充に言えないことは俺に言ったらいいよ」

「うん、わかっているよ。さてと、そろそろ時間だね。行こっか」

「ああ」

そして話しが終わり、蒼空達は事件が起こる場所に向かった。予定通りに、山手線内回りの１６時１６分始発の池袋駅の電車の３車両目に乗った。

３車両目には正夢で見たサラリーマンの人が乗っていた。優希にあの人がそうだと言う と真剣な表情を浮かべた。

「女子高生はまだ乗っていなさそうだね」

「ああ、そうみたいだな。新宿に着くまでのどこかの駅で乗り継いでくるんだろう」

そのサラリーマンの近くで待機して電車が発車するのを待った。電車は発車し、目白駅、高田馬場駅と進んで行った。

高田馬場駅に着くと、正夢で見た女子高生が乗り込んできて、サラリーマンの近くにやってきた。何事もなく新大久保駅につき扉が閉まって、電車が発車した。電車が発車して数十秒が経過した頃「ちょっと何してくるの。この人痴漢です」と女子高生が騒ぎ始めた。

女子高生はサラリーマンの手を掴んで上にあげていた。サラリーマンは大慌てで「そんなことをし ていない」と否定し、周りを見た。しかし、周りの人たちはそのサラリーマンに対して冷たい視線を向けているだけだった。

その冷たい 視線に怖気づいたのか黙り込んでしまった。それをいいことに女子高生はないことを言いまくり、最終的に「次の新宿駅で一緒に降りてもらうから」と言っていた。

その一部始終を蒼空は見ていたが、ふざけるなと声に出したくなるほどに気分の悪いも のだった。サラリーマンが否定した通り、彼は何もしていない。しかし、周りの電車に乗 っている人たちは彼が悪いものだという目で見ている。

今になって優希が言っていたことが理解した。蒼空はなんとか我慢できていたが、優希は我慢できているのかと思い優希がいる方を見た。優希は眉を寄せ我慢しているのか少し体を震わせていた。その様子を見て蒼空は心の中で「ごめん」と謝った。

新宿駅につくと女子高生とサラリーマンは一緒に降りていった。他に降りていく乗客達 に紛れて、蒼空達も降りていく。

女子高生とサラリーマンは階段手前で駅員が来るのを待っている。駅員が来て事情を聞くと駅員室に２人を連れて行った。蒼空と優希は駅員室にいくまでの間をしっかりと監視カメラに録画しておいた。

「駅員室に行ったし、もう俺らのやることはないな。あとは、直充が仕掛けた盗聴器と監 視カメラだけだな」

「……うん、そうだね」

優希は悲しげな表情を浮かべていた。

「すまなかったな。我慢させてしまって。今日はもう帰った方がいい。やることもないし な。明日は直充が仕事から帰ってくる頃に来てくれれば構わない」

「蒼空は別に謝らなくていいよ。でも、悪いけど今日は帰らせてもらうよ。流石に今日の 光景を見ると気分が悪くなったからね。じゃ、明日は直充が来る時間帯に向かうね。それじゃ、お疲れ様」

「ああ、お疲れ様」

それで蒼空と優希は別れた。この日はこれで特にやることはないので、ラインで直充に今日は来なくていいことと、明日の１８時以降に交番と瀬戸の制服に仕掛けた盗聴器と監視カメラの回収を頼むと連絡をしておいた。すぐに既読がつき了解と返事がきた。それを見て蒼空は携帯をポケットにしまって、家に帰っていった。

そして翌日１１月１４日金曜日の２０時に優希と直充がやってきた。早速直充が回収してきた盗聴器と監視カメラの映像を見る。その映像には女子高生と瀬 戸の話している映像が完璧に映っていた。電車で撮影した映像も確認していなかったので、ちゃんと撮れているか確認をした。問題なく映像が撮れており、サラリーマンが女子高生に何もしていない証拠が撮れていた。その映像を見て全員がちゃんと撮れていることに安堵のため息を吐いた。

「ちゃんと撮れていてよかったね」

「ああ、あとは今までのことを全部まとめて、作戦を練るだけだな」

「それってかなり大変だよな。まぁ明日からは土曜日だから、俺も手伝えるが」

「ああ、２人ともよろしく頼む」

そして、日曜の夜まで作戦を練ることに時間がかかった。土曜日に予言の動画が５００ マン以上の再生数となり喜んだりしたが、アカウントがバンになり、焦ったりといったハ プニングもあったが、その動画に関してはＳＮＳにも動画が残っていたり、話題にもなっ ていたので特に問題はなかった。

「なんとか終わったね」

「ああ、疲れた。明日仕事だし帰って寝るとするわ」

「いいなー、帰って寝れるって」

「優希は帰って寝ないのか？」

「と言うより寝れないだね。私の本業がこっちを手伝っていたことで遅れているんだよね。 だから、今日も徹夜で作業するんだよね」

蒼空はそれを聞いて少し申し訳なさそうにした。

「それはすまなかった。けど、昨日も２時間しか仮眠をとっていないんだ。あまり無理は するなよ」

「うん、大丈夫だよ。今日徹夜すればしばらくは忙しくないから。それに事件の動画の編 集も蒼空が警察に事情を聞かれるような状況になるまでは大丈夫だもんね」

「ああ、そうだな。俺が警察にお呼ばれするのは少なくともあと数日は先の話だと思う。 まぁ、念のためトイレにあらかじめ携帯を仕込んで優希宛てのメールを作成しておいたか ら、いつ警察が来ても問題ないようにしている」

「ふふっ、用意周到だね。そこまで準備しておかなくてもいいと思うけど」

「本当だな。蒼空は考えすぎなところがあるからな」

「それに捕まるわけではないと思うもんね」

「まぁ俺も考えすぎだと思うが念には念を入れておいたのさ」

「さてと、私は帰って徹夜でフリーランスとしての仕事をするとするよ」

「俺も明日の仕事のために帰って寝るわ」

「ああ、お疲れ様」

そう言って３人は解散した。この時は思ってもいなかった。翌日に警察官が来て、蒼空 が逮捕され、そして、トイレに隠していた携帯を使用して、優希にメールを送ることにな るなんて。そしてそのメールを徹夜明けの優希が見て、せっかく寝れると思っていたのに 寝れなくなり、ショックを受けることになるなんて思いもよらなかった。

俺が尋問部屋から解放されてから３日後の１１月２０日木曜日になった。ピロンと携帯の音がなりメールが届いた。メールは尋問部屋にいた横山からだった。メールの内容はシンプルで住所が載せられてあり、今日の午前１１時５０分にここに来るようにというものだった。住所の場所を調べると豪華なホテルだった。メールにある通り、そのホテルに１１時５０分に着くように家を出た。ホテルに着くと、横山の付き人の田中が入り口で待っていた。

「お待ちしておりました。福田様。みなさまもう集まっております。私について来てください。ご案内いたします」

田中に案内されるままに行くと扉があり、田中がその扉を開けて「どうぞ、お入りください」と言った。

部屋に入ると大きめの会場で蒼空は少しだけ驚いた。ただ、俺が驚いたのはホテルの 会場の大きさではなく、その会場の隅に数人しかいないことだ。どうやらその数人は１１月１７日に尋問部屋にいた人達だった。ちなみに、蒼空、優希、直充、小西、横山、田中の６人だ。

そしてそこには、小さいとは言えないが会場には明らかに不似合いなテレビが置かれていた。その隅に向かって歩いていると優希が気づいたのか、手を振って「おはよう」と明るく挨拶をしてきた。俺も「おはよう」と挨拶を交わし、その会場の隅に到着した。とりあえず俺は疑問に思ったことをこの場の招集をかけた横山に質問した。

「なんでこんな広い会場のこんな隅にいるんですか？」

横山は平然とした様子で「広い会場にしたのは気分の問題だ。そしてこの隅にいるのは こっちの方が落ち着くからだ」と答えた。その横山の答えに付き人の田中以外の全員が呆れた表情を浮かべた。

「まぁ、そんな話はどうでもいいだろう。本題に入るとしよう」

そう横山が言うとその場にいる全員に緊張感が走り、横山の方を向いた。

「まず、尋問部屋での福田さんの過去の正夢の出来事についてだが、嘘は言っていなかっ た。……と言うことで福田さんの要求であった東京都の人全員を他の道府県に移動することを約束しよう」

その横山さんの言葉に付き人である田中以外の全員が驚いた。俺は驚き反射的に横山に聞き返していた。

「本当に信じてくれたんですか？」

「ああ、信じたとも」

「と言うことは、本当に東京の人たち全員が道府県に移動するってことですか？」

俺を尋問していた平山もあまりの話の進み具合に驚いたのかそう聞いていた。

「ああ、それについてはもう行動に移しておいた」

またも平然と横山がそういった。そして全員がまたもその言葉に驚いた。

「行動に移したと言うのはどういうことですか？」

今度は優希がそう質問した。

「話をするよりも実際に見た方が早い」

横山はそう言い、テレビをつけた。テレビをつけると特に変わった番組はやっていなかった。

「１２時ちょうどに流すようにテレビ局に言ってある。あと数秒だ」

そして１２時になると緊急ニュースが流れた。ニュースの内容は、フューチャーフォッ クスと呼ばれる予言の動画について、この大地震は実際に起こることだと政府が認めたことが流されている。

そして、１２月５日土曜午前９時までに東京に住んでいる全市民を道府県に避難してもらうといったことをニュースキャスターが話していた。テレビのリモコンで他の番組にしても同じ内容のことが放送されていた。

その放送を見て、横山とその付き人の田中以外のその場にいる全員が驚愕した。俺は確かに望んでいたことだったが、実際にニュースで流れるとあまりの現実感のなさに言葉を失っていた。全員が沈黙していたが、その沈黙を破るように平然と横山が話し出した。 「さて、これで私が東京都民を動かせることが納得できただろう？」

…… 。その問いに誰も言葉を発せられなかった。

「フッ、驚いて言葉も出ないか」

全員が沈黙するなか、俺はなんとか声を発した。

「この３日間だけでよくこれほどのことを起こせましたね。と言うより俺の過去の正夢の話を信じるために３日ほど欲しいと言っていたんじゃなかったですか？」

「ああ、福田さんの話を信じるのに１日も掛からなかったよ。話を信じた後は簡単さ。私 のコネをフル活用して、今回の出来事を起こしたまでさ」

横山は明らかに常識外れなことをしているのに、焦ったそぶり１つみせない。その横山 にその場にいる全員は畏敬の念を抱いた。

しばらく会場が沈黙に包まれていると小西が何か疑問に思ったのか口を開いた。

「横山さんのコネというのが想像以上というのは理解出来たが、もし正夢が起きなかった らどうするんですか？」

小西のその質問に田中以外の全員が気になったのか横山の方を向いた。

「不思議なことを言うね。小西さん、あなた実際に福田さんを尋問して、その正夢について信じたんじゃなかったのかい？」

「ああ、確かに俺は信じた。けど、それでも１００パーセント信じたというわけじゃない。 仮に俺が東京都民を避難させることができて１００パーセント話を信じたとしてもこん なことは出来ない」

「そうか。だがあなたに出来なくても私には出来る。結果がそれを証明しているだろう？」

その言葉に小西は押し黙った。

黙った小西を見て俺は疑問に思ったことを聞いた。

「ですが、横山さん。もし俺の正夢が外れていたらどうするんですか？」

「おや、君は自分の見た正夢について１００パーセント信じれていないかい？」

「これまで数々のことを正夢を見て解決してきました。それはお話しした通りです。です ので俺は、正夢で見たことについて１００パーセント起こると信じています」

俺がそういうと、横山は笑顔になった。

「ならばよろしい。……もし地震が起こらなかった場合についてか。そうなれば私は地位も財産も何もかも失うことになるだろうね」

相も変わらず横山は冷静に言ってのけた。その横山の様子に俺はもうこの人は決心 しているのだと悟り、納得できていないが納得したように振る舞った。

「……わかりました。ですが、最後に１ついいでしょうか？」

「何かね？」

「俺の正夢について１００パーセント信じたというのは何かあるんですか？」

「それについてはこの地震騒動が終わってから話をしよう。君には、いや、君たちには頼 みたいこともあるからね」

「頼みたいことですか？」

「ああ、だが今日のところはとりあえずこれで話し合いは終わりだ。それぞれ解散してく れ」

それで、横山から呼び出された話し合いは終わった。俺と優希は俺の家に向かった。直充含め他の人たちはそれぞれ仕事をしに戻っていった。家に帰る時、騒ぎは起きていないが昼間に流れていたニュースのことがそこら中で話題になっていた。

とりあえずは何事もなく２人は俺の家に帰ってこれた。

「それにしても凄い状況になったね。無事に帰れてよかったよ」

「ああ、半分騒ぎが起きているようなものだからな。それに当事者のはずの俺自身も驚いているから、そうじゃない人は余計にだろうな」

「それもそうだね。……他に私たちがやるべきことって何かあるのかな？」

俺は少し考えたが特に何も思いつかなかった。

「正直、何もないかな。後は政府や警察がなんとかするだろう」

「そっか……」 少し寂しそうに優希は呟いた。

「これで私たちの役目は終わったんだね。終わってみると結構寂しいもんだね」

「確かに役目は終わったけど、俺たちも東京から避難する場所を探さないとな」

「そうだった。私たちも避難しないといけないんだった……」

そう話していると今の状況が知りたくなりテレビをつけた。やはり、東京都民が避難というニュースで持ちきりだった。どうやら全国の警察が集まって、避難誘導のお手伝いをするようだ。避難だが、地区ごとに日にちをまたいで順番に行っていくようだ。ＳＮＳからも情報がどうなっているのか確認した。ＳＮＳではついに日本は狂ったかと言った内容があちこちで見てとれた。それを見て正直、真っ当な意見だと思った。こんな予言の動画が日本政府に信じられたんだ。日本がおかしくなったと思われても仕方ない。

だが、実際に大地震が起きれば文句を言った人含め、日本全体がどのような反応をする のだろうか。俺はその反応を見るのが少し楽しみになった。俺は部屋でのんびりし、優希は溜まっている仕事をしていると、仕事終わりの直充がやってきた。

「おっす」

「おう」

挨拶をして、直充は言いにくそうな顔で話を始めた。

「実はさ、横山さんに避難場所について話をされたんだ。で、その避難場所について何だ が栃木らしいんだ」

「栃木か悪くないな。それに東京からもさほど離れているわけじゃない。どうしてそんな 嫌そうな表情をするんだ？」

「いや、まぁそこは悪くないんだけど、高級ホテルなんだよな……」

優希が少しだけ嫌そうな表情をする。

「今日集まったようなホテルでしょ。正直落ち着かなかったんだよね」

「ああ、俺も正直今日のだけで満足なんだよな」

いやそうにしている２人だったが、俺は興味なさげに呟いた。

「ふーん、そうなのか。ま、俺はどこでもいいよ」 その言葉を聞いて、優希と直充は「はぁー」とため息をついた。

「高級なものに慣れているやつは違うよな」

「そうだよねー」

蒼空はその言葉に特に反論することもなく聞き流した。直充と優希は話を続けた。

「まぁでも横山さん曰く強制らしいんだよな」

「なんで？」

「地震の騒動が終わったら、何を根拠に信じることが出来たのか知りたいみたいなこと言 っていただろ？」

その言葉に興味を持ち、俺は直充の方を向いた。

「ああ、言ったな」

「俺たち３人がそのホテルに泊まらないと教えてくれないそうだ。宿泊代交通費は横山さんが持つと言っていた」

「そんなことで教えてくれるというのなら、こちらは全然問題ない」

その俺の言葉に「うわー」と少しだけ２人は引く。

「こっちのこと全然考えてないようなセリフ、どう思いますか直充さん？」

「そうですよね。もう少し我々の気持ちも考えてくださってもいいと思いますのにね」

俺はその２人の様子にため息をついた。

「コントはそのくらいでやめておけ」

２人は少しだけ不貞腐れたように「はーい」と返事をした。

俺は２人の心情に気づき、悪戯な笑みを浮かべた。

「今日の出来事については流石にびっくりするよな。俺も正直びっくりしたよ。だから、 いつもどおりいられなくなるのはよくわかるよ」

内心を見透かされたのか、２人は「ははは」と苦笑いを浮かべることしかできなかった。

そして、それから１週間が経過して１１月２７日木曜日となり、避難場所である栃木の 高級ホテルに俺と優希は来ていた。直充は警察官なので避難誘導が終わるまでは東京に 残っている。その日も特に何事もなく１日がすぎ、俺は眠りについた。

気づくと俺は、椅子に座っていた。辺りは薄暗く、周りに置かれているものは、テレビ、机、机の上にテレビリモコン、そして俺が座っている椅子だけだ。

「……正夢か」

そう呟き、俺は机の上のリモコンを手に取り電源ボタンを押した。

映像は東京タワーがすぐ近くにあるので港区のようだ。東京の街並みが映されているの に人っ子一人いない。映像が切り替わると２人の男性が歩いている姿が映し出される。片方が大きめの荷物を持っており、片方は何も持っていない。主従関係がよくわかる映像だなと思った。荷物を何も持っていない男性が携帯を見ており、日にちが１２月５日月曜日で、時刻が午前７時３０分となっていた。その日付を見て、先ほどの映像に人っ子一人いなかったのは東京都民が全員、他の道府県に避難しているのだと気づいた。しかし、この男性２人組はなんなのだろうか？そう思っていると２人組は足を止めた。

その場所には見覚えがあり、何度か言ったことのある東京タワー近くのデパートだった。

扉をこじ開けどこかの建物に入っていった。広さ的にどうやら２人組はデパートに入ったようだ。デパートの中は真っ暗だ。人がいないので当たり前だろう。２人組は懐中電灯を取り出して灯りを照らし、歩いて行く。辺りは真っ暗だというのにその歩みには迷いはなさそうだった。そして目的地に着いたのか足を止めた。リーダーらしき男が看板に懐中電灯の光を当てると宝石店と記載されていた。

それを確認し、２人の男性は宝石店に入っていった。その様子を見て宝石強盗だと気づく。そして火事場泥棒とはいるものなのだなと思い、少し嫌な気分になった。宝石が入れられているガラスはかなり硬いのか２人の男性は、火で炙ったり、ハンマーで叩いたりと、いろいろな方法を駆使していた。そうして時間をかけ、宝石が収められている窓ガラスを破った。

部下と思われる男性は、窓ガラスをこじ開けられたことを喜び、収められている宝石を手 に取る。リーダーらしき男性は落ち着いた様子で、携帯で時刻を確認する。時刻は８時のようだ。 リーダーらしき男性は宝石を手に入れたというのに少しも嬉しそうに見えない。その様子に俺は疑問に思う。

２人は何かを話していて、窓ガラスをこじ開けた場所の宝石だけ全て鞄に入れて撤収し ていった。映像が切り替わり、リーダーらしき男性が東京タワー近くの街中に１人でいるのが映し出されていた。

そのそばには部下と思われる男性はいない。男性は携帯を開く。時刻は８時５９分だった。

そして時刻が９時となり、建物などが揺れ始め男性はその場に倒れた。男性は立とうと するがあまりの揺れの酷さからか、立つことができなかった。しかし、そんな恐ろしい状況だというのに男性の表情は狂気に満ちた笑みを浮かべていた。

宝石を手に入れた時は凄くつまらなさそうにしていたのに、どうして今こんな顔をするんだと俺は不思議に思った。

狂気に満ちた笑みを浮かべていた男性だったが、頭上から看板が落ちてきて、その下敷きとなった。

それであたりが真っ暗になり、見慣れない天井がそこにはあった。ベッドから起き上がり部屋の中をみると、そういえば避難でホテルに来ていたのだなと思い出した。日付は１ １月２８日金曜日で、時刻は午前９時だった。

今回の出来事はもう役目は終わっていたと思っていたのに、やることが１つ追加された ようだ。そのことに俺は無意識に笑みを浮かべていた。

早速優希に夢で見た内容を話すため、優希が泊まっている部屋に訪れ、話をした。

「……大地震が起こる当日にそんなことが起こるんだ」

話を聞いた優希は悲しそうな表情を浮かべてそう言った。しかし、すぐに真剣な表情に 切り替えた。

「状況は良くわかったよ。その２人を捕まえるんだね」

俺はその優希の言葉に対し少し考えるそぶりを見せる。

「どうしたの？」

「いや、俺も最初は捕まえる方向で考えていたんだが、ちょっとリーダーらしき男の様子が気になってな」

「様子って？」

「ああ、その男は宝石の盗みに成功したというのに、全然嬉しそうに見えなかった。どこかつまらなさそうに見えた

優希は顎に指を当てて考えたが、わからないのか俺に話の続きを促した。

「それがどうかしたの？」

　俺は自分の思った考えを優希に伝えた。

「何かを達成したのなら、少なからず喜びの感情というのは現れるものだと俺は思ってい る。けど、夢で見た男性にはそれがなかった。そればかりか、大地震が起きて命の危機だというのに、その男は狂気じみた笑みを浮かべてその状況を喜んでいた」

　その説明で優希も納得した様子を見せた。

「確かに変な人かもしれないね。それで蒼空は何がしたいの？」

蒼空はその優希の質問に目を瞑って考えた。そして、１つの答えが出たのか、目を開け 口を開いた。

「俺はその男と話をしてみようと思う」

その言葉に優希は諦めたように「はぁー」とため息をついた。

「わかったよ、それでどうするの？」

「横山さんにお願いしようと思う」

その男の名前は菊池朔と言った。菊池は刺激を欲している。彼には特殊な能力があった。

その能力というのはお告げのようなものだった。なんの前触れもなく突然に、どこからともなく声が聞こえてくるのだ。

その声を頼りに、菊池は２７歳という若さで億万長者となった。

しかし、菊池はお金を手に入れはしたが気持ちが満たされることはなかった。

そしていつからかお告げの能力も発動していない。今までの人生で一番気持ちが満たされたのは学生時代の時だった。

当時菊池は喧嘩ばかりしていた。喧嘩では勝ったり負けたりの繰り返しだった。その時は勝っても負けても楽しいと思えた。

特に楽しかったのは、負けた相手にリベンジが成功した時だった。その勝利は最高の気 分を味わえた。

だが、今はどうだ。菊池は大金持ちとなり完全に勝ち組となっている。もう負けること はないのかもしれない。そう思った時には、ひどく人生というものが退屈に思えてきた。

そんな退屈していた時にそれを打ち破る出来事が１１月１２日から１１月２０日にかけて起きた。１１月１２日にフューチャーフォックスという名前で予言の動画が投稿されているのを見た。これを最初に見た時は、馬鹿な奴がいるもんだなと思った。

しかし、すぐにその考えは否定されることになった。１１月２０日に、日本政府がフューチャーフォックスの動画を認め東京都民を避難することを確定させたからだ。

その結果を見た菊池は、未だかつてないわくわく感を覚えた。

「こんなことを起こせる人物が日本にいたなんてな」

そう呟き、菊池はこのフューチャーフォックスと名乗る人物に会ってみたいと思った。

その人物に会えばどのような刺激が味わえるのかと夢想した。しかし、このフューチャーフォックスと菊池にはなんの接点もない。

どうにかして会え ないものかと考えていると、どこからともなく声が聞こえた。

「もし、あなたが、刺激が欲しいというのであれば、１２月５日金曜日の朝７時４５分に東京タワー近くにあるデパートの宝石店にいなさい」

「……久しぶりにこの声を聞いたな」

その声を最後に聞いたのは５年以上前のことだった。

「そこに行けば俺の求めている刺激が味わえるのか」

そう呟き菊池は久しぶりに心の底から楽しみだと思えた。

それから色々と準備を行った。その際に、１２月５日というのは予言の動画が言っていた地震が起こる日だということを思い出した。しかも、到着する時間帯が７時４５分だ。

フューチャーフォックスは地震が起こるのは午前９時だと言っていたので１時間とちょっとしかない。

これは何かつながりがあるのではと菊池は思ったが、考えても何もわからなかった。

「楽しみは現地でってことか。問題ねぇな」

菊池は笑みをこぼした。色々と準備をしていたが、人手が最低でも１人は必要だと思った菊池は昔の悪友の東新太に電話をかけて呼び出した。最初東は渋っていたが、金を出すと言ったらすぐに了承した。

「あ、あの急に呼び出して何か用ですか」

「ああ、ちょっとな、それと約束していた金だ」

菊池は封筒に入れたお金を手渡した。

「あ、ありがとうございます。そ、それで私は何をすればよろしいのでしょうか」

「ま、簡単な荷物持ちだ」

それを聞いた東は合点がいったように頷いた。

「ああー、避難するときの荷物持ってことですね」

菊池はそれを否定した。

「いや、違ぇな。今の状況ははっきり言って好機だ」

「好機ですか？」

「こんな避難行動で東京から人はいなくなるんだぜ。盗みがしやすい状況にあるってこと だよ」

「盗みですか？けど、警察が、地震が起こる日まで東京で張り込んでいるってニュースでやっていましたよ」

　菊池はその東の質問に問題ないと返す。

「そんなに警察が大量にいるわけがないし、事を起こす当日まで身を潜めておくから問題ねぇな」

「当日というのは？」

　そう質問され菊池は笑みを浮かべた。

「１２月５日の７時半に行動を起こす」

それを聞いて東は驚いた。

「それって確か、予言の動画で言われていた大地震が起こるって言われていた日じゃなかったですか？」

「ああ、そうだが、なんだお前あんな予言にビビってんのか？」

「いえビビってはいないんですが、こんだけ警察が手伝っていると本当に起こるんじゃな いかって思いまして……」

「あんな予言が当たるわけねぇだろ。それに盗むのは宝石だ。お前いま金に困ってんだろ う？俺についてくればそんな生活におさらばできるかもしれねぇぜ」

そう言われ東は少しばかり笑みを浮かべる。しかし、何かに気づいたのか口を開いた。 「けど、菊池さんは確か金持ちでしたよね。そんな盗みをする必要はあるんですか？」

それを聞いて菊池は少し考えるそぶりを見せた。

「ああ、そんな必要はないが、知っているだろう？俺が、刺激が欲しいってことに」

「それで宝石店で盗みをするって事ですか？」

「そういうことだ。盗みに行く場所ももう決めてある。東京タワー近くのデパートの中に ある宝石店だ」

菊池は嘘をついた。宝石を盗むことに刺激があると思っていない。その場所に行くこと で刺激が得られるとお告げで聞いたからだ。

しかし、その日がくるまでは耐久勝負だと思い、都合の良い荷物持ちが必要だと考えた。

そして、荷物持ちに東を選んだ。東が以前金に困っていると聞いていたので懐柔しやすいと思ったからだ。案の定東は話に乗ってきた。

「盗むための道具はとっくに用意してある。とりあえず、１２月５日がくるまで警察にばれないように身を潜める」

そして１２月５日がやってきた。街から警察がいなくなってから歩いて東京タワーまでやってきた。そして、予定通り７時４０分ごろにデパートの中に入り、宝石店の前まできた。

「こんなに宝石がいっぱい……」

東が目を輝かせて言った。菊池は東のその言葉に特に何も言わずあたりを見回す。

特に誰かがいるというわけではない。だが、お告げではここに来れば何か刺激的なことが起こると言っていた。菊池は東と違い宝石には目もくれず辺りを確認する。だが、辺りには宝石以外に何もない。

「菊池さん。この宝石が収められているガラス、持ってきた道具で割っていいんですよね ？」

　菊池は東のその質問に興味なさげに答えた。

「好きにしろ」

そう菊池がいうと、東はウキウキでかばんの中を探る。菊池は時計を確認する。７時５０分となっており、お告げが言っていた時間からすでに５分が経過していた。今までお告げが時間を指定した際は、その時間を外したことがなかった。

まさか、あのお告げは菊池の願望から生み出した幻だったのか？

そう思い始めた時、突然声がした。

「やぁ、あんた達そこで何をしているのかな？」

東のほうを向いたが、驚いた表情をしているだけだった。辺りも見回すが特に誰もいな い。

「探しても俺はそこにはいない」

　その声の主はこちらの様子が見えているのかそう言ってきた。

「こっちが見えているのか。その声どこかで聞いたことがあるな」

「俺の声を聞いたことがあってもおかしくはないな。フューチャーフォックスって知って るか？」

その名前を聞き、菊池は笑みを浮かべた。

「ああ、なるほどな。お前がそうか」

「そうだ。ところでまだ最初の質問の答えが返ってきていない。あんた達は一体そこで何 をしていたんだ？」

　菊池はその質問に挑発的に答えた。

「この状況を見たら察しがつくだろう？宝石強盗さ」

…… 。そう言うと声の主は何か考えているのか黙り込んだ。

「どうした？黙り込んで」

「いや、すまない。少し考えごとをしていた」

しゃべる意思があるか確認したが、どうやらその心配は必要ないようだ。

「ところで君は宝石強盗をして何が欲しかったんだ？」

「そんなもん決まっているだろ。宝石さ」

菊池はこのフューチャーフォックスが何を目的で話しているのか知るため嘘をついた。 「……嘘はつかなくてもいいぞ」

菊池はその断言めいた口ぶりに違和感を覚える。

「なぜ、そう思った？」

「俺がフューチャーフォックスと名乗っているのは未来が見えるからだ」

そう言われた菊池はその意味を考え、１つの答えに辿り着く。

「つまり、その謎の力で俺の未来を見たって言うわけだ」

そう言うとスピーカーから聞こえる声が少し笑った気がした。

「ああ、そう言うことだ」

菊池はフューチャーフォックスがどんな未来を見たのか気になり質問した。

「……俺のどんな未来を見たって言うんだ？」

「俺の見た夢ではあんたの宝石強盗は成功していた。だが、成功はしていたがちっともその表情は嬉しそうにしていなかった」

それを聞いた菊池は声に出すことはしなかったが、心の中でそうだろうなと呟いた。 「そして、俺の予言の通り９時に大地震が起きた時、あんたは地震の真っ只中にいたが、恐怖ではなく心の底から喜んでいた。それが俺には不思議だったんだよ。まぁ、その後、上から落ちてきた看板にペシャンコにされていたが」

ああ、こいつの言っていることは正しいだろうなと菊池は思った。確かにこいつの言う 状況に俺がなったとすると、俺は喜ぶだろう。さて、どうしたものかと考えていると、東 が青ざめた様子でいた。

「ほ、本当にあなたが言った通り、地震が起きるんですか？」

「ああ、１００パーセント起きるよ」

「じゃ、じゃあ俺たちはここで死ぬってことですか？」

「それについては選択肢をあげよう」

「選択肢だと？」と菊池が聞いた。

「ああ、選択肢は２つだ。１つはそのまま宝石を盗んで地震の恐怖を味わうことだ。もう １つは、宝石を諦めて俺の元に来ること。その近くにヘリが停めてある。それに乗ってく ればいい。この２つの選択肢のうちどちらかだ」

この選択肢はあってないようなものだ。

「菊池さん。２つ目の方を選んで助けてもらいましょうよ」

「お仲間はそう言っているがあんたはどうするんだ？」

思い通りに動かされるのはあまり好きじゃない。そう思い菊池はちょっとした反論をし た。

「俺の未来を見たって言うのなら、俺が１つ目の方を選んでも不思議じゃねぇよな？」 「……確かにそうだな」

「俺の行動理念は刺激が得られるかどうかだ。２つ目を選んで果たして俺は刺激を得られるのか？」

そう言うとスピーカーから少しの間、声がしなくなる。菊池は焦らず声が発されるまで 黙って待っていた。

「……それについては、俺はあんたが２つ目を選ぶと思っているんだが」

「なぜだ？」

「それは、俺と喋っている時、あんたは地震に揺られている時と同じ表情をしている。同じような刺激を生きたまま味わえるのと、死んでそれ以上の刺激を味わえない人生、どち らを選ぶのかは明白だと思うんだよね」

それを聞いて、菊池は心の底から楽しくなった。

「ククク、おもしれぇこと言うじゃねぇか。だが、確かにその通りだ。ここは素直に２つ 目の選択肢を選ばせてもらおうじゃねぇか」

「決まりだな。ここでの話は終わりだ。デパートの外に出るといい。迎えがきているはず だ」

「お前と会えるのを楽しみにしているぜ」

菊池はそういい、デパートから出た。デパートから出ると、警察官が１人で立っていた。 「こっちにヘリが停めてある。ついてこい」

どうやらこの警察官はあのフューチャーフォックスの知り合いか何かなのだろう。そう 思い言われた通りついていった。

ついていった先にヘリがあった。広々とした道路に停められてある。車が一台も通って いない利点だなと菊池は思った。

「さて、俺をフューチャーフォックスの元へ連れていってくれ」

菊池はこれからフューチャーフォックスに会えることに喜びを感じ、笑みをこぼした。

「ふー、なんとか話が成立してよかった」

俺は先ほどのデパートでの話し合いが疲れて、ため息をはいた。

「よかったね」

優希は緩やかな笑顔を浮かべていた。

「あの男がこのホテルにやってくるのは、東京で地震が起こる前にやって来るだろう。ヘリは早いからな」

「そうだね。それまでのんびりしていよっか」

そしてそれから待つこと８時５０分。ホテルのとある一室に、俺、優希、直充、横山、田中、菊池が集まった。

そこには４人がけの椅子と机があり、一番奥の右側に俺が座り、その隣に優希が、手 前の右側には菊池が座り、その隣に横山が座っている。直充は俺と優希の後ろで立っていて、田中は横山の後ろで尋問部屋の時と同じようにビデオカメラを持って立っている。 席に座るとすぐに横山が喋り始めた。

「まず、菊池君のお仲間である東君というものには、埼玉にある家に帰りたがっていたよ うだから帰らせた」

それに対し、菊池は特に何も言わない。

「さて、お互いに聞きたいことがあるのだろう？思う存分話すといい」

その言葉を聞いて菊池は俺の方を睨みつけ口を開いた。

「お前がフューチャーフォックスなのか？」

その名前で言われるのはあまり好きではないため、俺は顔をしかめ名前で呼ぶようにと伝えた。

「……ああ、そうだが、俺の名前は福田蒼空だから、そっちは使わないでくれ」

菊池は呼び方などなんでもいいのか、素直に受け入れた。

「そうか、存外普通な顔をしているな。福田。喧嘩も弱そうだ」

「まぁな。確かに喧嘩も弱い。だが俺には頼れるボディガードがいるんでね」

そう言われ菊池は直充の方を見た。

「確かにボディガードの方は強そうだな」

「さて、菊池、あんたの質問には答えたんだ。次はこちらが質問させてもらう」

菊池は笑みを浮かべ、話を促す。

「なぜ宝石店に行ったんだ？宝石を手に入れるのはお前の望む刺激じゃないはずだ」

俺は菊池に対し疑問に思っていたことを直球で聞いた。

それを聞いてさらに菊池は笑みを深めた。

「ははは、そうだな。確かに宝石を手に入れるのは俺の望む刺激じゃない」

「だったらどうして？」と優希が聞いた。

「簡単さ。俺にはある特殊な能力がある」

それを聞いてその場にいる全員は驚いた表情を浮かべる。

「その能力というのはなんだ？」と俺は聞いた。

「俺の能力は、一言で言えばお告げだな。どこからともなく声が聞こえてくるんだ。今回 宝石店に行ったのはその声を聞いたからだ」

その言葉に全員が再び黙り込む。１番最初に口を開いたのは横山だった。

「一応確認だが、そのことについて、嘘は言っていないな」

菊池は隣の横山の方を向き、挑戦的な笑みを浮かべた。

「ああ、嘘は言ってねぇよ」

「そうか、それならいい」

そう言われた菊池は少しだけ驚いた。

「ほう、追求しないのか？」

「嘘かどうかなんてことは後でわかることだからな。とりあえず聞いてみただけだ」

菊池は言われた意味が理解できなかったが、とりあえず今は別にいいと思い納得しておいた。

「そうかよ」

話をしていると時刻が８時５９分になっていた。直充は部屋にあるテレビの電源をつけ た。テレビ番組は、上空から撮影されている東京の映像ばかりが流れていた。

そして時刻が９時となった。映像からだったが、建物が揺れており地震が起きていることがはっきりとみてとれる。番組を変えると別の地域の東京の上空からの映像があった。 古い建物が映し出されており、倒壊していた。

直充は携帯でＳＮＳを見ていたのか、机の上に携帯を置いて全員に見えるようにした。 「ＳＮＳでも凄い反応だぜ。予言者の言った通りになったとか、予言者の言うことを聞いた日本政府は優秀だとか、好き勝手言っているみたいだな」

その直充の話を聞いて優希は笑顔になった。

「本当、手のひら返しが凄いよね」

それに対し横山が冷静に言った。

「まぁ、仕方ないことだな。意見が変わるというのはよくあることだ」

菊池と蒼空は彼らが話しているのを黙って聞いていた。３人がそうやって話すのをしばらく聞いていたが、菊池がテレビの電源を消して蒼空の方を向いた。

「福田、あんたにも俺と似たような特殊能力があるんだろ？それを教えてもらってもいい か？まぁ大体察しはついているがな」

　菊池はそういい不適な笑みを浮かべた。

「……いいだろ。俺の能力はお察しの通り未来予知さ。菊池、あんたのように突然声が聞 こえてくるという訳じゃなく、寝ている時に見れるんだ」

「寝ている時に見える。……正夢か」

「ああ、その通りだ。俺は正夢を見て未来予知をしている」

「ふん、やっぱり特殊能力があったか。俺以外にもいるのは驚いた」

そう言った菊池は驚いているというよりは、どこか楽しそうだった。

「さて、お互いに聞きたいことも聞けたようだね。そろそろ私の方からいいかね？」

話の区切りがいいと判断したのか横山がそう口にした。

何事かと思いその場にいる全員が横山の方を向いた。

「前に福田さんには言ったよね？頼みたいことがあると」

「……はい、言ってましたね」

そう返事をすると、横山はニコリと笑った。

「実は、特殊捜査本部という部隊を作ろうと思っていてね。この場にいる人たちにはその 特殊捜査本部に入ってもらいたいんだ」

そう横山が言うと田中以外のその場にいる全員が驚いた。

「特殊捜査本部では、今回のように特殊能力を用いた捜査をしようと思っている」

全員が驚いている中、横山は冷静に話を続けた。

「ちょっと待ってください。横山さん、確かあなた政府の関係者だって言ってましたよね？なんで刑事のようなことをしようとしているんですか？」

話が理解できないのか、直充が横山の話に割り込んで聞いた。

「刑事のようなではなく、文字通り刑事として働く。すでにコネをフル活用して準備ずみ だ」

話しを聞いていて冷静になったのか菊池が横山に聞いた。

「作るのは別に勝手だが、なんで俺もそれに入らなくちゃいけねぇんだ？」

その菊池の問いに、横山は悪そうな笑みを浮かべた。

「菊池さん。君には拒否権がないんだ。なぜなら、ここで了承しないと宝石泥棒の件は不 問にしないからね」

そう言われ、菊池は「ちっ」と舌打ちをして黙り込んだ。

「まぁ、ですが菊池さん。君が求めていた刺激があると思うのでその辺は心配しなくて結 構だ」

その言葉に対しては特に何も文句はないのか菊池は黙っていた。

「それで、福田さん。君は確か前に働いていた職を今回の地震騒動のためにやめたんだろ う？早く新しい職に就きたいとは思わないかい？」

「……まぁ、そうですね」

俺は諦めるようにそう返事をした。

「石川さんと柴田さんの２人も参加でいいですね？」

「蒼空が参加するならいいですよ」

優希は笑顔でそう答えた。

「まぁ、俺も特に問題はないかな」

直充も渋々と言った様子で頷いた。

「それではこの５人で特殊捜査本部を結成するということで問題ないな？」

「了解」

その場にいる全員がそう言い頷いた。

「ところでさ、特殊捜査本部って名前なのに、特殊能力を扱えるのは蒼空と菊池さんだけだよね？」

優希が疑問に思ったのかそう口にした。

「それについては多分もう１人いると思うよ」

俺は冷静にそう言い横山の方を向いた。

「気づいていたか。私も確かに特殊能力がある。嘘を見破る特殊能力だよ」

それを聞いて俺と田中以外は驚いた表情をした。俺はそれを聞いて納得した。

「だから、俺の話を信じてくれたんですね」

そう俺が言うと、これまでの横山の言っていたことを思い出したのか、直充はどこか納得した様子だった。

「そういうことだ。さて、これで話は終わりだな。仕事が始まるまでこのホテルでのんびりしておいてくれ。東京の建物の修繕や人々の移動でしばらくは仕事は始まらないだろう」

それで、その日の話し合いは終了となり、 各自それぞれ自分の部屋に戻っていった。 俺は自分の部屋に戻り、１人になった途端、ベッドに寝転んだ。これまでの疲れが溜まっているのかそのまま眠りについた。

気づけば、また正夢を見るところに来ていた。辺りは電気がないのに少し明るく、周りにはテレビと机とその上にはテレビのリモコン、そして俺は椅子に座っている。俺は その椅子に固定されているのか立つことができない。慣れたもので特にその光景に驚くこともなくテレビリモコンを手に取りテレビの電源をつけた。映像には俺が映っていた。どこかの家にいるようだ。蒼空の近くには女性と子供がいるが、その２人にはなぜかボヤがかかったように顔が見えない。その２人の顔が見えなくても俺自身の顔を見る限りとても楽しそうな表情を浮かべていた。いつもの正夢の通り、何か起こると思って身構えていた蒼空だったが、その幸せそうな 映像が映し出されているだけだった。その幸せな映像を見て蒼空は、こんな正夢もあるんだと微笑んだ。

終わり